

とよ た おおつか なかよしわら
富山市豊田大塚・中吉原遺跡
発掘調査報告書

-DSG WORLD 豊田店駐車場棟新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 -

2013

富山市教育委員会

とよ た おおつか なか よしわら
富山市豊田大塚・中吉原遺跡
発掘調査報告書

-DSG WORLD 豊田店駐車場棟新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 -

2013

富山市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、富山市豊田本町3丁目地内に所在する豊田大塚・中吉原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、DSG WORLD 豊田店駐車場棟新築工事に伴うもので、西原物産株式会社から委託を受け、富山市教育委員会埋蔵文化財センターの指導・監理の下で北陸航測株式会社が実施した。
- 3 調査期間、調査面積、調査担当者は以下のとおりである。

調査期間	現地調査　平成24年9月21日～平成24年10月31日
	出土品整理　平成24年11月1日～平成25年7月31日
調査面積	1,031 m ²
- 4 調査担当者　監理担当　富山市教育委員会埋蔵文化財センター　主査学芸員　堀内大介
　　調査担当　北陸航測株式会社　学芸員　朝田　要　橋　日奈子
- 5 本書は、第Ⅰ章第1節・第Ⅱ章を堀内が、第Ⅰ章第2節・Ⅲ・Ⅴ章を朝田が執筆した。編集は堀内・朝田が行った。
- 6 自然科学分析は、株式会社古環境研究所・株式会社吉田生物研究所に委託し、その成果は本書「第Ⅳ章　自然科学分析」に掲載した。また出土木製品の保存処理は、株式会社古環境研究所・株式会社吉田生物研究所に委託し、糖アルコール保存処理法および高級アルコール処理法を行った。
- 7 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
- 8 調査にあたり、豊田本町3丁目町内から多くのご協力を賜った。記して謝意を表します。

凡　　例

- 1 本書で用いた座標は国土座標VII系に準拠した。方位は真北、水平基準は海拔である。
- 2 土層及び遺構埋土、遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に掲載した。
- 3 遺構記号は、堅穴建物:SI、掘立柱建物:SB、道路:SF、畠:SN、溝・沼:SD、土坑:SK、柱穴:SP、性質不明遺構:SXを用いた。
- 4 遺構番号は、調査時に付した番号をそのまま使用した。
- 5 図中のアミカケは、各頁に凡例を示している場合を除き、以下のとおりである。

	スス・炭化物・油煙痕		赤彩		地山
---	------------	---	----	---	----
- 6 遺構一覧・遺物一覧の凡例は以下のとおりである。
 - ①遺構埋土に切り合い関係がある場合は、遺構一覧表特徴欄に古く新のように記号で記す。
 - ②規模・法量の（　）は現存長である。

目　　次

第Ⅰ章　調査の経過	
第1節　調査にいたる経過	1
第2節　発掘調査及び整理作業の経過	1
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境	
第1節　地理的環境	2
第2節　歴史的環境	2
第Ⅲ章　調査の方法と成果	
第1節　調査の方法	5
第2節　自然地形と基本層序	5
第3節　遺構	5
第4節　遺物	15
第Ⅳ章　自然科学分析	
第1節　環境考古学分析	48
第2節　放射性炭素年代測定	58
第Ⅴ章　総括	
第1節　豊田大塚・中吉原遺跡と周辺遺跡の様相	63
第2節　古墳時代初頭～前期土器の組成及び編年の位置付け	66
第3節　折衷型土器について	71
写真図版	

挿図目次

第1図 周辺の遺跡	3
第2図 調査区位置図	3
第3図 調査区割図	6
第4図 基本層序	6
第5図 古墳時代遺構出土上師器器種分類	17
第6図 遺構全体図	26・27
第7~17図 遺構実測図	28~38
第18~26図 遺物実測図	39~47
第27図 花粉ダイアグラム	50
第28図 主要珪藻ダイアグラム	53
第29図 主要遺構の変遷と周辺の遺跡	65
第30図 古墳時代の周辺遺跡の様相	65
第31図 古代の推定道路と集落遺跡・莊園比(擬)定地	65
第32図 古代推定道路図	65
第33図 古墳時代主要遺構出土遺物	68
第34図 折衷型土器	72

表目次

第1表 遺構一覧	12~14
第2表 遺物観察表	21~25
第3表 花粉分析結果	51
第4表 珪藻分析結果	54・55
第5表 種実同定結果	55
第6表 樹種同定結果(1)	56
第7表 樹種同定結果(2)	57
第8表 放射性炭素年代測定試料及び処理	59
第9表 放射性炭素年代測定結果	59
第10表 主要遺構出土古墳時代土師器の出土数量	69
第11表 主要遺構出土古墳時代土師器 器種・組成グラフ	69

写真図版目次

図版1 航空写真・第1工区全景
図版2 調査区全景
図版3 沼
図版4 沼・溝・土坑
図版5 壓穴建物・土坑
図版6 柱穴・溝
図版7 土坑
図版8 第2工区全景・溝・土坑
図版9 掘立柱建物・土坑・溝・作業風景
図版10~12 SD01 出土土器
図版13 SD01 SD51 SK35 SX157 出土土器
図版14 SK32 SK35 SD01 出土土器
図版15 SD01 SD51 SD55 SD66 SD72 SD98 SI61 SI107 SK32 SK35 出土土器
図版16 SI107 SP8 SP26 SP27 SK32 SK34 SK35 SK36 SK48 SK178・SX157 出土土器
図版17 古代以降遺構出土土器・II層出土土器・陶磁器・土製品・石製品
図版18 SD01 SB3-SP15 SB1-SP26・SP27 SB2-SP52・SP53 出土木製品

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査にいたる経過

豊田大塚・中吉原遺跡は、昭和 63 年～平成 3 年に富山市教育委員会が実施した分布調査で発見した遺跡である。平成 5 年に「豊田大塚遺跡」(市No.201197)、「豊田中吉原遺跡」(市No.201198)として、『富山市遺跡地図』に登載し、周知の埋蔵文化財包蔵地として取り扱うこととなった。平成 14 年に遺跡が所在する地名を基に「豊田大塚遺跡」から「豊田大塚・中吉原遺跡」へと改称した。

平成 7 年、豊田大塚遺跡において店舗建築に先立ち、1,500 m² の発掘調査を実施した。調査の結果、縄文時代晚期～弥生時代終末期の沼跡、弥生時代終末期の木道跡・土坑・井戸・さらし場遺構・土器集中廃棄、平安時代の溝を検出した。特筆すべきは、平安時代の溝から出土した律令祭祀具である人面墨書き土器・人形・斎串である。本遺跡の北方約 1.1km に位置する米田大覚遺跡は「新川郡衙」と比定しており、祭祀具が出土した溝は新川郡衙の祭祀場と考えた。また、沼には御物石器、石刀、土偶など縄文時代晚期の祭祀遺物の廃棄や弥生時代終末期の土器集中廃棄が見られ、縄文時代や弥生時代に水辺の祭祀が行われていたと推測した（市教委 1998）。

平成 24 年 7 月 13 日、DSG WORLD 豊田店駐車場棟新築工事について埋蔵文化財所在の照会がなされ、建設予定地全域 3,890.61 m² が埋蔵文化財包蔵地「豊田中吉原遺跡」に含まれているため、試掘調査を行うこととした。事業者である西原物産株式会社との事前協議で、現状の青空駐車場の一部はアスファルトを除去せず、そのまま利用することが分かり、その部分 1,946 m² は試掘調査から除外した。同年 9 月 4 日～5 日に市教委による試掘調査を実施し、駐車場棟新築範囲のうち 1,851 m² に遺跡の所在を確認した。調査では弥生時代終末期～古墳時代前期の溝・土坑・ピットを検出し、縄文土器、弥生土器、古墳上師器、古代須恵器などが出土した。

この調査結果に基づき、事業者と建設にかかる埋蔵文化財の取り扱いの協議を重ねた結果、基礎杭および地中梁部分、エレベーター部分の掘削工事が遺構面に達することから、その範囲 1,031 m² (杭・梁が集中する中央部分・エレベーターを含むエレベーターとの連結部分は全面調査) について記録保存のための発掘調査を実施することとした（第3図）。発掘調査は、西原物産㈱の全面協力を受け、事業者と委託契約した民間発掘会社が行い、市埋蔵文化財センターが監理することとした。民間発掘会社は、北陸航測株式会社が選定された。

この協議結果措置について、平成 24 年 9 月 19 日付けで、西原物産㈱・市教育委員会・北陸航測㈱の三者による協定を締結し、9 月 21 日より発掘調査に着手した。

今回の調査結果に基づき、「豊田中吉原遺跡」が「豊田大塚・中吉原遺跡」と一連の遺跡と考えられたため、平成 25 年 3 月に 2 遺跡を統合し、『富山市遺跡地図 改訂版』に新たに「豊田大塚・中吉原遺跡」(市No.2010246) として登載した。本報告書は、新たな名称で刊行するものである。（堀内）

第2節 発掘調査及び整理作業の経過

平成 24 年 9 月 21 日から重機による碎石除去を行い、碎石除去完了後の翌 25 日から表土機械掘削を開始した。立体駐車場建設に向けて現地発掘調査期間が短期間に限られていたことから、表土掘削と併行して人力による遺物包含層掘削・遺構検出を行った。9 月 28 日に調査区北側の第1工区の遺構検出を完了し、翌 29 日に検出状況の写真を撮影した。10 月 1 日から遺構掘削を行い、10 月 16 日にはラジコンヘリによる第1工区の空中写真測量を行った。

第1工区の遺構掘削と併行して第2工区の表土機械掘削を 10 月 11 日から行った。翌 12 日から人力による包含層掘削・遺構検出を行い、20 日から遺構掘削を開始した。10 月 25 日に遺構掘削を完了し、30 日にラジコンヘリによる第2工区の空中写真測量を行った。以上の作業と併行して、随時写真撮影・トータルステーションによる測量・図面作成作業等を行った。現地調査は 10 月 31 日に完了した。

遺物整理・報告書作成作業は現地作業終了後、11 月 1 日から北陸航測株式会社で実施した。作業内容は、遺物洗浄・注記・接合・復元・実測・トレースの他、原稿執筆・遺物写真撮影・図版作成である。平成 25 年 7 月 31 日に本書を刊行して業務を完了した。

（朝田）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

本遺跡は、富山市の北部に位置し、豊田本町3丁目地内に所在する。県道八幡田・稻荷線が遺跡中央を縱断する。

本遺跡が位置する豊田本町3丁目は、富山市街地から北北東約4kmにある。北方約4kmには富山湾があり、西方約2kmには神通川が北流し、東方約3.4kmに常願寺川が北流する。この辺りは、神通川と常願寺川により複合扇状地が形成され、その過程で多くの自然堤防が発達した。本遺跡が所在する自然堤防は、南の豊田本町1丁目から北の豊若町1丁目にかけて広がり、北西から南東にゆるやかな傾斜をもつ。標高は8~10mを測る。調査地点の現標高は約8.5m、遺構検出面は約7.5mである。

この自然堤防の南東には、「フゴ」と呼ばれる常願寺川の伏流水が湧き出す湿地帯が広がり、現在もその名を冠した地名（上富居、中富居、下富居）が残る。「フゴ」から西の自然堤防には、いくつかの谷地形が開析している。本遺跡北側の谷地形はその一つである。最も急峻な谷地形は、本遺跡と南の豊田遺跡との間にあり、元々は地続きだった自然堤防が氾濫により分断されたものと推定している（市教委1974）。

第2節 歴史的環境

本遺跡の周辺の自然堤防には、縄文時代晚期から遺跡が頗著になり、近世に至るまで継続的に遺跡が営まれている。

縄文時代前期には、この頃に起きた海進により広がった旧放生津潟の湖畔や内陸の丘陵上に集落が営まれ、神通川左岸には小竹貝塚、蜆ヶ森貝塚などが知られる。縄文時代後・晚期には海退が進み、海岸砂丘上に晚期前半の「岩瀬天神式土器」の標識遺跡である岩瀬天神遺跡や浜黒崎野田・平坂遺跡などが営まれる。本遺跡周辺の自然堤防上には、豊田遺跡、豊丘町遺跡がある。

弥生時代前期には、神通川左岸の打出遺跡や右岸の豊田遺跡、宮町遺跡などが知られるが、散発的に確認される程度である。弥生時代中期中葉以降になると遺跡数が増加し、前期から継続する遺跡に加え、岩瀬天神遺跡や浜黒崎悪地遺跡など海岸部にも立地するようになる。豊田遺跡では、緑色凝灰岩、翡翠、管玉など玉作関係遺物が出土した。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけては各地で遺跡数が増加する。神通川旧河道流域では、左岸に打出遺跡（法仏式～高畠式）、今市遺跡（月影式）、八町II遺跡（高畠式）など、右岸に四方荒屋遺跡（戸水B式～古府クルビ式）、四方背戸割遺跡（戸水B式～法仏式）、永代割遺跡（法仏式～古府クルビ式）などの集落遺跡が所在する。打出遺跡では、県内最多の鉄器が出土し、神通川・常願寺川下流域の拠点的集落であったと評価している（市教委2006）。神通川左岸の河岸段丘上には、百塚遺跡・百塚住吉遺跡があり、当該期の方形周溝墓や前方後方墳、前方後円墳を28基発掘し、與羽山丘陵北端部に「百塚古墳群」が造営されることを確認した（市教委2009・2012）。

白岩川流域では、新堀西遺跡（法仏式～高畠式）、清水堂南遺跡（法仏式～月影式）、浦田遺跡（古府クルビ式、舟橋村）、利田横枕遺跡（古府クルビ式～高畠式、立山町）などの遺跡が所在する。白岩川や上市川流域では、いくつかの「ムラ」を形成し、それらを統括する「新川のクニ」というべき政治社会が形成されつつあったとされる（久々2001）。中でも、新堀西遺跡は古墳時代前期まで長期継続する集落遺跡であり、打出遺跡のように交流拠点としての役割を持つ拠点的集落であったとされる（青山2013）。白岩川流域には「白岩川流域古墳群」が形成された（鹿島1999）。弥生時代終末期には、清水堂南遺跡で方形周溝墓や円形周溝墓が作られた。古墳時代前期には、竹内天神堂古墳（前方後方墳、舟橋村）、柿沢古墳群（立山町）が築造された。

本遺跡のある神通川と常願寺川に挟まれた地域では、飯野新屋遺跡、宮町遺跡などが知られており、飯野新屋遺跡では月影式～古府クルビ式の井戸や構などを検出し、宮町遺跡では溝や井戸などを検



第1図 周辺の遺跡 (1:50,000)

1. 畠山城跡・今市遺跡
2. 今市遺跡
3. 豊田本郷丁遺跡
4. 高見町遺跡
5. 大森遺跡
6. 豊丘遺跡
7. 桜井遺跡
8. 丁子山遺跡
9. 有内山界隈遺跡
10. 伊豆河原遺跡
11. 伊豆河原遺跡
12. 伊豆河原遺跡
13. 伊豆河原遺跡
14. 伊豆河原遺跡
15. 伊豆河原遺跡
16. 伊豆河原遺跡
17. 伊豆河原遺跡
18. 伊豆河原遺跡
19. 伊豆河原遺跡
20. 伊豆河原遺跡
21. 伊豆河原遺跡
22. 伊豆河原遺跡
23. 伊豆河原遺跡
24. 伊豆河原遺跡
25. 伊豆河原遺跡
26. 伊豆河原遺跡
27. 伊豆河原遺跡
28. 伊豆河原遺跡
29. 伊豆河原遺跡
30. 伊豆河原遺跡
31. 伊豆河原遺跡
32. 伊豆河原遺跡
33. 伊豆河原遺跡
34. 伊豆河原遺跡
35. 伊豆河原遺跡
36. 伊豆河原遺跡
37. 伊豆河原遺跡
38. 伊豆河原遺跡
39. 伊豆河原遺跡
40. 伊豆河原遺跡
41. 伊豆河原遺跡
42. 伊豆河原遺跡
43. 伊豆河原遺跡
44. 伊豆河原遺跡
45. 上ノ原遺跡
46. 金子遺跡
47. 金子遺跡
48. 金子遺跡
49. 金子遺跡
50. 金子遺跡
51. 金子遺跡
52. 金子遺跡
53. 金子遺跡
54. 金子遺跡
55. 金子遺跡
56. 金子遺跡
57. 金子遺跡
58. 金子遺跡
59. 金子遺跡
60. 金子遺跡
61. 金子遺跡
62. 大野遺跡



第2図 調査区位置図 (1:4,000)

出し、玉作関係遺物が豊富に出土した。本遺跡の西には、古府クルビ式期に築造された方墳であるちょうどよう塚がある。

古墳時代中期では、白岩川流域に県史跡・稚児塚古墳（円墳、立山町）をはじめとして、藤塚古墳（円墳、立山町）や塚越古墳（円墳、立山町）、清水堂大塚古墳（円墳）、若王子塚古墳（円墳）、宮塚古墳（方墳）など数多くの古墳が築造される。

奈良～平安時代には、古代律令期に関わる遺跡が多数所在する。本遺跡の北方約1.1kmにある米田大覚遺跡では掘立柱建物32棟、井戸、道路構造などを検出し、208点にも及ぶ墨書き器や石器、綠釉陶器、風字硯などが出土したことから、「新川郡衙」と考える（市教委2006）。常願寺川右岸にある水橋荒町・辻ヶ塚遺跡は、『延喜式』に記載された越中八駅の一つである「水橋駅」と推定される。神通川左岸の百塚住吉D遺跡では、馬小屋の可能性がある大型土坑を検出し、婦負郡「寒江郷」との関連性を指摘した（市教委2012）。また、打出遺跡、水橋金広・中馬場遺跡などでは、古代北陸道と考えられる道路跡が確認されている。藤田富士夫氏は駅路の他、郷を結ぶ通路や東大寺領莊園「丈部荘」「大荘荘」比定地も含めた検討をしており（藤田1998・2001）、本遺跡を通る交通路の存在を指摘している。北は「磐瀬駅」に比定される蓮町遺跡や「新川郡衙」に比定される米田大覚遺跡への道路、東は水橋金広・中馬場遺跡周辺を比定地とする「丈部荘」開田団の「尾前道」、南は「宅持」の墨書き器が出土から官衙関連施設の可能性のある「総曲輪遺跡」方面への道路を想定している。

中世になると、海岸部に大村城、日方江城などの城館、白岩川流域には小出城や仏生寺城（舟橋村）などが築かれる。神通川左岸には中世の遺跡が集中する。この辺りは、室町時代頃に成立した『廻船式目』にみえる十大港（三津七湊）の一つである「越中岩瀬湊」の有力候補地とされる。四方荒屋遺跡、四方北窓遺跡や打出遺跡などでは中国製陶磁器の出土や屋敷跡などを確認し、港湾都市的な性格が考えられている（中世岩瀬湊調査研究グループ2004）。白岩川流域では、水橋尊光寺遺跡や水橋金広・中馬場遺跡などの集落遺跡が所在する。水橋金広・中馬場遺跡では、遺跡の西側北部で中世後期～近世初期を主体とする大溝で区画された館跡を検出し、出土遺物にヤスを線刻した木彫白、金属製のヤスなどがあることから、中世末から近世にかけて河川漁にかかる生業が営まれていた館跡と推測した（市教委2001・2006）。米田大覚遺跡では、中世後期の居館の区画溝などを検出し、荘園「米田保」との関連を指摘した（市教委2009）。千原崎遺跡は、中世末から近世にかけて神通川にかかる渡し場の宿場的な遺跡と考えられる。

（堀内）

引用・参考文献

- 青山 晃 2013『第V章 新堀西遺跡 6回括』『上梅沢遺跡 水橋金広・中馬場遺跡 新堀西遺跡発掘調査報告』
（公財）富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 鹿島昌也 1999『白岩川流域古墳群』『シンポジウム富山平野の出現期古墳』富山考古学会
- 久々忠義 2001『亦生農村の風景と政治社会の誕生』『ふるさと富山歴史館』富山新聞社
- 中世岩瀬湊調査研究グループ 2004『海中から中世岩瀬湊を探る』15年度海底探査報告』『富山市日本海文化研究所報』第33号 富山市日本海文化研究所
- 富山市教育委員会 1974『富山市農田遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 1994『富山市農田大覚遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2001『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2006『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書II』
- 富山市教育委員会 2006『富山市打出遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2006『富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2009『富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2009『富山市百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2012『富山市百塚遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2012『富山市百塚住吉D遺跡発掘調査報告書II』
- 藤田富士夫 1998『東大寺領大蔵荘の現地比定と遺跡』『古代探求』中央公論社
- 藤田富士夫 2001『東大寺領越中園莊園「丈部荘」の現地比定と若干の考察』『富山史蹟』135・136号 富山史蹟会

第Ⅲ章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

発掘調査は、建設工事の工程上、北側の引き渡しを早急に求められていたため、調査区を南北の2工区に分け、調査を進めた。また、調査区の形状が複雑であるため、調査対象外区域の表土・砕石を残したまま調査を進めると崩落の恐れが大きいことから、最初に建設工事予定区域全域 2,550 m²の表土・砕石をバックホウで除去した。そののち調査範囲をトータルステーションで測量・設定し、試掘調査の結果を踏まえながら、造成盛土等表土を遺物包含層上面までバックホウにより掘削・除去した。バックホウによる表土掘削が、安全と認められる範囲まで進んだ段階で遺物包含層の人力掘削を開始し、合わせて遺構検出を行った。北側の第1工区の遺構検出が終了した段階で検出状況写真を撮影し、遺構掘削を開始した。第1工区の進捗段階に応じて、南側の第2工区のバックホウによる表土掘削・除去、人力による包含層掘削を進めた。第1工区の空中写真測量、残務、完了検査と同時に第2工区の遺構検出を行い、検出状況写真撮影後、第1工区と同様の工程で調査を進めた。

遺構は断面観察用の畦を残して掘削したが、調査区内外周壁が遺構断面にかかり断面観察が出来るのは、畦を残さず掘削した。断面は写真・図面記録をとったのち、完掘した。重要と認められる遺構出土遺物は、出土状況写真を撮影し、出土状況図を作成したのち、トータルステーションを使用し出土位置の三次元データを取得した。

複雑な調査範囲のバックホウによる掘削順序を明瞭化するため、掘削を進める北東端から掘削範囲・トレーナー単位でナンバリングし（第3図①～④）、表土掘削で出土した遺物は、この番号単位で取り上げた。また測量基準点設置後に、X80600.000Y6400.000をF2南西角基準点、南西端を起点A1とする、国土地標第VII系と同調し全調査範囲をカバーする10m単位の方形区画を設定した（第3図）。この方形区画を基準に、概略図の作成や空中写真測量、遺物包含層出土遺物の分類整理などの作業を行った。また、A1を起点に、南北方向をX1～X70、東西方向をY1～60まで2m単位で方形区画を細分した小グリッドを設定し、遺物包含層掘削時の遺物取り上げに使用した。

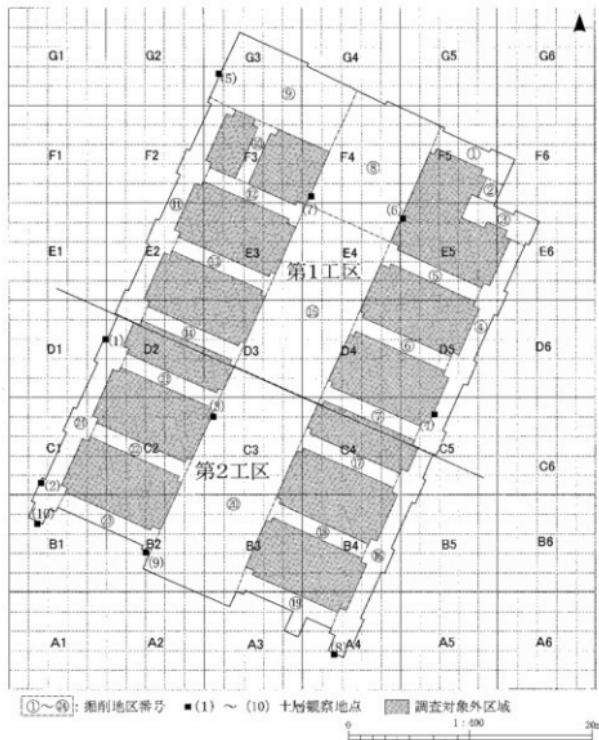
第2節 自然地形と基本層序

調査地周辺の現況はほぼ平坦で、宅地として利用されている。海岸線からの距離は約4kmで、現況の標高は約8.5mである。当調査区を含め近隣地域は微高地であり、南から海岸線のある北側に向かって緩やかに傾斜する地形が広がる。旧地形では、蛇行していた神通川の河道に代表される多数の旧河道や河岸段丘、湿地帯や微高地があり組んだ複雑な旧地形が復元される。今回の調査区の遺構検出面の標高は約6.6～7.5mであり、約150m北東に位置する1995年（平成7年）度調査区（旧豊田大塚遺跡）の遺構検出面の標高8.7mと比べ最低でも約1m低く、豊田大塚・中吉原遺跡範囲全体として東に向かって緩やかに傾斜し低くなる地形が復元できる。また調査区北端で確認した縄文時代晩期～古代まで存続した沼の痕跡は、1995年度調査区の旧沿地とつながるものと推察できる。

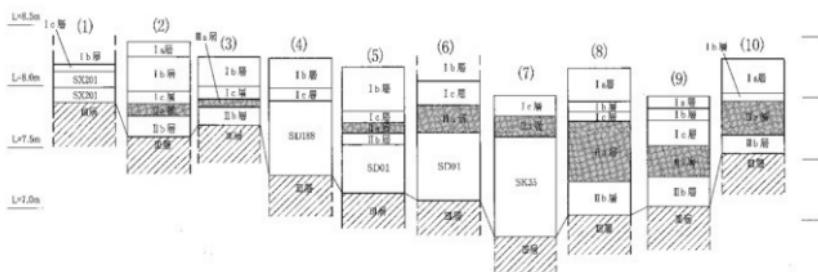
調査区の基本層序は、主に調査区壁面を用いて観察を行った。層序は表土・砕石・盛土から下を、Ia層からIII層までの6層に分けた。上層からIa～c層：灰黄色／灰黄褐色シルト（旧表土）、IIa層：黒褐色シルト（遺物包含層）、IIb層：黄灰色シルト（漸移層）、III層：灰黄色シルト（地山／遺構検出面）である。今回の調査では、一部でIIb層上面で検出できる遺構がみられたが、III層上面で明瞭に確認されたため、上層で検出できた遺構は輪郭を残して掘り下げ、そのほかはIII層上面で検出した。

第3節 遺構

遺構は調査区全域で検出した。検出した遺構の総数は244を数え、種類は、沼1基、溝58条、堅穴建物2棟、掘立柱建物4棟、土坑157基、性質不明遺構4基、柱穴18基である。遺構の時期は、主に古墳時代前期、古代、中世の3期に属すると考えられる。調査区は、北西と中央部分を除く調



第3図 調査区割図



盛土 : 10YR4/1 淡灰色シルト
 Ia 層 : 2.5Y6/2 灰黄色シルト
 Ib 層 : 10YR5/2 灰黄褐色シルト (2.5Y3/1 黑褐色シルト
 ブロック状 10%混)

Ic 層 : 10YR5/2 灰黄褐色シルト
 IIa 層 : 2.5Y3/1 黑褐色シルト (漬物包含層) [■]
 IIb 層 : 2.5Y1/1 黄灰色シルト (漬移層 / 上岩邊構検出面)
 III 層 : 2.5Y6/2 ~ 7/2 灰黄色シルト (地山 / 下岩邊構検出面) [■]

第4図 基本層序

査範囲はトレーナーを組み合わせた形状を呈しており、調査区内に多くの調査対象外区域が存在する。

1. 古墳時代

(1) 沼、溝

SD01 (G3 ~ 5 区・F4 ~ 6 区・E6 区 / 第6~9図、写真図版3・4)

調査区北端に位置し、調査区外に拡がる沼の南肩部分である。東西方向に長軸を持ち、調査区内で全長約36m、最大幅約14m、最深部で約1.1m、調査区内で総面積は約211.8m²を測り、調査範囲の1/5以上を占める。自然科学分析の結果から、自然流路→沼→沼澤湿地という経過を辿ったと考えられ、当該期は沼であった可能性が高い。また、北西に位置する1995年度調査区で検出した沼跡の延長部分と推察できる。

埋土は大きく3層に分けられる。第1層（上層）は暗灰黄色シルトを基調とする。自然科学分析の結果から、沼の大部分が埋没し貯水機能がほとんど失われた段階、周辺地域と比較して相対的に低地であった時期に堆積したものと考えられる。そのため、周辺地域から流入した土師器、須恵器、珠洲、越中瀬戸、近世陶磁器など多様な遺物の小破片が出土した。

第2層（中層）は黒色／黒褐色シルトを基調とするもので、下位にはアシ・ヨシ類の植物遺体が多量に混じる。遺物は縄文土器、古墳時代の土師器、石器、木製品、種子等が出土した。調査区北東端には、保存状態が良好な板材が出土したが、まとまりがなく広がっており、人為的な構築物としての規則性はみられない。また中央付近には、第2層の最下部、第3層や地山との境付近に、古墳時代前期の土師器が集中して出土する地点（第7・8図-1・3、写真図版3-1~4）、部材や古墳時代前期の土師器がまとまって出土する地点（第7・8図-2、写真図版3-5、4-1）などがある。

第3層は黄灰色シルトで、第2層と同様にアシ・ヨシ類の植物遺体が多量に混じるが、無遺物層である。調査区内におけるSD01遺構埋土の最下層である。

遺物の出土量は中型コンテナ25箱を数える。主に縄文時代晩期の土器（1~7）、古墳時代初頭～前期の土師器（8~52）、石製品（176~178）、弥生時代後期～古墳時代前期・古代の部材・加工木（190~199）等が出土している。縄文土器、古墳土師器が主体である。

放射性炭素年代測定の結果、縄文土器付着炭化物（試料No.7）から2380±30BP、部材（193、試料No.4）から1960±30BP、角材（190、試料No.5）から1890±30BPという数値が出た。試料No.5・7は出土遺物の年代との整合性が高いが、試料No.4は、ほぼ同一地点で出土した古墳時代前期の土師器との整合性がみられない。その要因として材の転用や古木効果、計測部位による遺構の時期との誤差が考えられる。また、第2層上層で出土した板材（199、試料No.6）からは980±30BPの数値が出た。以上のことから、沼としての存続時期は少なくとも縄文時代晩期（紀元前5世紀）から古代後半（11世紀）であると推察できる（第IV章 自然科学分析参照）。

SD51・SD86 (F3区 / 第6・7・11・12図、写真図版4-4・5)

調査区北西に位置する。SD51は幅0.46m、深さ0.47mを測る溝で、東西方向N-60°-Wに軸を持つ。SD86は幅0.64m、深さ0.42mを測る溝で、東西方向N-60°-Wに軸を持つ。いずれも両端が調査区外に延びる。直線的に掘り込まれ、断面形は逆台形かそれに近いU字状を呈する。埋土は黒褐色砂質シルトに地山が斑状に少量混じる。SK165を中心点として、SX157をほぼ等間隔に挟んだ北側にSD51、南側にSD86が平行に伸びている。遺構の位置関係と形状及び埋土の共通性から、SX157の区画溝または側溝として開削された可能性が指摘できる。遺物はSD51から古墳時代の土師器（54・55）が出土した。

SD55 (F3区 / 第6・7・11・12図、写真図版4-5~7)

調査区北西に位置する。幅1.19m、深さ0.85mを測る溝で、東西方向N-52°-Wに軸を持つ。両端が調査区外に延び、東端部でSD98となつながる。溝側面は直線的に掘り込まれるが、底面は調

査範囲全体を通して凹凸の激しい複雑な様相を呈している。埋土も同一遺構内で大きく異なっており、西壁は黒褐色砂質シルトや黒色シルト、地山が不規則に入り込む複雑な断面形を呈しているのに対し、東南壁は地山が斑・ブロック状に混じる黒褐色シルト層が互層に堆積する。以上の状況を、地震やそれに起因する伏流水等の地盤への影響と考えたことから、地震考古学の研究者である寒川旭氏に遺構断面・平面の状況写真をみていただき、富山大学の地磁気学の研究者管頭明日香氏には土壤サンプルの採取及び分析をしていただいたが、地震の影響との明確な結果は得られなかった。遺物は古墳時代前期の土器(56～62)、石製品(179～181)が出土した。

SD98 (F3 区 / 第6・7・11 図、写真図版4・5)

調査区北側に位置する。幅 0.80m、深さ 0.36m を測る溝で、N - 44° - E に軸を持つ。北東側が調査区外へ延び、南西側が SD55 とつながる。埋土は主に2層からなり、大半を占める上層は黒褐色砂質シルトを基調とし、下層は黒褐色シルトに灰黄色シルトがマーブル状に混じる混土である。SD55 と同様、遺構の底面の凹凸が著しい。上層埋土が同一で SD55 との新旧の切合関係がないことから、同時期の遺構であると考える。遺物は縄文土器の小片、古墳時代前期の土器(65・66)が出土した。

(2) 壺穴建物

SI61 (E4 区 / 第6・10 図、写真図版5・1・2)

SD01 の約 10m 南に位置する壺穴建物である。遺構西半が調査区外に抜がることから、全容を把握することは出来ない。検出した規模は 5m × 2.3m、床面積は 11.5 m²、深さは 0.34m を測る。平面形は一辺 5m の隅丸方形で、床面積は約 25 m² と推察する。埋土の大半は黒色シルトを基調としており、自然堆積とみられる状況が断面で観察できることから、埋め戻しの可能性がある。床面はほぼ水平で、明確な硬化面や貼床、炉跡は存在しないが、最下部の一部で貼床の可能性のある黄灰色砂質シルト層を確認した。また不明瞭であるが周壁溝が南側に残る。底面でピットを 6 基 (SP117・151・152・153・155・156) 検出したが、柱穴と考えられるものはない。埋土はいずれも SI61 の埋土と共通性があり、黒色 / 黑褐色シルトを基調とする。遺物は遺構南側を中心に古墳時代前期の土器(68～71)が出土した。

SI107 (E2・3 区 / 第6・11・12 図、写真図版5・3・4)

SD01 から約 16m 南に位置する壺穴建物である。SX157 を切る。遺構南東半が調査区外に抜がることから、全容を把握することは出来ない。検出した規模は 4m × 1.5m、床面積は 6 m²、深さは 0.40m を測る。平面形は一辺 5m の隅丸方形で、床面積は約 25 m² と推察する。埋土は黒褐色シルトを基調としており、下層には灰黄色シルトがブロック状に混じる。貼床・炉跡、柱穴等は検出できなかった。底面で柱穴の可能性がある SK162 を確認したが、柱痕がみられないことから上坑とした。遺物は縄文土器の小破片、古墳時代の土器(72～89)等が出土した。また埋上下部から出土した土器内面に付着した炭化物(試料 No.8)に放射性炭素年代測定を行い、1760±30BP という結果を得た。

(3) 据立柱建物

古墳時代初頭～前期以前の据立柱建物 SB1～3 を調査区北側で検出した。沼 SD01 の南側岸部分に形成されたと考えられる。

SB1 - SP25・26・27 (E5 区 / 第6・7・13 図、写真図版6・4～6)

第1工区中央北東に位置し、SP25～27 で構成される。1間 × 2間以上の据立柱建物と考えられ、北側に抜がる可能性が高い。調査区内で検出したのは南側の1列のみで、柱間寸法は約 2.33m である。埋土は2層に分かれ、上層は黒褐色シルトに灰黄色砂が斑状に少量混じり、下層は灰黄色シルトに黒褐色シルトが斑状に少量混じる。SP26・27 には柱が残存したが、SP25 は南東半が調査区外に延びるため柱痕は確認できなかった。新旧の切合関係があり、SP25 は SD14 より古い。遺物は、SP26 から縄文土器(91)および古墳土器の開脚高环の底部小片が、SP27 から古墳土器の壺(92)のほか、

高坏か器台の小片が出土している。91は縄文時代晚期、92は古墳時代前期の白江式期のものである。一方、SP27に伴う柱（202、試料No.1）の放射性年代測定の結果 2030 ± 30 BP という数値が得られたが、当調査区で検出した遺構・遺物全体から想定した年代より古い。これはSD01 出土部材と同様、古木効果や材の転用、測定部位などによる遺構の年代との誤差と考える。SP27 出土遺物の年代と合わせ、SB1の時期は古墳時代初頭～前期である可能性が高い。

SB2・SP52・53・101 (FG3 区 / 第6・14図、写真図版6 - 7・8)

第1工区北西に位置する。1間 × 1間の掘立柱建物で、SP52・53・101 で構成される。柱間寸法は約 4.3m、面積は約 18.5 m²である。柱穴の平面形は円形で、埋土は黒褐色シルトを基調とする。SP52・53 に柱（203、204）が残る。SP52 から古墳時代前期の土師器小片が出土した。SP101 は遺構上半をSX95 に削平されていることから、柱の痕跡は確認できなかった。SP52 の柱（203、試料No.2）は放射性炭素年代測定の結果 1830 ± 30 BP という数値が得られたことから、古墳時代初頭～前期の建物である可能性が高い。

SB3・SP8・9・15・134・163 (D5 区 / 第6・13図、写真図版5 - 1・2)

第1工区南西に位置し、SP8・9・15・134・163 で構成される。2間 × 2間以上の総柱建物であり、調査区外南東方向に拡がると考えられる。調査区内では一部分のみ検出した。調査区内にSP8・9・15・134・163 がある。桁行 4.5m 以上、梁行 4.33m 以上で、調査区内の面積は 19.48 m² である。主軸は N-61° - W である。柱穴の平面形は概ね円形で、柱間寸法は 2.2 ~ 2.5m に収まる。埋土は黒褐色シルトを基調とする。SP15 に柱（200）を伴うが、他の柱穴には柱痕は確認できなかった。SD14 より古い。SP15 の柱（試料No.3）の放射性炭素年代測定の結果 1700 ± 30 BP という数値が得られており、古墳時代前期の建物の可能性が高い。遺物は、SP8 から古墳時代の土師器壺口縁部（90）および壺か甕の頸部が、SP134 から土師器小片のほか、壺か甕の口縁部などが出土した。

(4) 土坑

SK32 (D5 区 / 第6・14図、写真図版4 - 8)

調査区北西、SD01 南岸に位置し、SD01 に沿って東西方向に拡がる。長軸 21.4m、短軸 5.3m、深さ約 0.50m を測る不整形の大型土坑である。遺構の東と南半が調査区外に延びており、全容は不明である。底面はほぼ水平で、その直上から古墳時代の土師器がまとまって出土した。SX95 より新しい。北西端で SD01 とつながる。埋土は3層からなり、上層が黒褐色シルト、中層が黄灰色シルト、下層は黄灰色シルトと黒褐色シルトの混土である。遺物は主に古墳時代前期の土師器（93 ~ 102）が出土した。

SK35 (F4 区 / 第6・15図、写真図版7 - 1 ~ 3)

調査区北側中央、SD01 南岸に位置する。東西軸 6.28m、南北軸 4.4m、最大深さ 0.52m を測る不整形の大型土坑である。遺構西半が調査区外に延びるため全容は不明である。底面が遺構南側に向かって緩やかに傾斜する。遺構底面に柱穴、貼床、炉など竪穴建物の痕跡が確認できなかったことから土坑とした。埋土は主に3層からなり、上層が黒色シルト、中層が黒褐色シルト、下層は黒褐色シルトと地山の混土である。遺物は古墳時代前期の土師器（105 ~ 132）が多量に出土したほか、非晶質安山岩の剥片（184）が出土した。土師器には二次被熱の痕跡が残る赤彩を施した台付壺（118）や赤彩を施した有鉢筒状蓋（132）などを含む。以上の事から、当初祭祀場として使用され、のちに土器廐棄場として転用された可能性がある。

SK178 (D2 区 / 第6・12図、写真図版9 - 2)

調査区中央南西に位置する。長軸 1.28m、深さ 0.46m を測る梢円形と考えられる土坑である。南半が調査区外に延びる。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ水平である。埋土は大半が黒褐色砂質シルトを基調とする層で、最下部に黒褐色シルトに灰黄色砂質シルトが斑状に混じる層が薄く堆積する。

遺構の規模に比べて出土した土器の量が多いが、大半が土器の小破片である。古墳時代前期の土師器（138～143）や黒曜石の二次加工剥片（185）が出土した。

(5) 性質不明遺構

SX95 (F3・4 区 / 第6・7・14 図、写真図版7 - 4)

調査区北西の短いトレーナー状の調査範囲内に位置する。長軸 6.33m、短軸 5.0m、深さ 0.31m を測る堅穴状の土坑である。平面形は東西端が調査区外に延び、北側はSK32 に削平されているため全容は不明である。上坑開削時の掘り込みが唯一確認できる南側は、検出面から直線的に掘り込まれる。壁際には周壁溝の可能性がある構を確認した。炉跡や柱穴等が確認できなかったため、性質不明遺構とした。埋土は3層からなり、上層、中層が黒褐色シルトを基調とし、下層は灰黄色シルトに黄灰色シルトと黒褐色シルトがモザイク状に混じる。中層以下、特に下層埋土が非常に硬く縮まり、貼床の可能性がある。遺物は縄文土器、古墳土師器等の小破片が一定量出土した。SB2 の柱穴SP101 を SX95 完掘後に底面で検出したことから、当遺構の時期はSB2より新しいと考える。

SX157 (F3・4 区 / 第6・12 図、写真図版7 - 5)

調査区内で長軸 9.17m、短軸 5.33m、深さ 0.47m を測り、平面形が隅丸長方形の可能性がある遺構である。想定面積は 48.88 m² であるが、東西端が調査区外に延びるため全容は不明である。SI107 より古い。底面がほぼ平坦である。埋土は主に3層からなり、上層は黒褐色シルトを基調とする混土、中・下層は黒褐色シルトに地山が異なる割合でモザイク状に混じる混土である。特に下層埋土はSX95 と同様、非常に硬く縮まる。またSI107 の壁断面下層で確認した黒褐色シルトと地山が斑・ブロック状に混じる混土は、SI107 埋土より広範囲に拡がることから、SX157 の埋土である可能性が高い。また南北 1.8 m 離れて、SD51・SD86 が東西方向に平行して伸びており、関連する遺構と考える。遺構底面で検出したSD87・168 は周壁溝、SK165・166 はSX157 に伴う土坑である可能性がある。遺物は縄文土器、古墳時代前期の土師器（145～147）等が出土した。

2. 古代

道路状遺構

SF1/SD94 (D3～5 区 / 第6・16 図、写真図版8 - 5)

当遺構はSD169 とともに古代道路に伴う側溝と考えられる。調査区中央やや南を東西に横断する溝で、SD169 と平行して伸びる。SD169との路面幅は 5.5m である。調査区西側では確認できなかったが、調査区中央西側のⅡ層及びⅢ層上面が削平されたためと推察する。東西ともに調査区外に伸びる可能性が高い。規模は幅 1.67m、深さ 0.28m を測る。断面形は逆台形で底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色シルトを基調としており、使用されなくなった後に自然堆積した可能性が高い。遺物は縄文土器、古墳土師器、中世土師器（152～156）、緑色凝灰岩剥片（184）が出土した。埋土上層から出土した中世土師器や珠洲の小片は流入したものであり、最終的な埋没年代は 13～14 世紀である可能性が高い。平行して伸びるSD169 から中世以降の遺物が出土しないことから、SD170 の北側に位置する当遺構のみ、中世集落が成立した後も生産域内の区画溝などとして転用されたか、自然の落ち込みとして存続したと考える。

SF1/SD169 (C3～5 区 / 第6・16 図、写真図版8 - 4)

調査区南側を東西に横断する溝で、SD94 と平行して伸びる。SD94 と共に古代道路の側溝である可能性が高い。規模は幅 1.67m、深さ 0.26m を測り、断面形は逆台形、底面はほぼ平坦である。埋土は上層が黒褐色シルト、下層は灰黄色シルトがマーブル状に混じる黒褐色シルトであり、開削からしばらくの期間は緩やかな水の流れがあった可能性が高い。埋土は自然堆積である。遺物は古墳土師器、古代土師器（148）、須恵器、砥石（183）などが出土した。

3. 中世以降

(1) 沖立柱建物

SB4 - SP185・211・212・222・225・230・262・270 (C3 区 / 第6・17 図、写真図版9 - 1)

第2工区中央に位置する、1間 × 3間の南北棟側柱建物である。柱穴は北西端から時計回りにSP270、SP211、SP212、SP262、SP222、SP225、SP230、SP185 からなる。柱穴の平面形は概ね円形である。柱穴の埋土は主に黒色シルトを基調とする。いずれも柱は伴わず、明確な柱痕は確認できなかつた。桁行に沿って外側に雨落ち溝と考えられるSD184・209 を伴う。建物部分の規模は、桁行 6.67m、梁行 3.83m、面積 25.55 m²で、主軸は N - 45° - W である。柱間寸法は桁行が 2.0 ~ 2.33m、梁行は 3.83mであり、梁行が2倍程度あることから、SK203 やSD221 中程の窪みが浅い柱穴である可能性がある。出土遺物は、SP211、SD209 から土師器小片が出土した。

(2) 溝

SD170 (C4・5 区、D2 ~ 4 区 / 第6・16 図、写真図版8 - 3、9 - 5・6)

調査区の中央やや南側を東西方向N- 73° -Wに横断する溝である。規模は幅 1.00m、深さ 0.54 mを測り、断面形は U 字状である。埋土は主に2層に大別でき、上層は黒褐色シルトを基調とし、下層は地山と黒褐色シルトがモザイク状に混じる。西端部が貯水池状遺構SX201 と連結する。SD188・S D14 より新しい。用水路としての機能を持っていた可能性が高い。遺物は土師器小片、中世土師器(159)、瀬戸碗(160)が出土しており、遺構の開削時期は 13 世紀頃、最終的な埋没時期は 15 ~ 16 世紀頃の可能性がある。SX201と共に、調査区内で最も新しい時期の遺構である。

SD188 (C3 ~ 5 区 / 第6・16 図、写真図版8 - 3)

調査区南側を東西N- 70° -Wに横断する溝である。SD94・SD169 の間に位置し、ほぼ平行して同方向に延びる。規模は幅 1.69m、深さ 0.31m、検出長は約 12.5mである。断面形は逆台形、底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色シルトに黄灰色シルトと黒色シルトがブロック状に混じる混土が主体で、廃棄時に人為的に埋められたと考えられる。SD170 より古い。規模・位置関係はSD94・SD169との共通性をうかがわせるが、当遺構はIIa 層上面から掘り込んでおり、埋土も異なることから、開削時期と埋没時期が異なると考える。遺物は古墳時代の土師器、中世土師器、珠洲などが出土した。

SD14 (A4B4、B5C5D5 区 / 第6・13 図、写真図版6 - 1、9 - 5)

調査区東端部を南北方向N- 7° -Wに縦断する溝である。南端が調査区外に伸びる一方、北端部が E5 地区以北でみられない。これは北東側の遺物包含層が残っていないことから、後世に削平されたと考える。調査区内で幅 3.33m、深さ 0.28m、検出長で約 35mを測る。底面のレベルはほぼ一定で大きな高低差はみられないが、遺構検出面は南西に向かって傾斜して低くなる。新旧の切合関係があるSP15 (SB3)・SP25 (SB1)・SD94・169 を切り、SD170 には切られる。埋土は主に2層であり、下層は締まりの緩い黒褐色シルトを基調とし、酸化鉄が多く混じる。上層は黒褐色シルトに地山が粒・ブロック状に混じる混土がほぼ水平に堆積する。下層は無遺物層であり、遺物は全て上層から出土した。埋土の堆積状況および埋土の特徴から、溝が機能していた当時、植物が生い茂る状態であったと考える。遺物は古墳時代の土師器小片が多量に出土したことから、開削時に多くの遺構が削平された可能性が高い。当該期の遺物として珠洲の播鉢(151)が出土した。

(3) 土坑、性質不明遺構

SX201 (D2 区 / 第6・16 図、写真図版9 - 3・4)

第2工区北西に位置する。遺構西半が調査区外に拡がる。規模は調査区内で長軸 7.81m、短軸 1.83m、深さ 0.85mを測り、南に向かって深くなる。遺構底面は湧水層である灰黄色砂に達し、調査期間中、常に多量の水を湛える状態であった。遺構は南に向かって深くなり、用水的な機能を持つていたと考えられる中世の溝SD170 と南側で連結し、水を供給する井戸・貯水池的な役割を果たしていく

第1表 遺構一覧(1)

第1表 遺構一覧(2)

第1表 遺構一覧(3)

番号	地名	地区	平面図(北緯/東経)/ 施設名(区画)	施設 種別	導 度%	幅 度	深 度	特徴	場所
SD 179	C2	b-2a"	井	-	45	10	-	+ 頂面(1)・側面(2)小穴	
SK 181	C2	井	-	-	26	11	-		
SK 182	C2	井	-	-	17	20	-		
SK 183	C2	OD1	-	-	29	6	-		
SD 184 中世	BC3	N 44° W	-	16	11/31	19/3	>SD155-SD171 SD169/SB171<水戸(使)で打に留め(作事), SD185-211-212-222-223-230-262-270, SD184-209-SD184を構成	+ 頂面(1)・側面(2)小穴	
SP 185 中世	C3	木造	-	-	24	47	SD183-211-212-222-230-262-270, SD184-209-SD184を構成	+ 頂面(1)・側面(2)小穴	
SK 186	C3	井	-	-	16	32	18		
SK 187	C3	井	-	-	23	8	-		
SD 188 中世	CD1C4	N 44° W	-	6-16	149	31	底面でSD211-218年櫻井 30384	+ 頂面(1)・側面(2)小穴	
TK 189	C3	井	-	-	28	11	-	+ 頂面(1)・側面(2)小穴	
SK 190	C2	井	-	-	26	37	-	+ 頂面(1)・側面(2)小穴	
SK 192 中世	D2	(鉄門) -	-	-	173	23	< 道筋(1)	+ 頂面(1)・側面(2)小穴	
SK 193	D2D3	(鉄門) -	-	-	49	53	<SD194	+ 頂面(1)・側面(2)小穴	
SK 194	D2D3	井	-	-	39	21	>SD193 *当時の小物室(1)	+ 頂面(1)・側面(2)小穴	
SK 195	D3	井	-	-	32	30	>196	+ 頂面(1)・側面(2)小穴	
SK 196	BS	井	-	-	26	24	<193	+ 頂面(1)・側面(2)小穴	
SK 197	BS	井	-	-	15	13	-	+ 頂面(1)・側面(2)小穴	
SK 199	CD	井	-	-	19	20	SD199-200(空き合)。	+ 土壁跡(小切口)・地盤(小穴)	
SK 201 中世	G2	(平塗面) 187	-	6-16	781	83	底面でSD187-188年櫻井 30385	+ 頂面(1)・側面(2)小穴	
SK 202 古墳周縁	C3	(井)	-	-	13	19	SD181-183年櫻井 187-188年桃井	+ 頂面(1)・側面(2)小穴	
SK 203 古墳周縁	C3	井	-	-	21	16	SD176年櫻井202-203-204を構成	+ 土壁跡(小切口)・地盤(小穴)	
SK 204 古墳周縁	C3	(鉄門) -	-	-	18	17	SD176年櫻井202-203-204を構成	+ 頂面(1)・側面(2)小穴	
SK 205	C3A	井	-	-	47	9	-	+ 頂面(1)・側面(2)小穴	
SK 206	DS	下槽室	-	-	21	32	-	+ 頂面(1)・側面(2)小穴	
SK 207	BS	井	-	-	28	23	-	+ 土壁跡(小切口)	
SK 208	DS	井	-	-	23	15	-	+ 土壁跡(小切口)	
SD 209 中世	CD4	N 44° W	-	17	30/17	21/1	SD188-211-212-222-230-262-270, SD184-209-SD184を構成	+ 土壁跡(小切口)・地盤(小穴)	
SD 210 中世	C3	N 44° W	-	-	31	6	<SD109	+ 頂面(1)・側面(2)小穴	
SD 211 中世	C2	井	-	-	17	45	47 SD185-211-212-222-230-262-270, SD184-209でSD45構成	+ 頂面(1)・側面(2)小穴	
SD 212 中世	C2	井	-	-	17	47	51 SD183-211-212-222-230-262-270, SD184-209でSD46構成	+ 頂面(1)・側面(2)小穴	
SK 213	C3	井	-	-	29	24	-	+ 土壁跡(小切口)	
SK 214	C3	不規則	-	-	27	19	-	+ 土壁跡(小切口)	
SD 215	BC3	N 44° W	-	-	72	12	<SD186(外)底(1)。	+ 土壁跡(小切口)	
SD 216	C3	(井)	144	-	24	40	-	+ 土壁跡(小切口)	
SK 217	C3	井	-	-	26	6	-	+ 土壁跡(小切口)	
SK 218 中世	C3	井	-	-	2-3	14	-	+ 土壁跡(小切口)	
SD 219	C3	不規則	-	-	96	16	底(2)水戸(2)不規則(1)。地盤(1)の空隙(2)	+ 土壁跡(小切口)	
SD 221	C3	不規則	-	-	44	7	底(2)水戸(2)手掘(1)。横木(1)底(2)小切口(1)底(2)水戸(2)少(1)底(2)無(1)	+ 土壁跡(小切口)	
SD 222 中世	BS	N 44° W	-	-	33	20	SD185-211-212-222-230-262-270, SD184-209でSD47構成	+ 土壁跡(小切口)・地盤(小穴)	
SK 223	C2	(井)	-	-	19	17	SD174-211-222-230-262-270, SD184-209でSD48構成	+ 土壁跡(小切口)	
SK 224	C3	井	-	-	18	32	-	+ 土壁跡(小切口)	
SD 225 中世	C3E	井	-	-	17	45	40 SD183-211-212-222-230-262-270, SD184-209でSD49構成	+ 土壁跡(小切口)・地盤(小穴)	
SD 226	BS	井	-	-	32	43	-	+ 土壁跡(小切口)	
SK 227	BS	井	-	-	22	29	-	+ 土壁跡(小切口)	
SK 228	BS	井	-	-	29	15	-	+ 土壁跡(小切口)	
SK 229	BS	井	-	-	37	12	-	+ 土壁跡(小切口)	
SD 230 中世	C3	不規則	-	-	17	19	SD185-211-212-222-230-262-270, SD184-209でSD50構成	+ 土壁跡(小切口)	
SK 231	C3	井	-	-	73	14	-	+ 土壁跡(小切口)・地盤(小穴)	
SK 232	BS	井	-	-	27	12	-	+ 土壁跡(小切口)	
SK 233	BS	井	-	-	24	18	-	+ 土壁跡(小切口)・地盤(小穴)	
SK 234	BS	井	-	-	24	14	-	+ 土壁跡(小切口)・地盤(小穴)	
SK 235	BS	井	-	-	24	14	-	+ 土壁跡(小切口)・地盤(小穴)	
SK 236	BS	井	-	-	39	28	-	+ 土壁跡(小切口)・地盤(小穴)	
SD 238	BS	N 44° W	-	-	52/17	26/21	雷傳伝石(1)水戸(1)。SD183-211-212-222-230-262-270, SD184-209でSD51構成	+ 土壁跡(小切口)・地盤(小切口)・底(1)・高(2)小切口(1)・高(2)小切口(2)・底(1)	
SK 239	BS	井	-	-	29	27	底(2)水戸(2)1底(1)1底(2)1小切口(1)1底(2)1水戸(2)1底(2)1少(1)1底(2)1	+ 土壁跡(小切口)・地盤(小穴)	
SD 242	BS	(井)	-	-	29	15	底(2)水戸(2)1	+ 土壁跡(小切口)	
SD 243	C4	掩埋	-	-	21	77	SD183-243-244-245-246-247-248で櫻井の15世の社の可動性あり	+ 土壁跡(小切口)	
SK 244	BS	井	-	-	21	27	-	+ 土壁跡(小切口)	
SD 245	BS	井	-	-	46	11	SD183-245-246-247-248で櫻井の15世の社の可動性あり	+ 土壁跡(小切口)	
SK 246	BS	井	-	-	24	23	-	+ 土壁跡(小切口)	
SD 247	D4	井	-	-	23	21	SD183-243-244-245-246-247で櫻井の15世の社の可動性あり	+ 土壁跡(小切口)	
SK 250	B4	掩埋	-	-	29	78	-	+ 土壁跡(小切口)	
SK 251	B4	井	-	-	19	54	SD175/252	+ 土壁跡(小切口)	
SK 252	D4	(鉄門)	-	-	37	32	SD183/252	中古+隕頭の隕頭小月	
SK 254	A4	井	-	-	33	33	隕頭(2)に近づく	-	
SK 255	C4	井	-	-	19	17	-	+ 土壁跡(小切口)	
SK 257	C4	井	149	-	24	37	-	+ 土壁跡(小切口)	
SK 258	C5	井	-	-	25	19	-	-	
SK 261	C3	(鉄門)	-	-	28	28	SD175底面で底(1) × SD175	+ 土壁跡(小切口)	
SD 262 中世	C3	井	-	-	25	56	SD183-211-212-222-223-230-262-270, SD184-209でSD52構成	+ 土壁跡(小切口)	
SD 263	C4	井	-	-	52	34	SD183-243-244-245-246-247で櫻井の15世の社の可動性あり	+ 土壁跡(小切口)	
SK 264	C3	(井)	-	-	23	22	底(2)区間に近づく	-	
SK 265	C4	井	-	-	29	14	-	-	
SK 266	C3	井	-	-	25	32	SD171の底面(1)底(2)	-	
SK 267	BS	井	-	-	94	29	-	-	
SK 268	BS	井	-	-	17	10	SD183底面(1)底(2)	-	
SK 269	D3	井	-	-	23	15	SD183底面(1)底(2)	-	
SD 270	D3	掩埋	-	-	16	34	SD183-211-212-222-230-262-270, SD184-109でSD53構成	-	
SK 271	C4	井	-	-	32	10	SD183底面(1)底(2)	-	
SK 272	C2	井	-	-	26	14	SD179底面(1)底(2)	-	
SK 273	BS	井	-	-	21	14	-	-	
SK 274	BS	井	-	-	28	31	-	-	
SK 275	BS	井	-	-	24	31	-	-	
SK 276	BS	井	-	-	27	13	-	-	
SK 277	BS	(鉄門)	-	-	20	18	SD171の底(1)底(2)底(3)底(4)	-	
SK 278	BS	井	-	-	29	27	SD171の底(1)底(2)底(3)底(4)	-	
SK 279	BS	(鉄門)	-	-	38	15	SD171の底(1)底(2)底(3)底(4)	-	
SK 280	BC2	(鉄門)	-	-	28	37	隕頭(2)に近づく	-	
SK 281	D2	掩埋	-	-	19	24	SD183底面(1)底(2)	-	
SK 283	BS	井	-	-	19	12	-	-	
SK 284	C4	(井)	-	-	30	17	SD183底面(1)底(2)	-	
SK 285	C3	井	-	-	25	24	-	-	
SK 286	BS	井	-	-	25	43	SD183底面(1)底(2)	-	
SK 287	BS	井	-	-	18	27	SD183底面(1)底(2)	-	

た可能性が高い。埋土の堆積は主に4層に分けられるが、いずれも黒褐色シルトを基調とする。最下層は地山と黄灰色シルト及び黒褐色シルトがモザイク状に混じる。常時滞水しているため、下層程しまりが緩い。遺物は土師器小片、中世土師器（157）、五輪塔の水輪（186）が出土した。

（4）島

SN1/SD91～93・122・139（D3・4区 / 第6・16図）

調査区中央に位置する。SD170を南側の起点とし、南北方向N-4°～11°-Eに軸を持つ。約1.5～2.1mの間隔を空け、北側に直線的に伸びる鋤溝群である。規模はそれぞれ幅0.16～0.42m、深さ0.06～0.14mを測り、全長は長いもので約9mを測る。断面形はU字状で、埋土は主に黒褐色シルトを基調とする。新旧関係のある古代の溝SD94を切る。遺物はSD91から土師器小片が出土した。

第4節 遺物

遺物は縄文土器、弥生土器、古墳土師器、古代土師器・須恵器、中世土師器、珠洲、瀬戸、中国製青磁、越中瀬戸、近世陶磁器、土製品（垂飾・土錘・土玉）、石製品（打製・磨製石斧、石鎌、石皿、石核、剥片等）、木製品（部材、加工木、柱、板材等）、種子（モモ）、骨が出土した。遺物の量は、出土時で中型コンテナ56箱を数える。出土遺物の比率は古墳時代初頭～前期の土師器が最も多く、次いで縄文時代晩期の土器が多い。出土遺物の約半分が沿SD01からであるほか、古墳時代の土師器については当該期の集落を構成する堅穴建物や大型土坑、溝からも多く出土した。一方、弥生土器および古代以降の遺物は少なく、遺構に伴うものはほとんどない。

以上の事から、古墳時代の遺物とそれ以外の時代の遺物を大別し、古墳時代以外の遺物については、文中でふれた遺構から出土した重要または代表的な遺物について記述した。古墳時代の土師器については組成図にまとめ、遺構毎に記述した。なお土師器の分類は、同器種でもその形態および調整等の組み合わせが多種多様であったことから、主に口縁部形態と器形に着目し大きく分類した（第5図）。図版掲載遺物のうち文中でふれなかったものや個々の遺物の詳細については、遺物観察表にまとめた。文中では煩雑さを避けるため、”～形”は省略した。また弥生土器の系譜を持つものは一括して在地系とし、古墳時代以降に本格的に導入されたものを外来系とした。

1. 縄文土器（第18・22図）

SD01 1～5は深鉢で、いずれも縄文時代晩期の条痕文土器である。1は胴部から口縁部にかけて内傾して立ち上がり、縫部を薄く仕上げ強く外傾する。2はゆるく内湾して立ち上がり、3は直線的に立ち上がる。端部は丸く仕上げる。1は外面に斜位に、2・3は縦方向に条痕文を施す。いずれも晩期の下野式に比定される。4・5は深鉢の底部で、外底面に木葉痕が認められる。6・7は浅鉢である。6は口縁を内掘させ、外面に沈線文・赤彩を施す。端部は内側に面をとる。7は小波状口縁で、口縁端部付近の内面に沈線を1条施す。いずれも縄文後期末葉～晩期前葉のものである。また第5図で出土位置を示したSD01の縄文土器（試料No.7）内面の付着炭化物について放射性年代測定を実施しており、 2380 ± 30 BPとの結果を得た。これはSD01出土の縄文土器の編年上の位置付けと整合性がみられる。

SP26 91は条痕文系の深鉢である。口縁部が軽く「く」の字状に屈曲し拡がり、口縁部にキザミを施す。

2. 弥生時代後期～古墳時代前期の土器（第5・18～23図）

（1）器種分類（第5図）

甕は有段甕（A）・「く」の字口縁甕（B）・有稜甕（C）・小型甕（D）に大別した。有段甕（A）は在地系で、口縁部に擬凹線文を持つもの（A1）と無文のもの（A2）に分けられるが、擬凹線文を施すものは非常に少なく、不明瞭な退化形態のものが多い。「く」の字口縁甕（B）には口縁端部が丸縁（B1）、面を取る平縁（B2）、そのまま仕上げるもの（B3）、受口状（B4）があり、口縁端部外面に刺突文を施すものや指頭による加工痕を残すものもみられる。体部は最大径を上部に持つ卵倒型が多いが、球胴型・長胴

型もみられる。最終的な外面調整は基本的にハケメだが、さらに部分的にナデ・ケズリ調整を施すものや、反対に工程を省略したと思われるものがある。体部上半のタキ調整が明瞭に残るものも一定量出土した。口縁部調整は基本的にヨコナデだが、ヨコナデを施さず、端部付近までハケメ調整を残すものも一定量みられる。有稜壺(C)は、有段口縁外面下端を肥厚または稜を持つ、山陰系のものである。小型壺(D)は器高14cm未満のものを抽出した。

壺は有段壺(A)・長頸壺(B)・短頸壺(C)・広口壺(D)・装飾壺(E)・台付壺(F)・小型壺(G)がある。壺Aは在地系(A1)と外来系(A2)があり、壺A1は月影式の退化形態で擬凹線が不明瞭または無文のもの、壺A2は有段部分が外反して伸びるものである。壺Bは直口口縁をもつ精製壺であり、外面～口縁内面まで丁寧なミガキ調整が施される。口縁は内湾気味のものと直線的なものがある。壺Cは短く内湾気味に伸びる口縁を持つ、やや小型の土器である。壺Dは口縁が「く」の字に開き端部を丸く收めるもの(D1)と、口縁が外傾し端部に小さく面を取るもの(D2)がみられる。また、口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部外面と内面上方に向かって面を取り、頸部に刻入突帯を有するもの(D3)がみられる。口縁端部内面に面を取る技法は、布留系壺の影響であり、畿内の様式を部分的に受容した折衷型と考えられる。装飾壺(E)は口縁部を有段または垂下させて面をつくり、そこに2単位の棒状浮文などの装飾を施す。球胴型の体部を持つ。近江・東海系の影響を受けたものである。台付壺(F)は弥生台付壺の系譜に連なるもの(F1)、台付壺の系譜に連なるもの(F2)に分けられる。F2に関しては、ミガキ調整及び赤彩を施すことから台付壺とした。小型壺(G)は器高11cm未満のものを抽出した。

高坏は弥生時代の系譜に連なるもの(A)と外来系(B)のものがある。高坏Aには、柱状脚部に段を持つもの(A1)、有段部分から大きく広がる拡張口縁のもの(A2)のほか、底部が水平方向に伸び、途中で屈曲して稜や段を持つ坏部と、端部に向かって開く「ハ」の字または途中で緩やかに屈曲して伸びる脚部を持つもの(A3)がみられる。外来系は東海系2種(B1a・b)・畿内系2種(B2a・b)がある。東海系1種(B1a)は小さな坏をもつもので、坏底部が途中で屈曲し稜を持ち口縁部に向かって立ち上がる。2種(B1b)は坏部が脚部近くで屈曲して大きく开くものである。畿内系1種(B2a)は小型の楕状坏と坏部より大きく広がる脚をもつ開脚高坏である。2種(B2b)は坏部が有稜で屈曲して立ち上がり、脚は下部で強く屈曲して広がるものである。

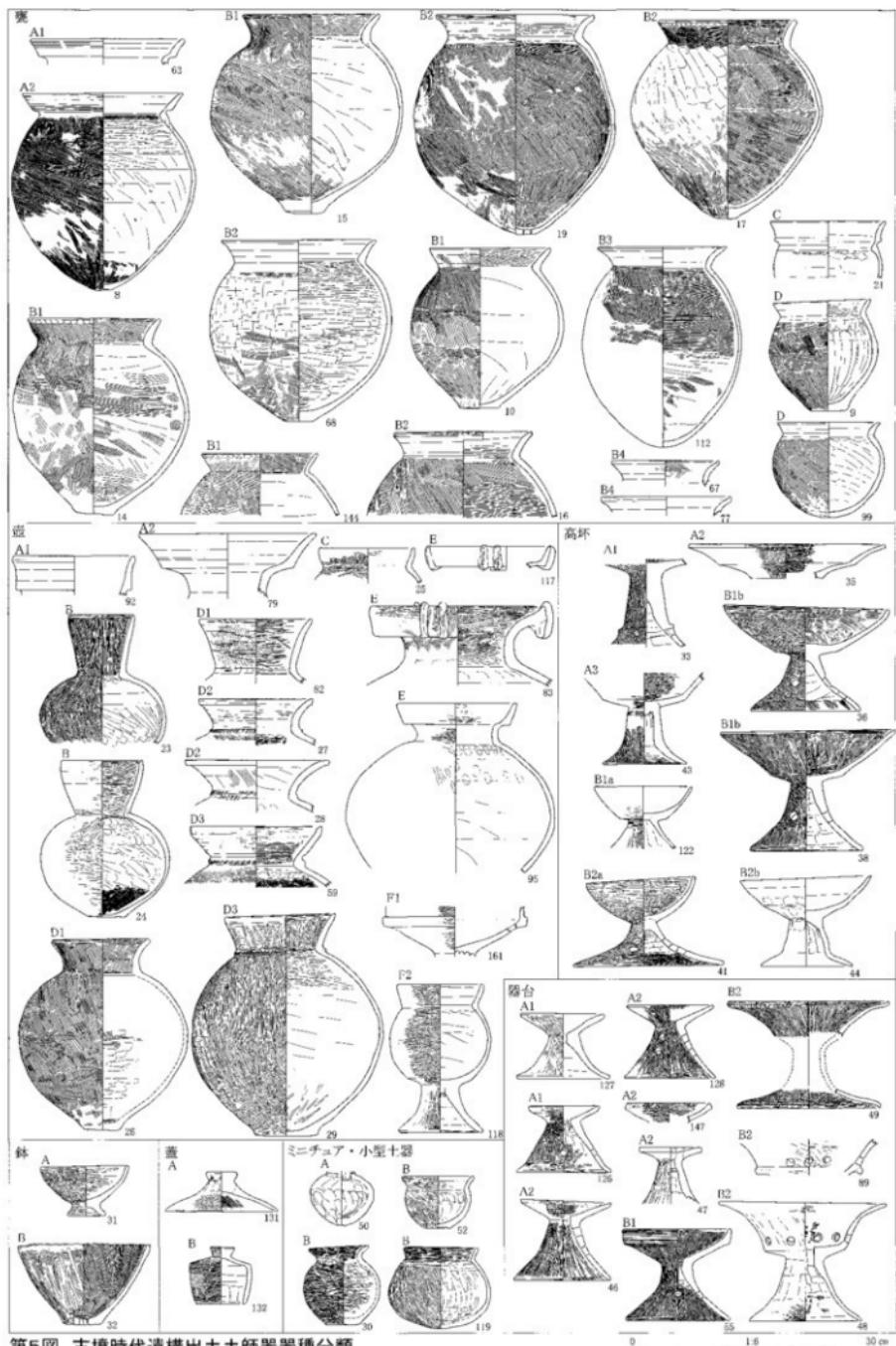
器台は小型器台(A)・有段器台(B)があり、器台Aが大部分を占める。器台Aは外来系で、口縁部を丸く收めるもの(A1)と面を取るもの(A2)があり、そのなかには台部が接合部分から直線的に「ハ」の字状に開くものと内湾気味になるもの、下部で緩やかに屈曲して開くものがある。器台A2にはミガキ調整および赤彩を施す精製品がある。口縁部端面には凹線による羽状文を巡らす。なお器台Aに含めたが、県内の出土事例の少ない、受部中央から脚部に向かって孔を施さない無孔のものもみられる。器台Bは受部が屈曲して直線的に立ち上がるものの(B1)と、罐部に向かって大きく外反するものの(B2)ある。器台B1は受部の有段部に擬凹線文やキザミを巡らしたものがある。器台B2は月影期に盛行する装飾器台やその祖型に連なるものである。そのなかで祖型が独自に発展したと考えられるものには、全面にミガキを施し、受部・脚部共に端部にはキザミ等の装飾を施すもの(B2a)がある。退化形態と考えられるものには、受部に涙滴形透孔の省略・退化形である円形透孔を施し、その下端に粘土紐を貼り巡らすもの(B2b)がある。

鉢には台付鉢(A)・底部穿孔鉢(B)がある。鉢Aは小型のもの、鉢Bは口縁が波状で、底部が安定して自立する平底をもっており、底部穿孔鉢でも古相のものである。

蓋は有鉢蓋(A)で、内面に返しをもたない蓋A1のほか、端部が筒状に垂下する有鉢筒状蓋(A2)がある。ミニチュア・小型土器は、手捏ね成形(A)、小型精製土器(B)で分類した。

(2) 沼SD01 (第19~21図)

SD01出土遺物には8~52がある。8~21は壺である。8は壺Aである。擬凹線文は退化し、不



第5図 古墳時代遺構出土土師器器種分類

明瞭になっている。9～20は甕Bであり、口縁形態は甕B1(9～14)、甕B2(15～19)、甕B4(20)となる。21は甕Cである。調整に着目すると、9・14・18の体部外面肩部へ上半部にはタタキ痕がみられるほか、14・17の口縁端部外面にはユビオサエ痕が、口縁部外面にはヨコナデが施されずハケメが残る。16の口縁端部の一部にはキザミを施す。

22～30は壺である。22は壺A1である。月影式の退化形態で、口縁の有段部が不明瞭である。端部は丸く收める。23・24は壺Bである。23は外面全体にタテミガキが施される。24の口縁部は内湾して立ち上がる。25は壺Cである。26は壺D1、27・28は壺D2で、29は壺D3である。26～28は口縁端部に面を取り、27・28は頸部にキザミまたは刻入突帯を巡らす。29は内面斜め上方に向かつて面を取り、端面に沈線を1条巡らす。30は壺Gである。

31・32は鉢である。31は鉢Aで、器高6.2cmと小型のもの。内外面に赤彩を施す。内面底部を中心に被熱痕が残る。32は鉢Bで、口縁端部にキザミを施し小波状とする。底部にモミ殻が残る。

33～44は高坏である。33は高坏A1の棒状有段脚で、裾部に段をもち、その下部に円孔を施す。34は高坏A2で、35は拡張口縁を持つ大型の高坏A3である。36・37は高坏B1a、38～40は高坏B1bである。41・42は高坏B2a、43・44は高坏B2bである。

45～49は器台である。45～47は器台Aである。5・46は台部に円孔を上下2段ほぼ等角に3方向から施す。47は受部底面中央から脚部に向かつて孔を穿たないものである。外面に赤彩を施す。受部が小さく、古相のものと考えられる。畿内系で、県内の出土事例は少ない。448は器台B2で受部下半に円孔を9～10方向から施す。月影式期に盛行した装飾器台の退化形態の一種と考えられる。49は弥生時代後期の装飾器台の祖型を系譜に持つもので、内外面全面にミガキを丁寧に施し、受部および脚部の端部にはキザミを施す。

50～52はミニチュア・小型土器で、いずれも壺である。50は手捏ね土器、51・52は全面にミガキを施す精製土器である。52には赤彩を施す。

(3) 溝 (第21図)

SD51出土遺物には54・55がある。54は甕Bである。端部に面を取り。55は器台Bで受部の口縁外面に粗い擬凹線を巡らせ、下端には刻みを施す。台部の中位には円孔を4方向から施す。

SD55出土遺物には56～62がある。56～58は甕Bである。57の口縁部端面に沈線が1条巡る。59は壺D3である。口縁端部外面と内面上方に面を取り、頸部に刻入突帯を巡らす。布留系甕の口縁部の技法を受容した近江・東海系壺との折衷型である。60・61は高坏で、60は高坏B1a、61はB2aである。62は蓋A1である。

(4) 壴穴建物 (第21・22図)

SI61出土遺物には68～71がある。68・69は甕Bである。70・71は高坏B1bである。

SI107出土遺物には72～89がある。72～78は甕である。72は底部に穿孔を施す。73～78は甕Bで、口縁形態は甕B1(73)、甕B2(74)、甕B3(75)、甕B4(76)である。76は口縁部にヨコナデを施さず、ハケメがみられる。79～83は壺で、口縁形態は壺A2(79)、壺B(80)、壺D1(82)、壺E(83)である。83は大型壺で口縁部に棒状浮文2単位をほぼ等角に3方向から施す。磨耗が激しいが、口縁部内面に赤彩の痕跡が残る。このほか体部のみの出土であったため実測していないが、球脛型の大型壺が複数出土している。84～86は高坏で、それぞれ高坏B1a(84)、高坏B2a(85・86)である。87～89は器台である。87・88は器台Aである。87は台部に円孔をほぼ等角に3方向から、88は6方向から施す。89は器台B2で、受部の身下部に粘土紐を貼り巡らすほか、円孔を施す。

(5) 柱穴 (第22図)

SP8出土遺物は90がある。甕B4の口縁部である。端部に狭い面を取り、軽く受口状とする。

SP27出土遺物は92がある。壺A1で端部に向かつて軽く外反する。口縁端部には面を取り。

(6) 土坑・性質不明遺構（第 22～24 図）

SK32 出土遺物には 93～102 がある。93・94 は甕 B である。93 は甕 B1 での口縁部は端部に向かってやや内湾気味に短く伸びる。外面の調整は板ナデのちケズリを施す。94 は甕 B2 である。95～96 は甕である。95・96 は甕 A1 である。95 は有段口縁の退化形態で、口縁がやや外傾して伸び、端部を丸く収める。96 の体部は球脛型である。97 は甕 C、98 は甕 E と考えられるが、棒状浮文は残存しない。99 は甕 G である。100・101 は高坏、102 は高坏か台付甕の脚部と考えられるが、いずれも口縁部または脚部のみの出土であり、器形の詳細は不明である。

SK35 出土遺物には 105～132 がある。105～112 は甕である。105～109 は甕 B1 である。そのうち 106、112 は長脣型、108 は相対的に小型で器高は 15.75 cm を測る。110・111 は甕 B2 である。111 は口縁部端面に沈線が 1 条巡る。112 は甕 B3 である。113～120 は甕である。113 は丸底である。それぞれ甕 A2(114)、甕 B(115)、甕 D(116)、甕 E(117)、甕 F(118)、甕 G(119・120) である。115 は外面に赤彩を施し、残存する体部外面下半には炭化物が付着する。117 は外面赤彩で、口縁部に棒状浮文 2 単位をほぼ等角 4 方に施す。118 は外面赤彩で、体部外面に炭化物が付着するが、台部には付着しない。119・120 は小型精製甕である。119 の外面には炭化物が付着する。121～125 は高坏である。それぞれ高坏 B1a(122・123)、高坏 B1b(124)、高坏 B2a(125) である。121 は高坏 B1 の可能性が高い。126～130 は器台である。それぞれ器台 A1(126～128)、器台 B(130)、器台 B1(129) である。129 には被熱痕がみられる。131・132 は蓋で、それぞれ蓋 A1(131)、蓋 A2(132) である。132 は筒状に端部が垂下するもので、上端部にキザミが、外面上半には凹線文が 3 条巡る。全面に赤彩を施す。

SK178 からは 138～143 が出土した。138・139 は甕で、それぞれ甕 B1(138)、甕 B2(139) である。140・141 は高坏である。141 は高坏 B1a である。142・143 は器台である。142 は器台 B1 の可能性が高い。有段器台で受部の口縁外面に粗い擬凹線文を 6 条巡らせ、下端には刻みを施す。内外面赤彩である。

SX157 からは 145～147 が出土した。145 は甕 A である。有段口縁下部を肥厚させる。擬凹線文は施さない。146 は高坏 B1a である。SX157 内であるが、SD168 の延長上から出土した。147 は器台 A2 で口縁端部に凹線による羽状文を施す。

(7) II 層出土（第 24 図）

161 は甕 F1 である。体部外面下端に粘土紐を 1 条巡らす。162 は蓋 A である。口径 17 cm を測る大型のものである。

3. 古代の土器（第 24 図）

SD169 から 148 が出土した。土師器甕の口縁部である。口縁部がやや外傾して端部に向かって延び、端部はやや丸みを帯びた方形を呈する。

SK257 から 149 が出土した。土師器甕の口縁部である。口縁は端部に向かってやや外傾し、端部に面を取る。小型で、古墳時代の可能性がある。

遺物包含層から 163 が出土した。須恵器の坏 B で体部外面中程に沈線が 2 条巡る。

4. 中近世の土器・陶磁器（第 21・24 図）

SD01 から 53 が出土した。中世土師器の皿で非ロクロ成形、越前編年 ND II 類である。

SD14 から 151 が出土した。珠洲の鉢で吉岡編年 I 期に比定される。体部が内湾気味に立ち上がる。口縁は外傾し、端部は方形の面をとる。

SD94 から 152～156 が出土した。いずれも中世土師器の皿で ND II 類である。

SD170 から 159・160 が出土した。159 は中世土師器の皿で ND II 類、160 は瀬戸の碗である。口縁をやや細く引き出し、端部を面取りする。灰釉を施す。

SX201 から 157 が出土した。中世土師器の皿で ND II 類である。

遺物包含層から 164 ~ 173 が出土した。164 ~ 168 は中世土師器の皿である。164 はNC II 類、165 ~ 168 はND II 類である。径8~ 11 cmに収まる小型の皿であるND II 類、やや大きい皿のNC II 類は、13 ~ 14 世紀に位置づけられる。173 は中国製青磁である。龍泉窯系青磁碗で体部外面に片彫蓮弁文を描く。大宰府編年碗II 類で 13 世紀初頭へ前半の標識土器である。169 ~ 172 は株洲である。169 は鉢、170・171 は擂鉢である。172 は甕である。口縁が「く」の字状に強く屈折し、端部は短い円頭を呈する。

5. 土製品（第25図）

174・175 がある。174 は樽型の土鉢である。175 は土玉で径 0.4 mm の穿孔を施す。

6. 石製品（第25図）

176 ~ 189 がある。176 は磨製石斧である。蛇紋岩製である。定角式で縄文時代中期以降のものである。177・181・189 は打製石斧である。178 は石皿とした。台石との兼用で、裏面には砥石として使用した痕跡が残る。179・182・184・185 は剥片である。179 は玉髓質泥岩（横山真脇石か）、182 は緑色凝灰岩で、184 は非晶質安山岩、185 は黒曜石の二次加工剥片である。180 は鉄石英の石核である。183 は砥石で、4面に砥面としての使用痕がみられる。186 は五輪塔の水輪である。球形の上下を切り取った形状で、中位からやや上方に最大径がくる。側面に梵字“**パン**（パン）”を刻む。187 は垂飾と考えられる。穿孔2孔と三叉文が施される。縄文時代中期中葉のものである可能性が高い。188 は石鎧である。非晶質安山岩で、弥生時代のものと考えられる。

7. 木製品（第26図）

SD01 から出土した部材・棒材・角材・板材（190 ~ 199）、SP15・26・27・52・53 から出土した柱（200 ~ 204）に限られ、容器や農工具など他の種類は確認されなかった。190 は角材で片側が炭化している。191 は部材で側面に穿孔を2箇所施す。192、193 は部材である。192 は長さ 188 cm を測る大型のもので、193 は正面に横約7cm × 縦約6cm の方形の孔を穿つ。194 は角材、195 ~ 199 は板材である。195 ~ 199 は調査区北東部から、その他大小 35 片と共にまとまって出土した。木製品はいずれも芯去材であり、樹種同定した結果、すべて材質はスギであった。190・193・199・200・202・203 については放射性年代測定を実施し、その結果は弥生時代後期（193・202）、古墳時代前期（190・200・203）、古代後期（199）である。
(朝田)

参考・引用文献

- 池野正男 2012 「墓中の古墳時代「器様相」」『大境』第31号 富山考古学会
越前賀子 1996 「海原胡麻堂遺跡出土中世土師陶器の編年」『海原胡麻堂遺跡発掘調査報告』財團法人富山県文化振興財團
上田秀夫 1982 「14 ~ 16世紀の青磁碗の形式分類について」『貿易陶器研究No.2』日本貿易陶器研究会
小林達雄編 2008 「絶対 繩文土器一小林達雄先生古稀記念企画一」『絶対 繩文土器』刊行委員会 アム・ブロモーション
田嶋明人 1980 「IV考察 漆塗跡遺跡出土土器の編年の考察」『漆塗跡Ⅳ』右川県埋蔵文化財センター
藤沢良祐 2005 「射利箱帯產生技術の伝播」『全国シンポジウム中世窯業の蓄積 生産技術の展開と編年』中央大学文学部日本史研究会
藤田富士夫 2004 「古代越中高岡郡の「道」と「郷」に関する若干の考察」『人文社会学研究所年報』No.2級和学園大学
藤田富士夫・駒見和夫 1981 「ちょうどう縁の概要と若干の考察」『大境』第7号 富山考古学会
(財) 大阪府文化財センター 2003 『古墳出現期の土器類と平安代 シンボジウム資料集』
山本信夫 2000 「太宰府市の文化財 第49集 人事局収蔵跡X V 瓷器類分類編」 太宰府市教育委員会
吉岡康輔 1994 「中世須恵器の研究」吉岡弘文館
小杉町教育委員会 1999 「HS-04 遺跡発掘調査報告書」
庄内式土器研究会 2003 「庄内式土器研究XXVI - 庄内式併行期の土器生産とその動き -」
富山市教育委員会 1998 『富山市春日大堀遺跡発掘調査概要』
富山市教育委員会 2006 『富山市立木田大堀遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2006 『富山市打出遺跡発掘調査報告書 -一般燃造方面新小浜屋根住宅基盤整備事業に伴う発掘調査報告 -』
(財) 富山県埋蔵文化財整理文化財調査事務所 2012 『水上遺跡 赤井南遺跡 安井遺跡 稲田遺跡 本江大坪I 遺跡発掘調査報告』
(公財) 富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 2013 『上保沢遺跡 水橋金広、中馬場遺跡 新堀西遺跡発掘調査報告』
(公財) 富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 2013 『下黒田遺跡 下野野遺跡 薬野町東遺跡 氷野町遺跡 楠方山遺跡発掘調査報告』
婦中町教育委員会 2003 『富山県婦中町 殿谷町遺跡発掘調査報告書』
八尾町教育委員会 1997 『泉尾1遺跡発掘調査報告書』
八尾町教育委員会 1997 『泉尾1遺跡発掘調査報告書1』

第2表 遺物観察表(1) 土器

番号	種類	形態	寸法	断面	厚さ	内面	外観		内面	外観	寸法	断面	厚さ	外観		
							内径	外径						内径	外径	
1	1	21	10	APF-S001	直筒	山口県	10.5	20.3	0.37	0.46	10.5	20.6	0.37	0.46	10.5	20.6
2	1	21	10	CGE-S001	直筒	山口県	10.5	20.4	-	-	10.5	20.7	-	-	10.5	20.7
3	1	21	10	CGE-S002	直筒	山口県	10.5	20.5	-	-	10.5	20.8	-	-	10.5	20.8
4	1	18	10	SDS-S001	直筒	山口県	10.5	20.6	-	-	10.5	20.9	-	-	10.5	20.9
5	1	18	10	SDS-S002	直筒	山口県	10.5	20.7	-	-	10.5	21.0	-	-	10.5	21.0
6	1	18	10	SDS-S003	直筒	山口県	10.5	20.8	-	-	10.5	21.1	-	-	10.5	21.1
7	1	18	10	SDS-S004	直筒	山口県	10.5	20.9	-	-	10.5	21.2	-	-	10.5	21.2
8	1	18	10	SDS-S005	直筒	山口県	10.5	21.0	-	-	10.5	21.3	-	-	10.5	21.3
9	1	19	11	CGE-S006	直筒	山口県	10.5	21.1	-	-	10.5	21.4	-	-	10.5	21.4
10	1	19	11	CGE-S007	直筒	山口県	10.5	21.2	-	-	10.5	21.5	-	-	10.5	21.5
11	1	19	11	CGE-S008	直筒	山口県	10.5	21.3	-	-	10.5	21.6	-	-	10.5	21.6
12	1	19	11	CGE-S009	直筒	山口県	10.5	21.4	-	-	10.5	21.7	-	-	10.5	21.7
13	1	19	12	SDS-S001	直筒	山口県	10.5	21.5	-	-	10.5	21.8	-	-	10.5	21.8
14	1	19	12	SDS-S002	直筒	山口県	10.5	21.6	-	-	10.5	21.9	-	-	10.5	21.9
15	1	19	12	SDS-S003	直筒	山口県	10.5	21.7	-	-	10.5	22.0	-	-	10.5	22.0
16	1	19	12	SDS-S004	直筒	山口県	10.5	21.8	-	-	10.5	22.1	-	-	10.5	22.1
17	1	19	12	SDS-S005	直筒	山口県	10.5	21.9	-	-	10.5	22.2	-	-	10.5	22.2
18	1	19	12	SDS-S006	直筒	山口県	10.5	21.9	-	-	10.5	22.3	-	-	10.5	22.3
19	1	19	12	SDS-S007	直筒	山口県	10.5	22.0	-	-	10.5	22.4	-	-	10.5	22.4
20	1	19	12	SDS-S008	直筒	山口県	10.5	22.1	-	-	10.5	22.5	-	-	10.5	22.5
21	1	19	14	SDS-S001	直筒	山口県	10.5	22.1	-	-	10.5	22.6	-	-	10.5	22.6
22	1	20	12	SDS-S002	直筒	山口県	10.5	22.2	-	-	10.5	22.7	-	-	10.5	22.7
23	1	20	12	SDS-S003	直筒	山口県	10.5	22.3	-	-	10.5	22.8	-	-	10.5	22.8
24	1	20	12	SDS-S004	直筒	山口県	10.5	22.4	-	-	10.5	22.9	-	-	10.5	22.9
25	1	20	14	SDS-S005	直筒	山口県	10.5	22.4	-	-	10.5	23.0	-	-	10.5	23.0
26	1	20	14	SDS-S006	直筒	山口県	10.5	22.5	-	-	10.5	23.1	-	-	10.5	23.1
27	1	20	14	SDS-S007	直筒	山口県	10.5	22.6	-	-	10.5	23.2	-	-	10.5	23.2
28	1	20	14	SDS-S008	直筒	山口県	10.5	22.7	-	-	10.5	23.3	-	-	10.5	23.3
29	1	20	11	SDS-S001	直筒	山口県	10.5	22.7	-	-	10.5	23.4	-	-	10.5	23.4
30	1	20	11	SDS-S002	直筒	山口県	10.5	22.8	-	-	10.5	23.5	-	-	10.5	23.5
31	1	20	11	SDS-S003	直筒	山口県	10.5	22.9	-	-	10.5	23.6	-	-	10.5	23.6
32	1	20	11	SDS-S004	直筒	山口県	10.5	23.0	-	-	10.5	23.7	-	-	10.5	23.7
33	1	20	11	SDS-S005	直筒	山口県	10.5	23.1	-	-	10.5	23.8	-	-	10.5	23.8
34	1	20	11	SDS-S006	直筒	山口県	10.5	23.2	-	-	10.5	23.9	-	-	10.5	23.9
35	1	20	11	SDS-S007	直筒	山口県	10.5	23.3	-	-	10.5	24.0	-	-	10.5	24.0
36	1	20	11	SDS-S008	直筒	山口県	10.5	23.4	-	-	10.5	24.1	-	-	10.5	24.1
37	1	20	12	SDS-S001	直筒	山口県	10.5	23.4	-	-	10.5	24.2	-	-	10.5	24.2
38	1	20	12	SDS-S002	直筒	山口県	10.5	23.5	-	-	10.5	24.3	-	-	10.5	24.3
39	1	20	12	SDS-S003	直筒	山口県	10.5	23.6	-	-	10.5	24.4	-	-	10.5	24.4
40	1	20	12	SDS-S004	直筒	山口県	10.5	23.7	-	-	10.5	24.5	-	-	10.5	24.5
41	1	20	12	SDS-S005	直筒	山口県	10.5	23.8	-	-	10.5	24.6	-	-	10.5	24.6
42	1	20	12	SDS-S006	直筒	山口県	10.5	23.9	-	-	10.5	24.7	-	-	10.5	24.7
43	1	20	12	SDS-S007	直筒	山口県	10.5	24.0	-	-	10.5	24.8	-	-	10.5	24.8
44	1	20	12	SDS-S008	直筒	山口県	10.5	24.1	-	-	10.5	24.9	-	-	10.5	24.9
45	1	21	14	CGE-S001	直筒	山口県	10.5	24.1	-	-	10.5	25.0	-	-	10.5	25.0
46	1	21	14	CGE-S002	直筒	山口県	10.5	24.2	-	-	10.5	25.1	-	-	10.5	25.1
47	1	21	14	CGE-S003	直筒	山口県	10.5	24.3	-	-	10.5	25.2	-	-	10.5	25.2
48	1	21	14	CGE-S004	直筒	山口県	10.5	24.4	-	-	10.5	25.3	-	-	10.5	25.3
49	1	21	14	CGE-S005	直筒	山口県	10.5	24.5	-	-	10.5	25.4	-	-	10.5	25.4
50	1	21	14	CGE-S006	直筒	山口県	10.5	24.6	-	-	10.5	25.5	-	-	10.5	25.5
51	1	21	14	CGE-S007	直筒	山口県	10.5	24.7	-	-	10.5	25.6	-	-	10.5	25.6
52	1	21	14	CGE-S008	直筒	山口県	10.5	24.8	-	-	10.5	25.7	-	-	10.5	25.7
53	1	21	15	CGE-S001	直筒	山口県	10.5	24.8	-	-	10.5	25.8	-	-	10.5	25.8
54	1	21	15	CGE-S002	直筒	山口県	10.5	24.9	-	-	10.5	25.9	-	-	10.5	25.9
55	1	21	15	CGE-S003	直筒	山口県	10.5	25.0	-	-	10.5	26.0	-	-	10.5	26.0
56	1	21	15	CGE-S004	直筒	山口県	10.5	25.1	-	-	10.5	26.1	-	-	10.5	26.1
57	1	21	15	CGE-S005	直筒	山口県	10.5	25.2	-	-	10.5	26.2	-	-	10.5	26.2
58	1	21	15	CGE-S006	直筒	山口県	10.5	25.3	-	-	10.5	26.3	-	-	10.5	26.3
59	1	21	15	CGE-S007	直筒	山口県	10.5	25.4	-	-	10.5	26.4	-	-	10.5	26.4
60	1	21	15	CGE-S008	直筒	山口県	10.5	25.5	-	-	10.5	26.5	-	-	10.5	26.5
61	1	21	16	CGE-S001	直筒	山口県	10.5	25.5	-	-	10.5	26.6	-	-	10.5	26.6
62	1	21	16	CGE-S002	直筒	山口県	10.5	25.6	-	-	10.5	26.7	-	-	10.5	26.7
63	1	21	16	CGE-S003	直筒	山口県	10.5	25.7	-	-	10.5	26.8	-	-	10.5	26.8
64	1	21	16	CGE-S004	直筒	山口県	10.5	25.8	-	-	10.5	26.9	-	-	10.5	26.9
65	1	21	16	CGE-S005	直筒	山口県	10.5	25.9	-	-	10.5	27.0	-	-	10.5	27.0
66	1	21	16	CGE-S006	直筒	山口県	10.5	26.0	-	-	10.5	27.1	-	-	10.5	27.1
67	1	21	16	CGE-S007	直筒	山口県	10.5	26.1	-	-	10.5	27.2	-	-	10.5	27.2
68	1	21	16	CGE-S008	直筒	山口県	10.5	26.2	-	-	10.5	27.3	-	-	10.5	27.3
69	1	21	17	CGE-S001	直筒	山口県	10.5	26.2	-	-	10.5	27.4	-	-	10.5	27.4
70	1	21	17	CGE-S002	直筒	山口県	10.5	26.3	-	-	10.5	27.5	-	-	10.5	27.5
71	1	21	17	CGE-S003	直筒	山口県	10.5	26.4	-	-	10.5	27.6	-	-	10.5	27.6
72	1	21	17	CGE-S004	直筒	山口県	10.5	26.5	-	-	10.5	27.7	-	-	10.5	27.7
73	1	21	17	CGE-S005	直筒	山口県	10.5	26.6	-	-	10.5	27.8	-	-	10.5	27.8
74	1	21	17	CGE-S006	直筒	山口県	10.5	26.7	-	-	10.5	27.9	-	-	10.5	27.9
75	1	21	17	CGE-S007	直筒	山口県	10.5	26.8	-	-	10.5	28.0	-	-	10.5	28.0
76	1	21	17	CGE-S008	直筒	山口県	10.5	26.9	-	-	10.5	28.1	-	-	10.5	28.1
77	1	21	18	CGE-S001	直筒	山口県	10.5	26.9	-	-	10.5	28.2	-	-	10.5	28.2
78	1	21	18	CGE-S002	直筒	山口県	10.5	27.0	-	-	10.5	28.3	-	-	10.5	28.3
79	1	21	18	CGE-S003	直筒	山口県	10.5	27.1	-	-	10.5	28.4	-	-	10.5	28.4
80	1	21	18	CGE-S004	直筒	山口県	10.5	27.2	-	-	10.5	28.5	-	-	10.5	28.5
81	1	21	18	CGE-S005	直筒	山口県	10.5	27.3	-	-	10.5	28.6	-	-	10.5	28.6
82	1	21	18	CGE-S006	直筒	山口県	10.5	27.4	-	-	10.5	28.7	-	-	10.5	28.7
83	1	21	18	CGE-S007	直筒	山口県	10.5	27.5	-	-	10.5	28.8	-	-	10.5	28.8
84	1	21	18	CGE-S008	直筒	山口県	10.5	27.6	-	-	10.5	28.9	-	-	10.5	28.9
85	1	21	19	CGE-S001	直筒	山口県	10.5	27.6	-	-	10.5	29.0	-	-	10.5	29.0
86	1	21	19	CGE-S002	直筒	山口県	10.5	27.7	-	-	10.5	29.1	-	-	10.5	29.1
87	1	21	19	CGE-S003	直筒	山口県	10.5	27.8	-	-	10.5	29.2	-	-	10.5	29.2
88	1	21	19	CGE-S004	直筒	山口県	10.5	27.9	-	-	10.5	29.3	-	-		

第2表 遺物観察表(2) 土器

第2表 遺物觀察表 (3) 土器

第2表 遺物観察表(4) 土器・土製品

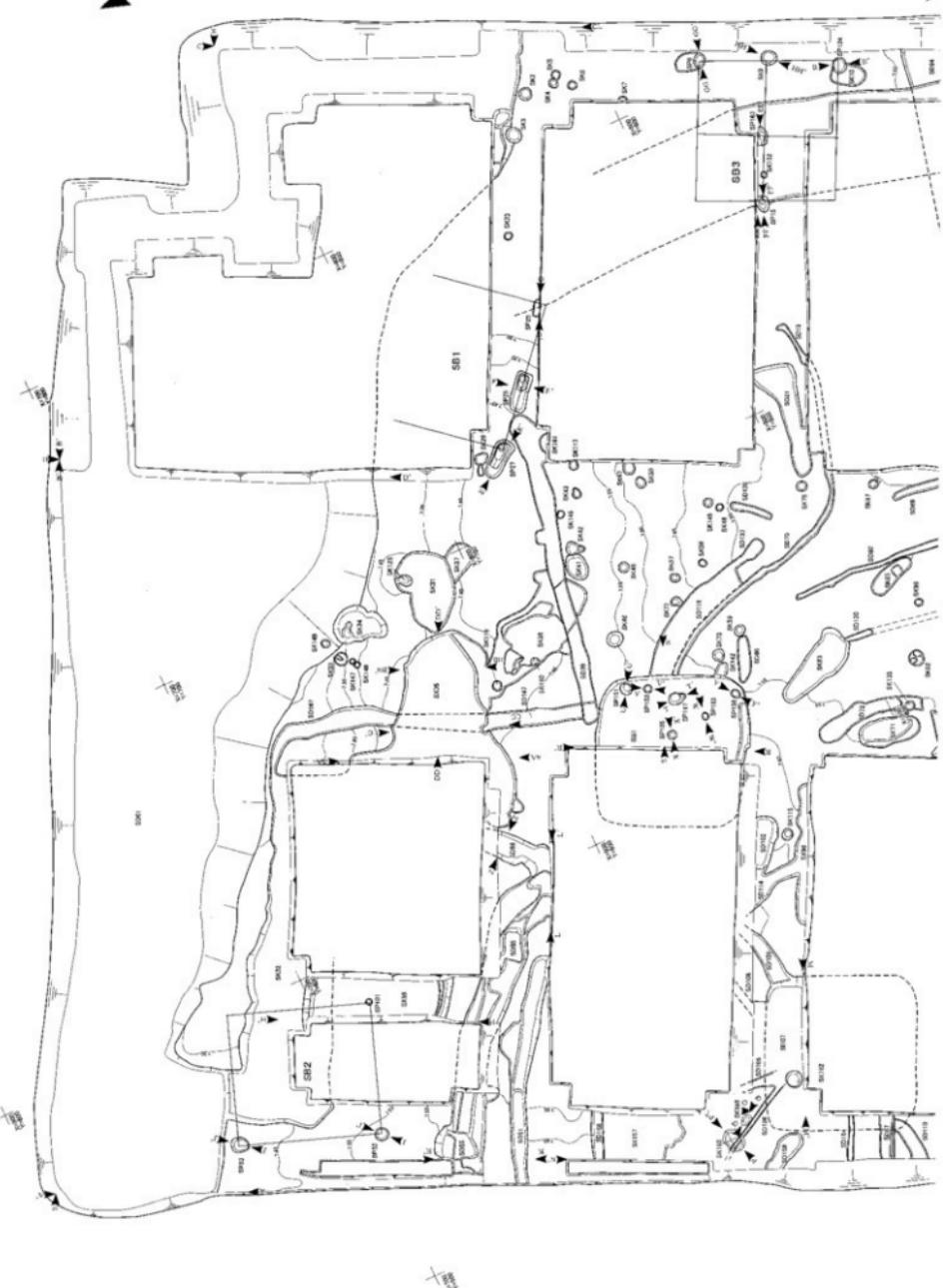
第2表 遺物観察表(5)

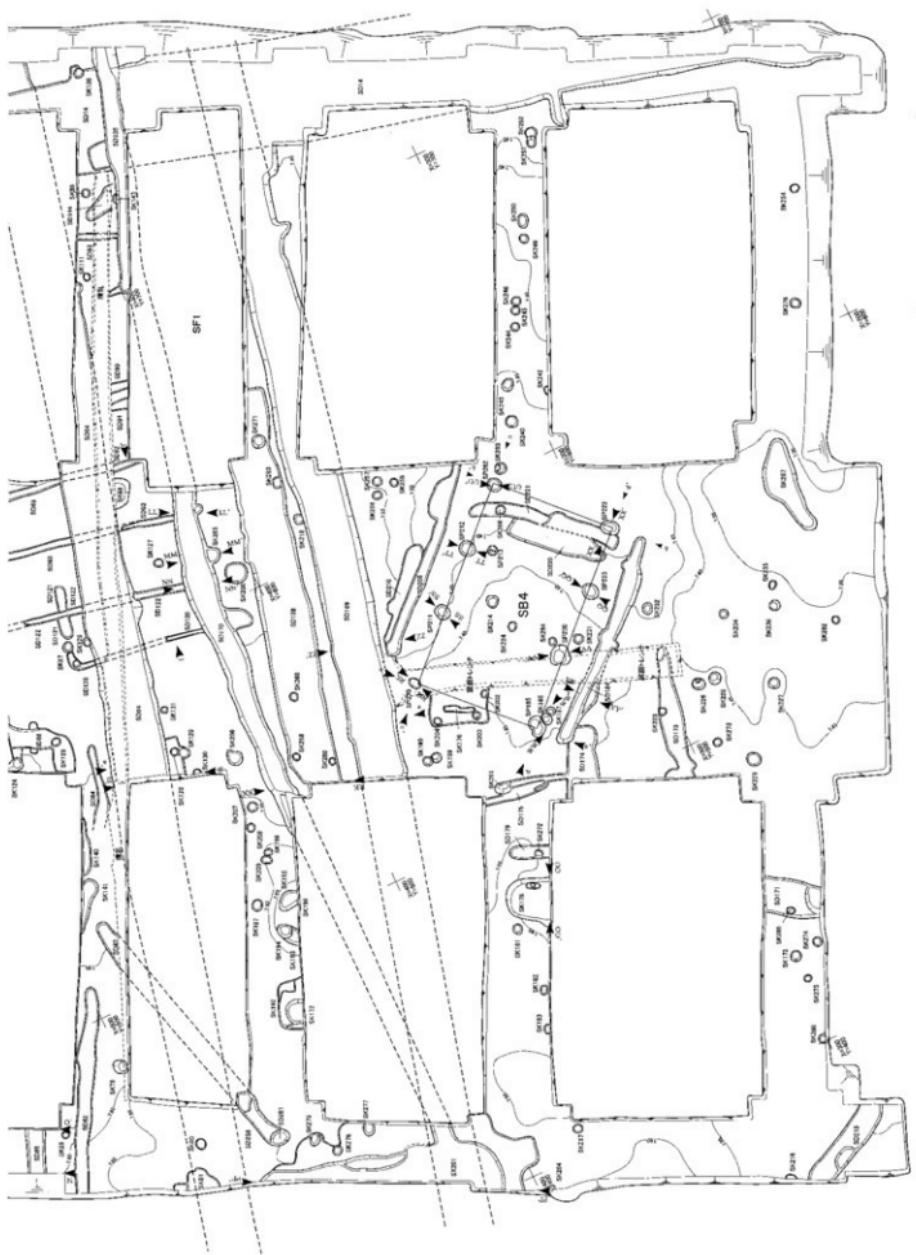
石製品

遺物 No.	遺物 名	実測回 数	平均回 数	出土地点	種別	時代	法 直			材質	備考	
							長さ	幅	厚さ			
176	I	25	10	E5区 SD01 X25Y25	磨製石斧	漢文中期以降	6.7	4.6	2.2	104	蛇紋岩	丸角式、両側面に叩打痕
177	I	25	10	F4区 SD01 X25Y25	打製石斧		19.8	9.5	3.1	813		両側縁つぶれ
178	I	25	10	SD01	石皿		17	11.9	4.3	1287		台石用、裏面砥石
179	56	25	17	F3区 SD65	刮削		3.6	4.3	1.1	17	片體質灰岩 (横山真輪石か)	
180	55	25	17	F3区 SD65	石核		4.3	4.2	4.3	66	軟石英	
181	55	25	17	D9区 SD64	刮削		7.5	8.5	2.8	221		刃部「擦痕」
182	94	25	17	D9区 SD64	刮削		2.4	4.8	0.9	19	綠色磁灰岩	
183	169	25	17	C5区 SD169	砾石		8.1	6.1	3.5	221		無
184	35	25	17	F4区 SK35	刮削		2.5	4	1	8	赤玉質安山岩	
185	178	25	17	D2区 SK178	二次加工刮削		2.5	3.3	1.1	9	黒曜石	
186	201	25	17	SX201	木輪(下輪轍)	中世	18.7	18.7	13.8	7009		
187	300	25	17	D3区 H1層	鹿角か 牛頭	漢文中期 中期	4.4	3.3	1.4	18		下部欠損、穿孔2箇所 二叉文
188	560	25	17	D3区 H1層	石核	仰生	3.7	1.6	0.5	2	赤玉質安山岩	
189	360	25	10	F4区 H1層	打製石斧		10	6.4	1.8	121		両側縁つぶれ

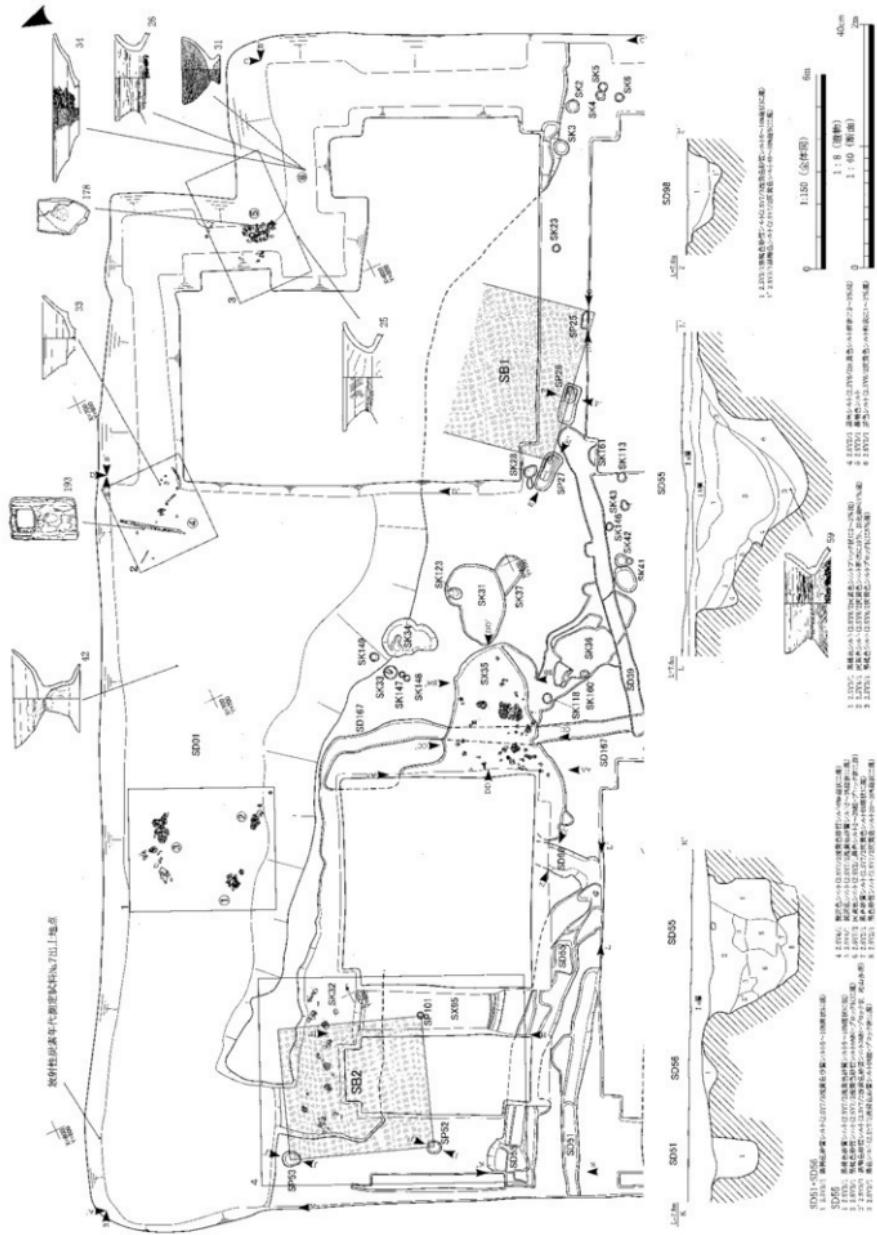
木製品

報告番 No.	遺構 No.	実測回 数	平均回 数	出土地点	種別	時代	法 直		附 備	保存処理	自然科学分析	備考	
							長さ	幅					
190	I	26	18	SD01	角材		44.3	5.2	4.0	スギ	○	AMS No.5	直縫同定① 一部炭化
191	I	26	18	SD01	角材		89.5	5.3	2.8	スギ	○		直縫同定④ 穿孔2箇所
192	I	26	18	SD01	角材		188	12.0	4.8	スギ	○		直縫同定⑤ 出土状況(あり)
193	I	26	18	SD01	角材		20.2	11.6	8.1	スギ	○	AMS No.4	直縫同定② 穿孔1箇所
194	I	26	18	P5区 SD01 X27Y21	角材		21.3	8.7	5.0	スギ	○		直縫同定⑥
195	I	26	18	P6区 SD01 X27Y25	板材		(46.3)	5.0	0.55	スギ	○		直縫同定③
196	I	26	18	P6区 SD01 X27Y25	板材		(15.9)	6.2	0.5	スギ	○		直縫同定④
197	I	26	18	SD01 X25Y26	板材		(30.6)	3.1	0.7	スギ	○		直縫同定⑦
198	I	26	18	SD01 X25Y25	板材		(27.0)	3.7	0.55	スギ	○		直縫同定⑥
199	I	26	18	SD01 X25Y25	板材	平安時代	(17.85)	5.8	0.75	スギ	○	AMS No.6	直縫同定⑧
200	15	26	18	SB3-SP15	柱	内墳時代前期	20.2	14.0	14.0	スギ	○	AMS No.3	直縫同定⑨
201	26	26	18	SB1-SP25	柱		47.9	17.6	17.6	スギ	○		直縫同定⑩
202	27	26	18	SB1-SP27	柱		46.4	16.8	16.8	スギ	○	AMS No.1 AMS No.2	直縫同定⑪
203	52	26	18	SB2-SP52	柱	古墳時代前半	24.5	8.8	3.7	スギ	○		直縫同定⑫
204	53	26	18	SB2-SP53	柱		32.5	12.7	5.9	スギ	○		直縫同定⑬



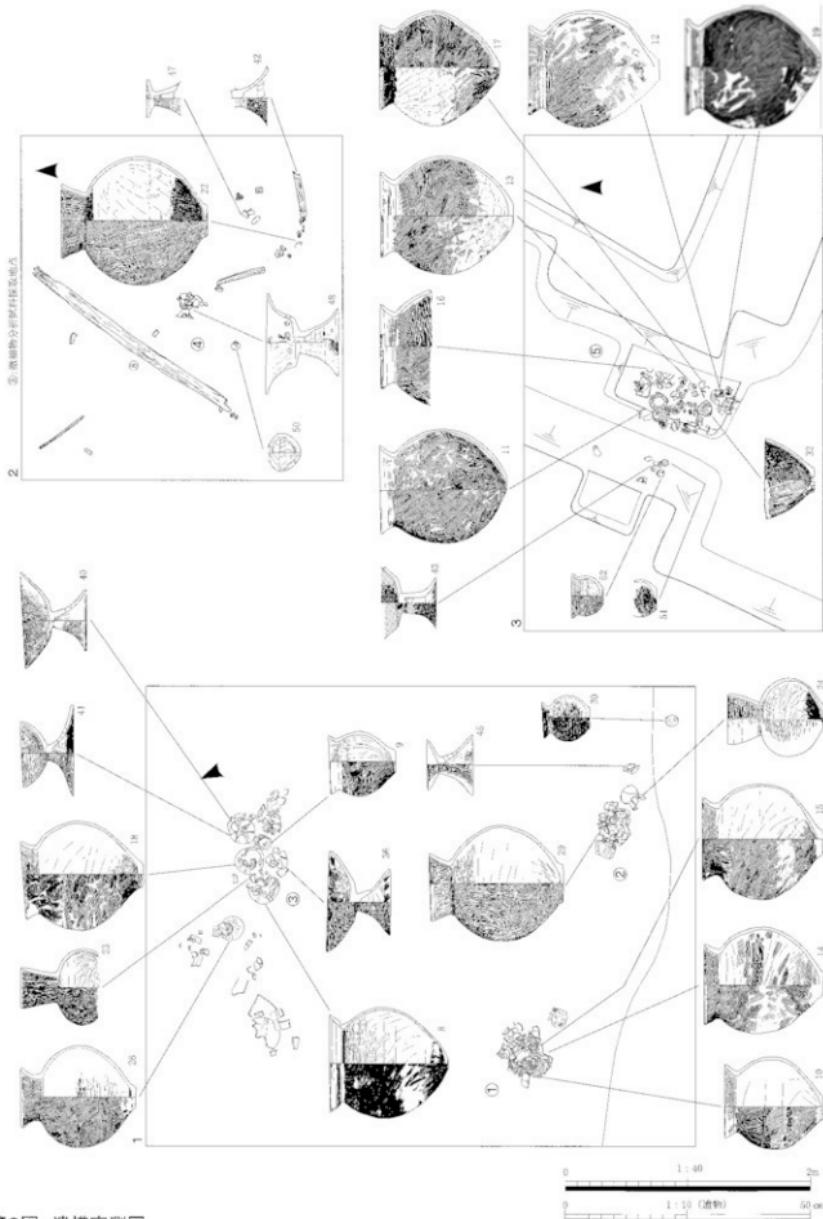


第6図 遺構全体図

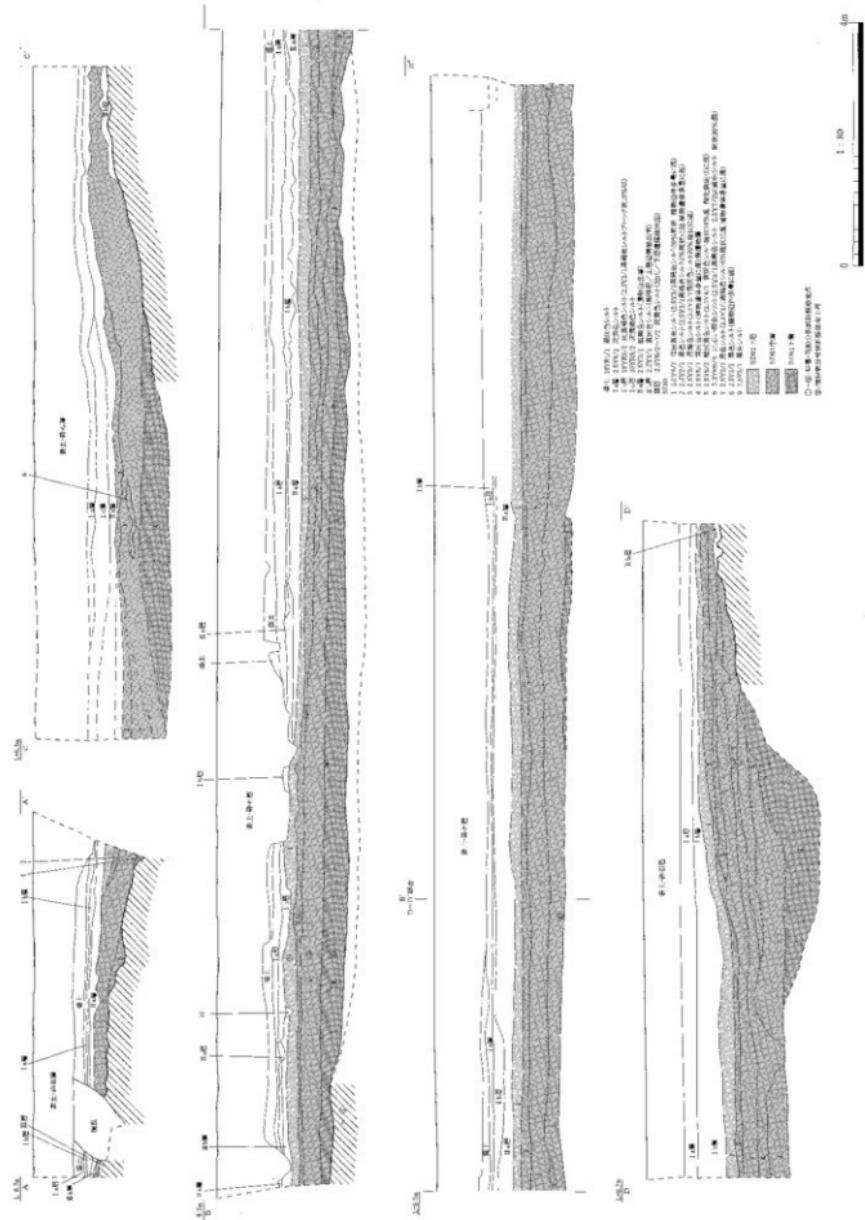


第7図 遺構実測図

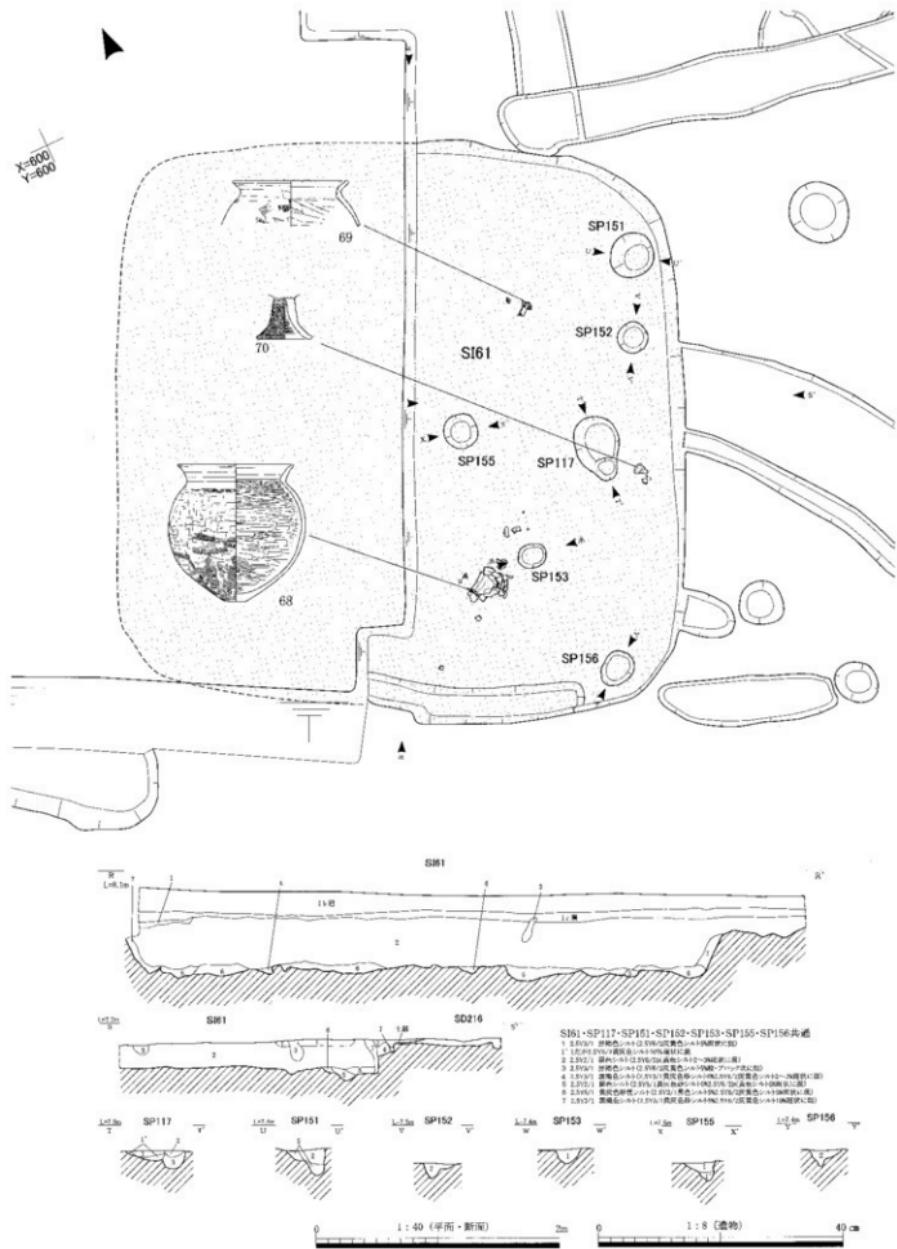
SD01 SD51 SD55 SD56 SD98 SX95 SB1 SB2



第8図 遺構実測図
SD01

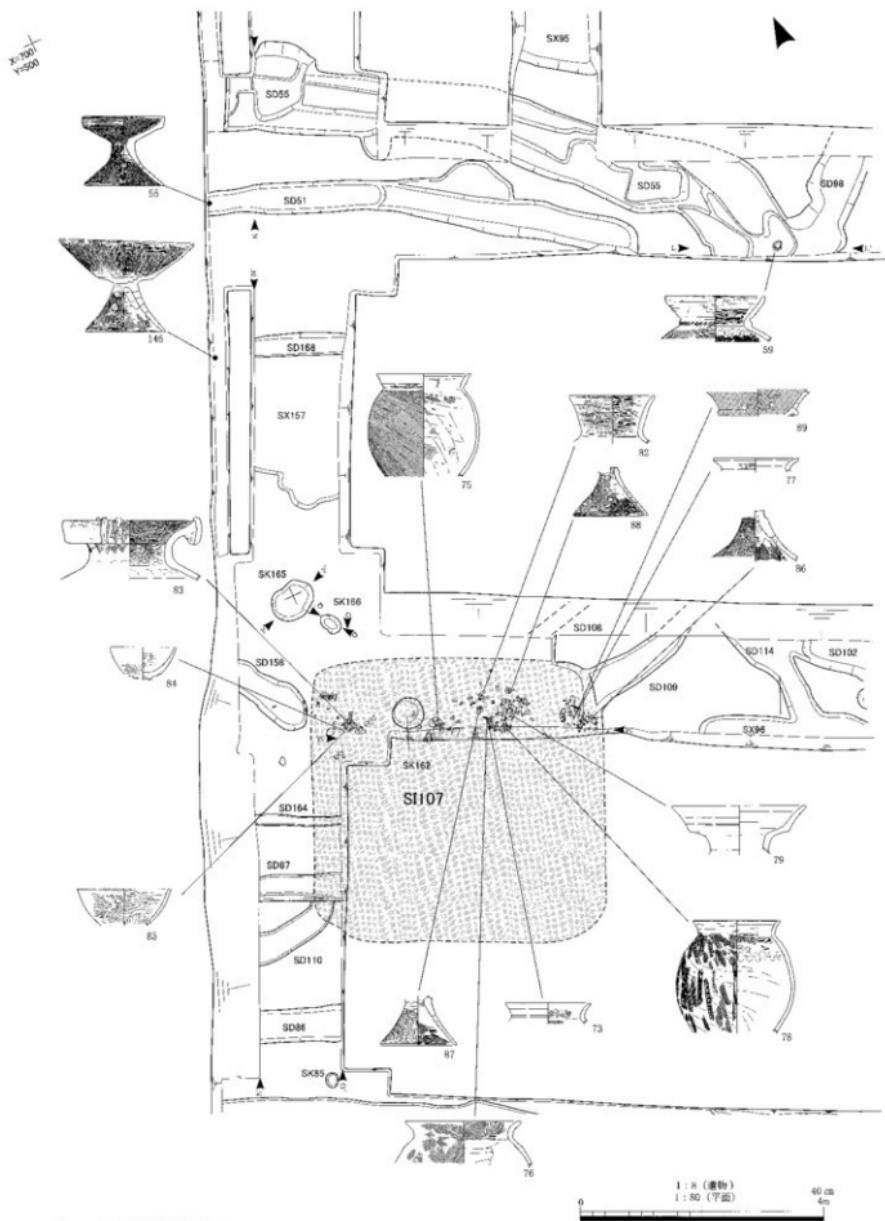


第9図 遺構実測図
SD01



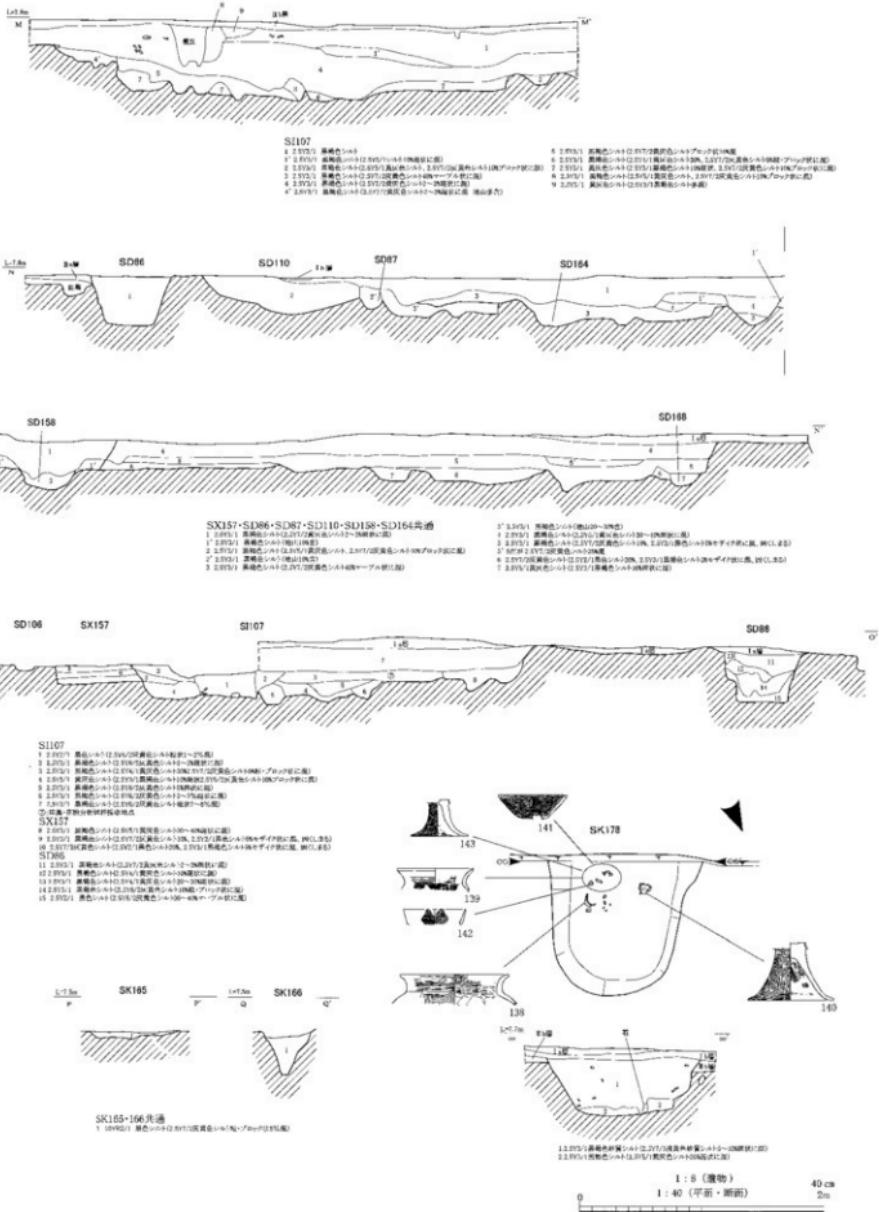
第10図 遺構実測図

SI61 SP117 SP151 SP152 SP153 SP155 SP156



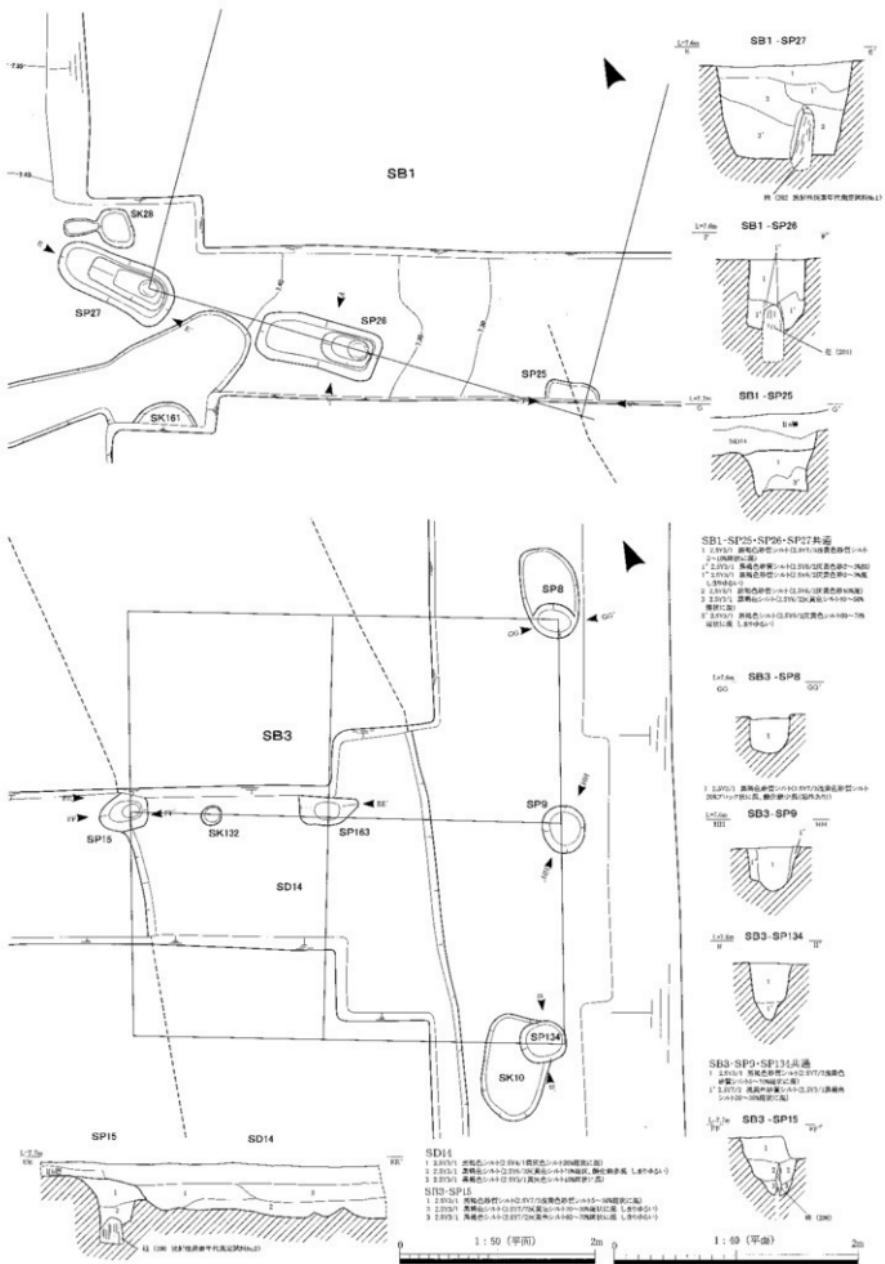
第11図 遺構実測図

SI107 SD51 SD55 SD56 SD86 SD87 SD110 SD158 SD164 SD168 SK165 SK166 SX157



第12図 遺構案測図

SI107 SD86 · SD110 · SD87 · SD164 · SX157 · SD158 · SD168 SX157 · SI107 · SD86 SK165 SK166
SK178



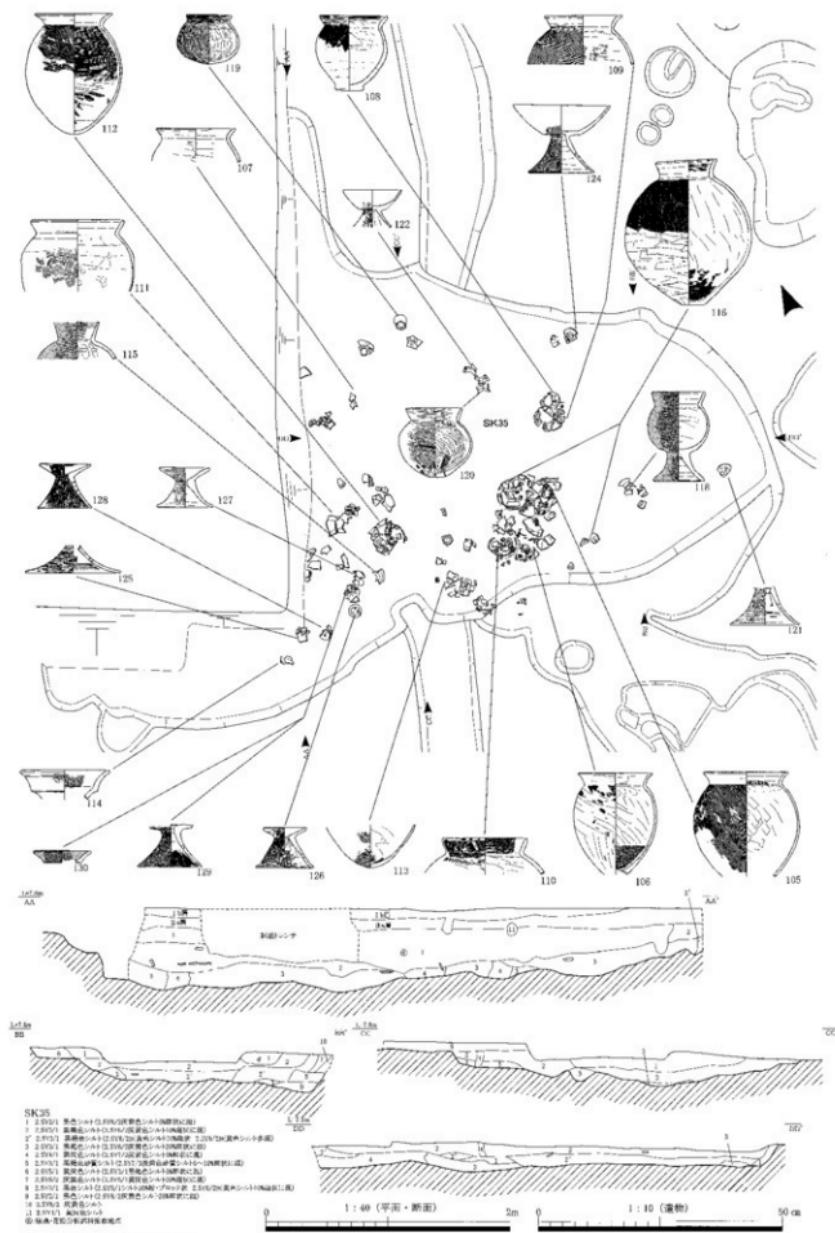
第13図 遺構実測図

SB1 - SP25 • SP26 • SP27 SB3 - SP8 • SP9 • SP15 • SP134 SP15 • SD14

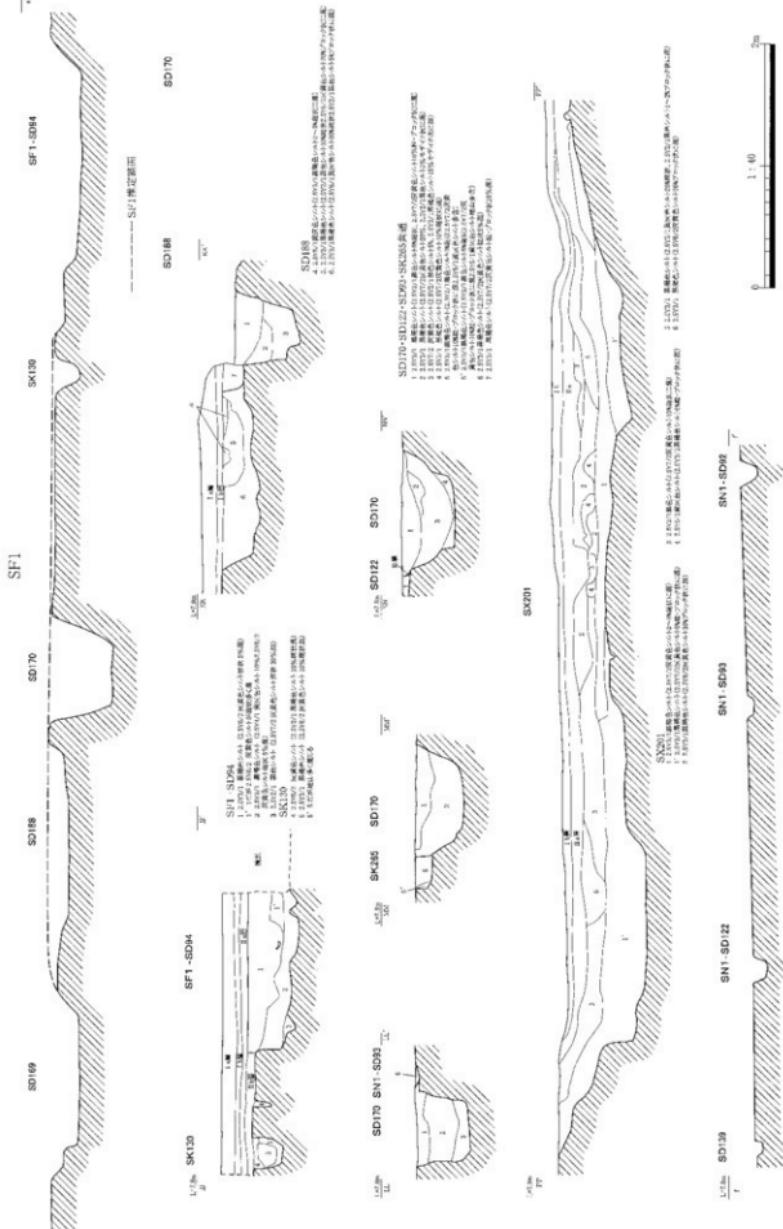


第14図 遺構実測図

SB2-SP52・53 SK32・SX95

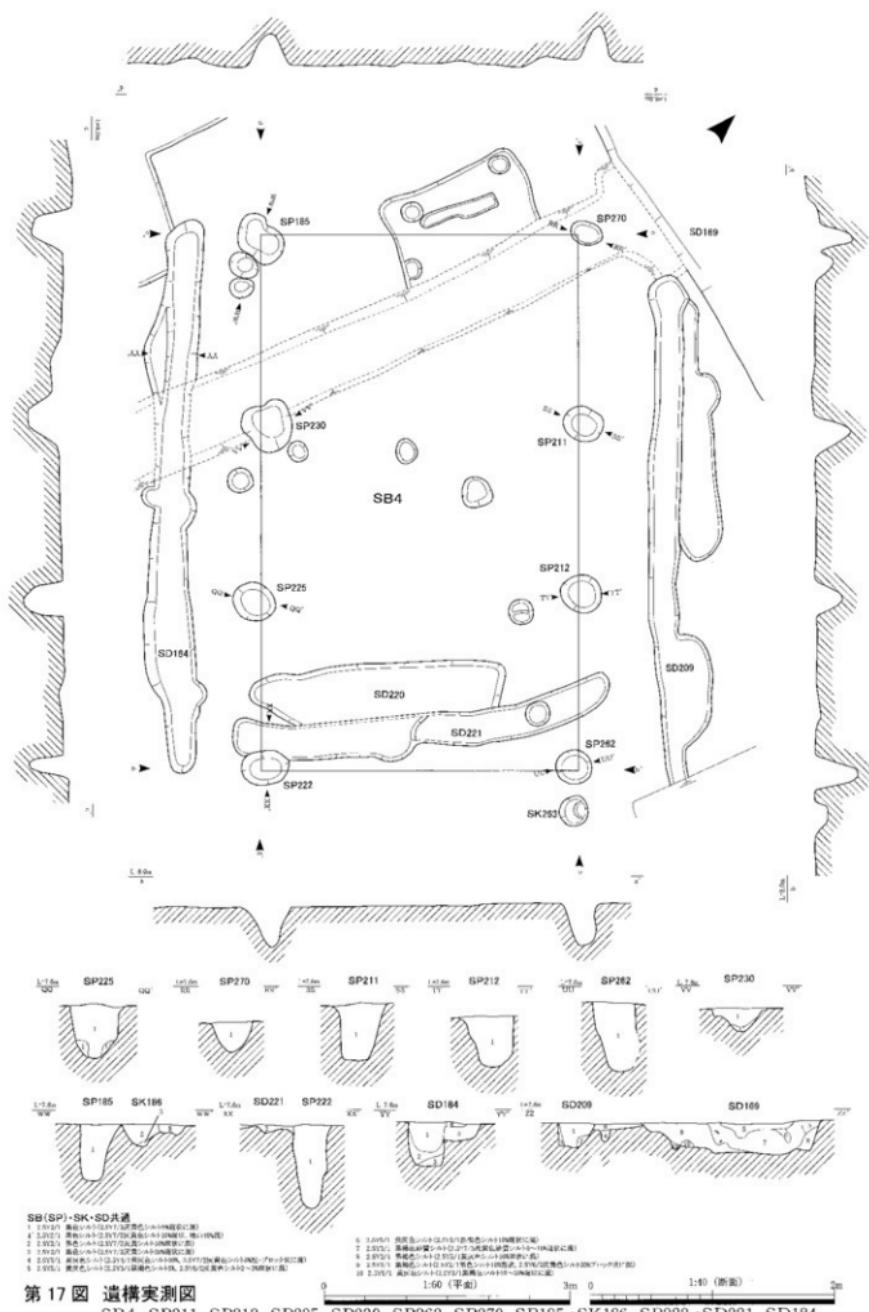


第15図 遺構実測図
SK35



第16図 遺構実測図

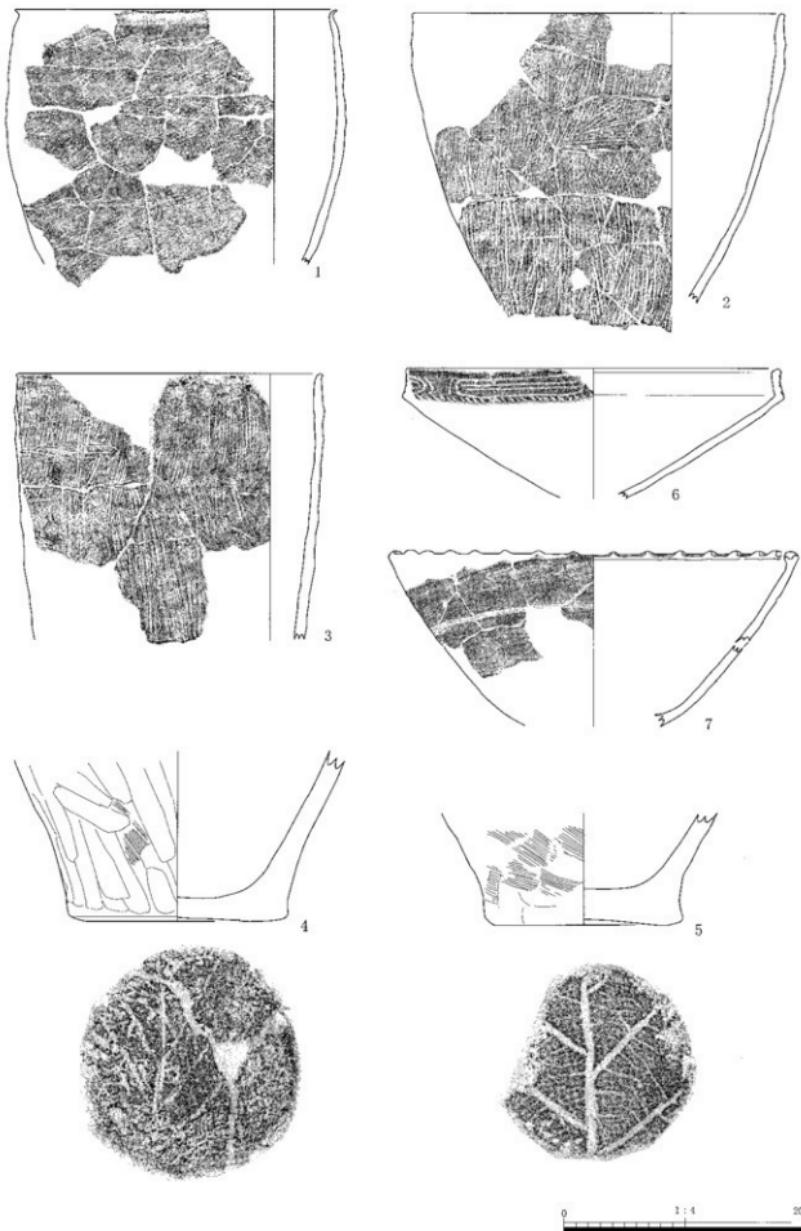
SF1 - SD169 · SD94 SD94 · SK130 SD170 · SD188 SD170 SD93 · SD170 SD170 · SK265
SD122 · SD170 SX201 SN1 - SD91 · SD92 · SD93 · SD122 · SD139



第 17 図 道構実測図

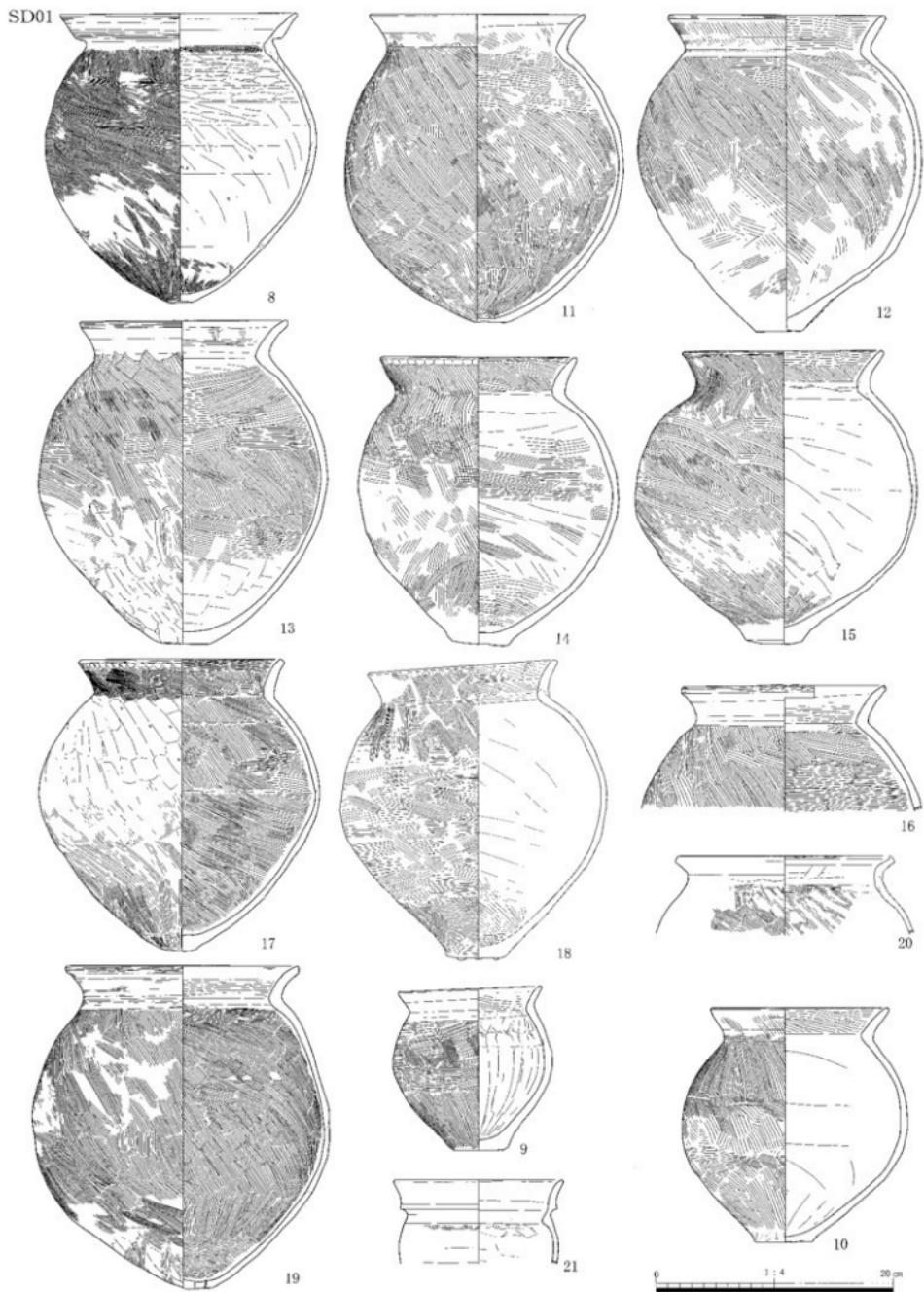
SB4-SP211 SP221 SP225 SP230 SP262 SP270 SP185・SK186 SP222・SD221 SD184 SD169・SD209

SD01



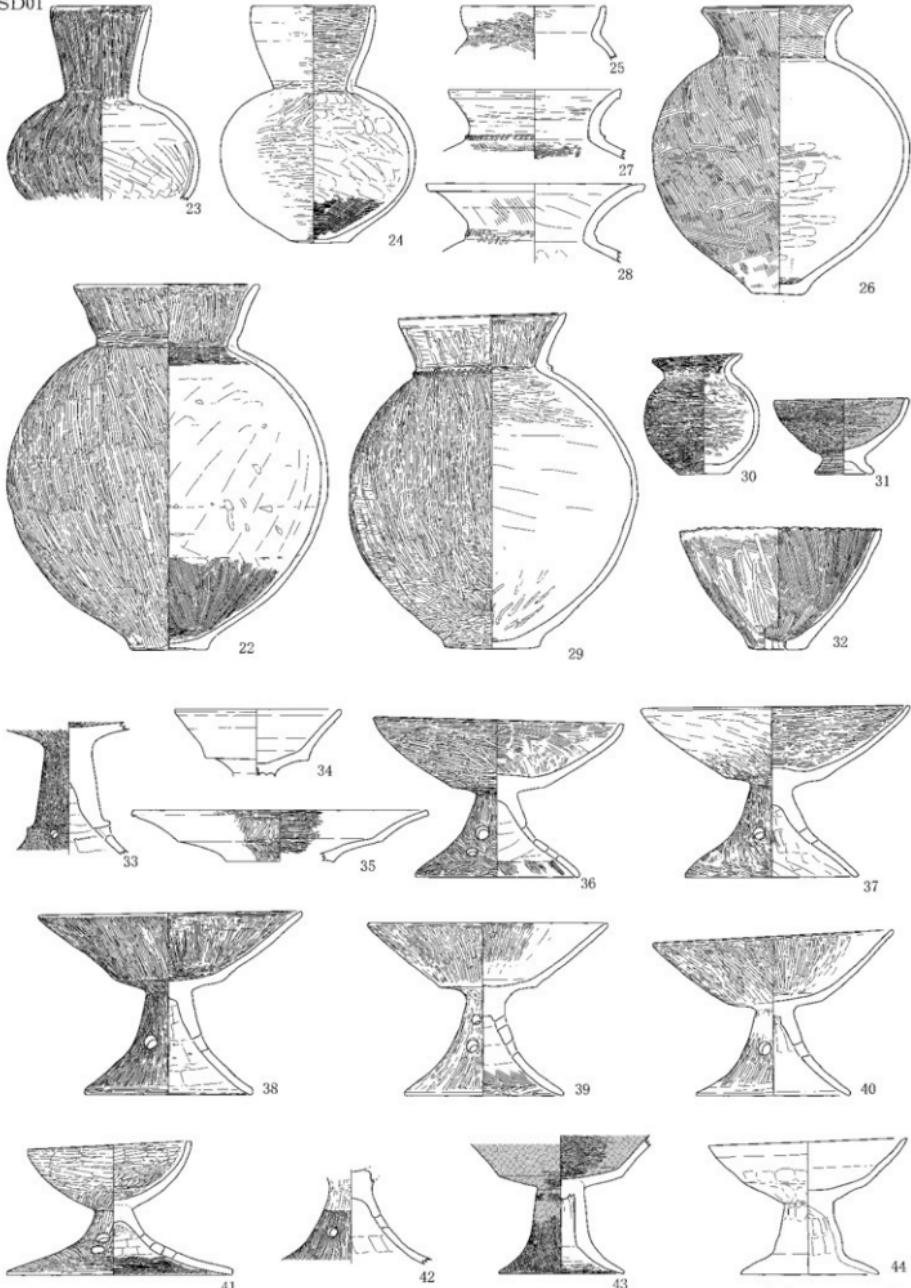
第18図 遺物実測図 (1/4)

SD01(1~7)



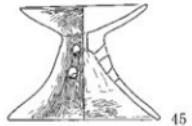
第 19 図 遺物実測図 (1/4)
SD01(8 ~ 21)

SD01



第 20 図 遺物実測図 (1/4)
SD01(22 ~ 44)

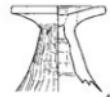
SD01



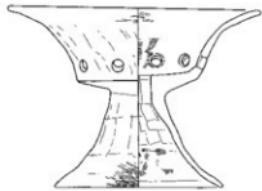
45



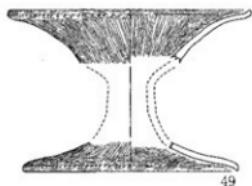
46



47



48



49



50

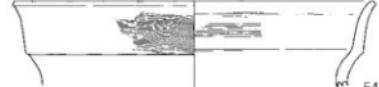


51

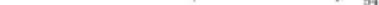


52

SD51



53



54

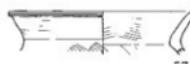
SD55



55



56



57



58



59



60



61



62

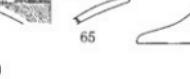
SD66



63



64



65



66

SI61



68

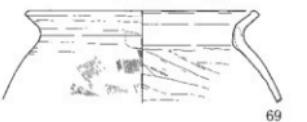
SI107



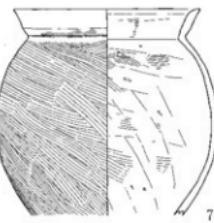
72



73



69



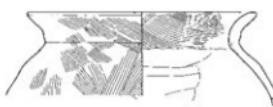
75



78



70



76



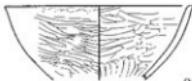
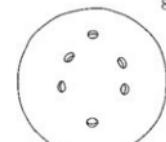
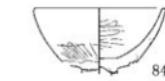
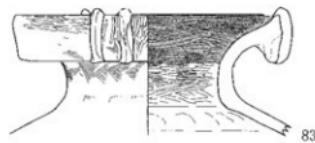
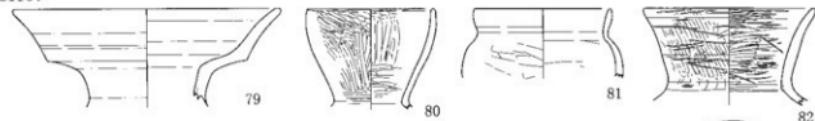
77

第 21 図 遺物実測図 (1/4)

SD01(45 ~ 53) SD51(54 ~ 55) SD55(56 ~ 62) SD66(63) SD72(69) SD179(67) SD98(65 ~ 66)
SI61(68 ~ 71) SI107(72 ~ 78)

0 1 : 4 20 cm

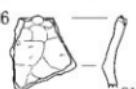
SI107



SB3 - SP8



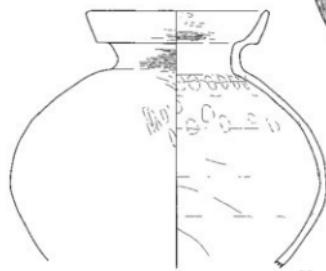
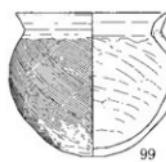
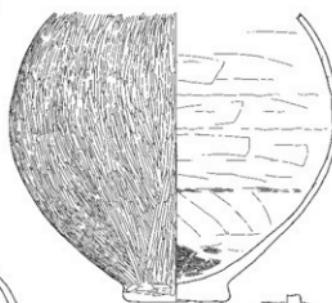
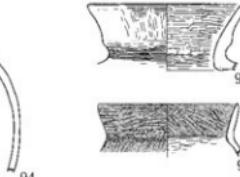
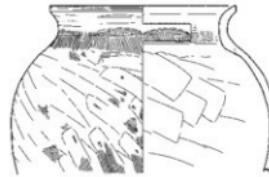
SB1 - SP26



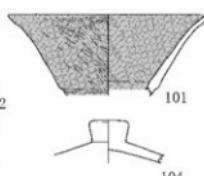
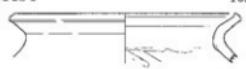
SB1 - SP27



SK32



SK34

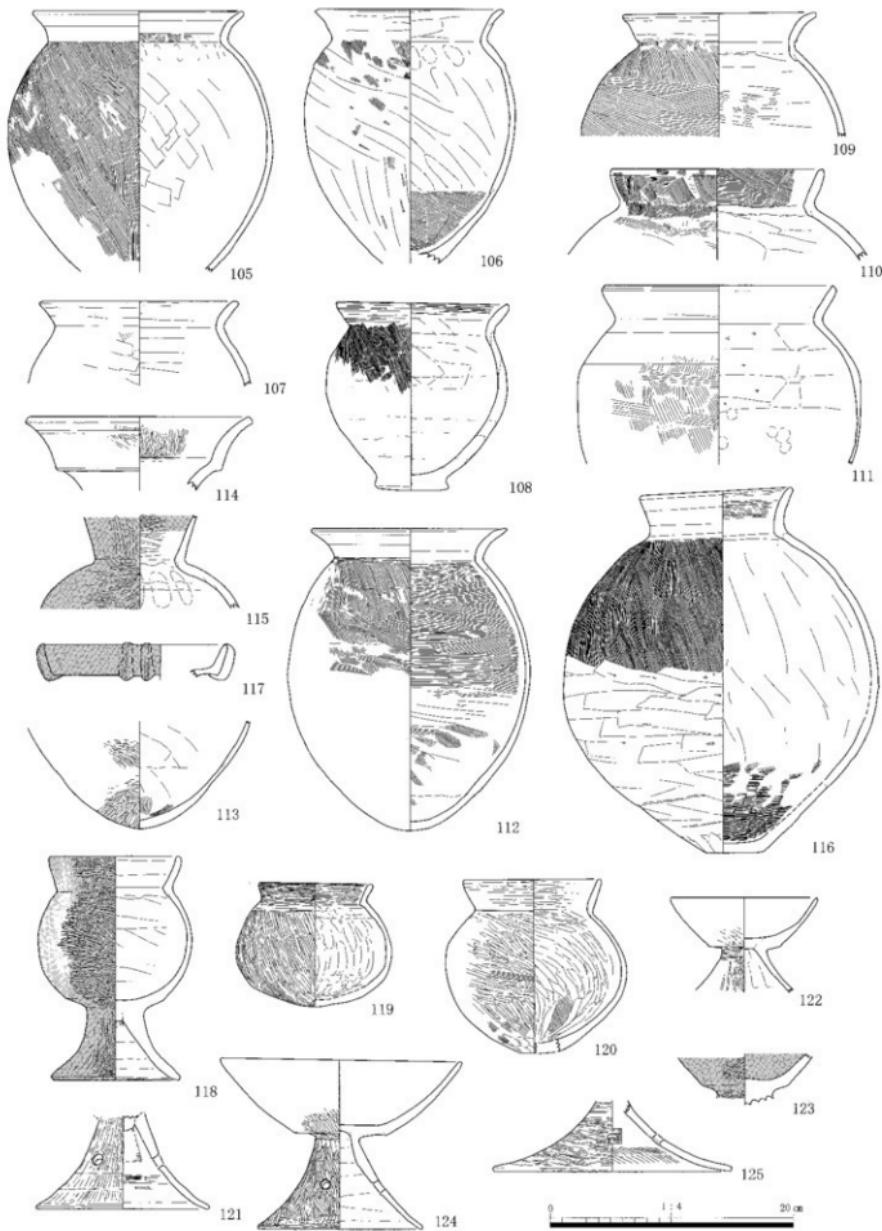


103 104

0 1:4 20 cm

第22図 遺物実測図 (1/4)

SI107(79 ~ 89) SB3 - SP8(90) SB1 - SP26(91) SB1 - SP27(92) SK32(93 ~ 102)
SK34(103 ~ 104)

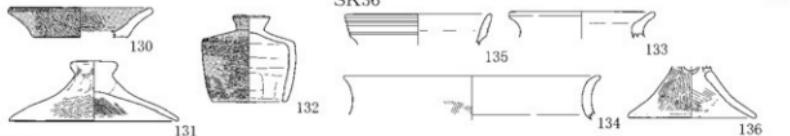


第 23 図 遺物実測図 (1/4)
SK35(105 ~ 125)

SK35



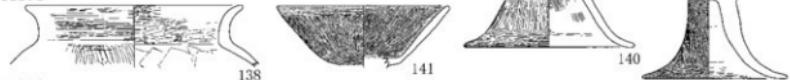
SK36



SK48



SK178



SK216



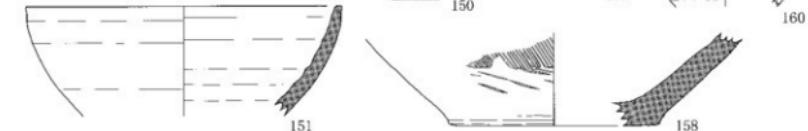
SX157



SD169



SD14



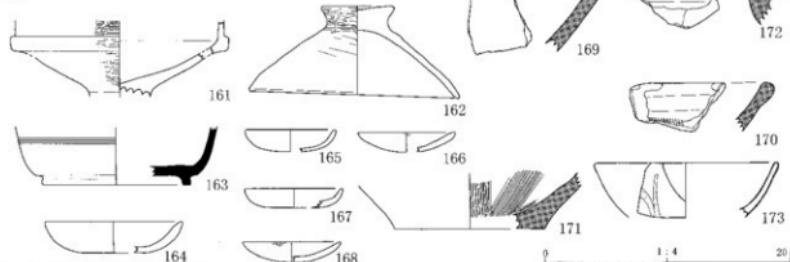
SD94



SX201



II層

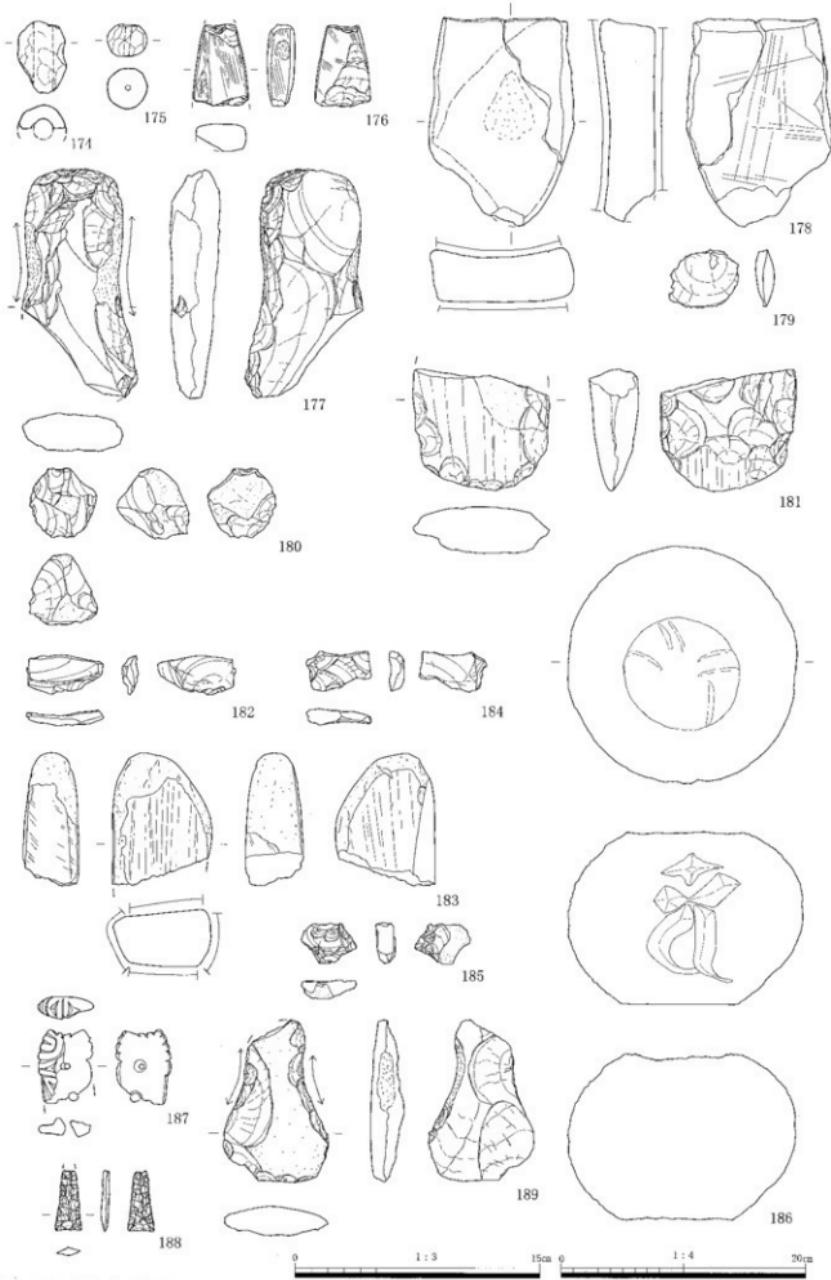


第24図 遺物実測図 (1/4)

SK35(126～132) SK36(133～136) SK48(137) SK178(138～143) SK216(144)

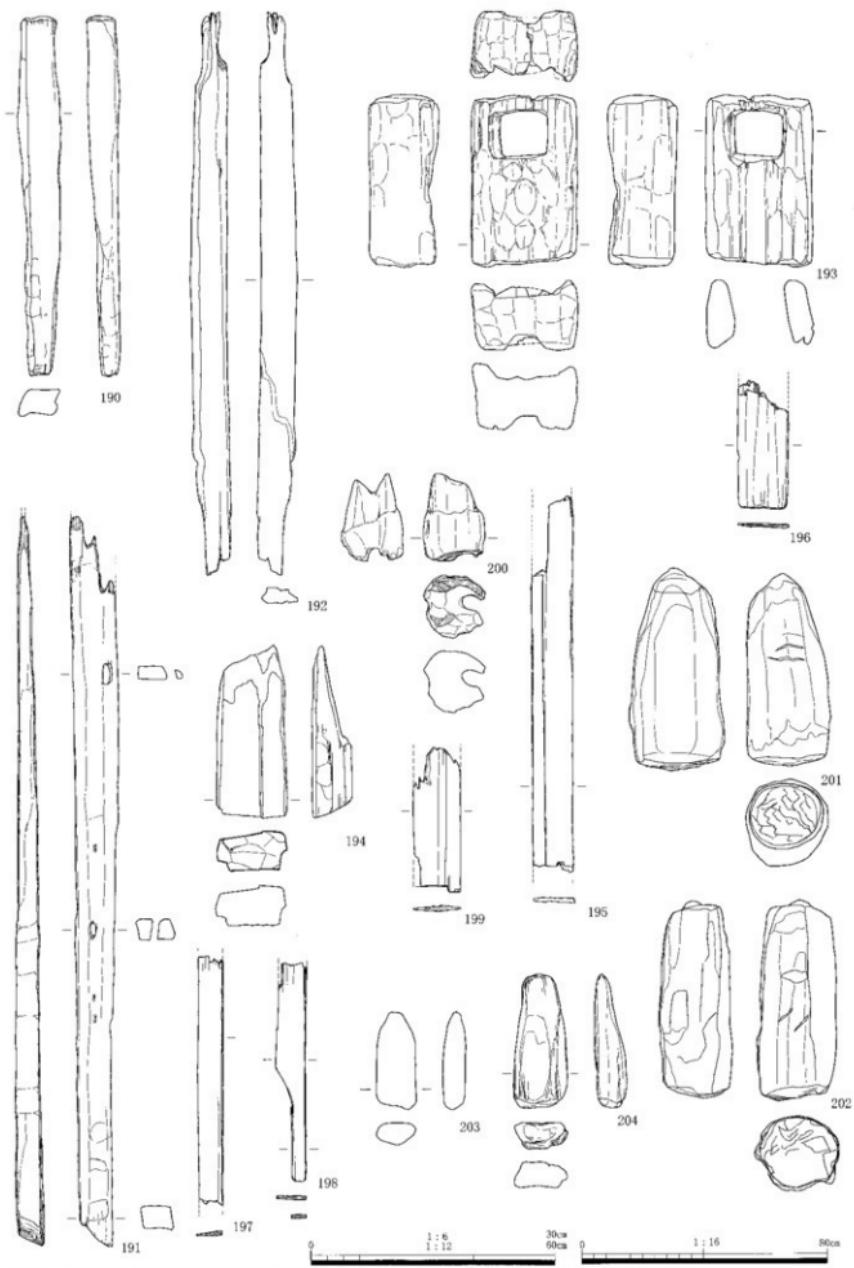
SX157(145～147) SD169(148) SD14(151) SD94(152～156) SX201(157) SD170(159・160)

SK192(150) II層(161～173)



第25図 遺物実測図 (179～185・187～189 : 1/3 174～178・186 : 1/4)

SD01(176～178) SD55(180～182) SD94(184) SD169(183) SK35(179) SK178(185) SX201(186)
II層(174・175・187～189)



第26図 遺物実測図 (190・191・193～199 : 1/6, 200・203・204 : 1/12, 192・201・202 : 1/16)
SD01(190～199) SP15(200) SP26(201) SP27(202) SP52(203) SP53(204)

第IV章 自然科学分析

第1節 環境考古学分析

株式会社古環境研究所

1.はじめに

沼、大型土坑、堅穴建物の堆積物について、花粉分析、珪藻分析、種実同定、樹種同定の環境考古学分析を行い、植生、環境、生業の推定復原を行った。花粉分析は一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されていることから、遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定を試みた。珪藻分析は、珪藻の各分類群が、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ海水域や淡水域など特定の生育場所を持っていること、珪藻遺骸群集の組成が当時の堆積環境を反映していることから、水域を主とする古環境復元の指標として利用した。微細物分析では種実同定を行った。堆積物から種実を検出し、その群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うこととした。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べた。木製品の材料となる木材がセルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であることから、木製品の樹種による利用状況や流通を探った。

2. 試料

花粉分析と珪藻分析の試料は、SD01 沼埋土の試料①～⑤の5点、SK35 大型土坑埋土の試料⑥の1点、SI107 堅穴建物埋土の試料⑦の1点の計7点である。種実同定試料は、SD01 沼埋土上第3層（試料⑧）とSI107 堅穴建物埋土（試料⑦）の計2点の堆積物である。試料採取箇所を第9・12・15図および第27・28図に示す。

樹種同定試料は柱2点（203、204）、角材（190）、部材（191）の合計4点である。

3. 花粉分析

（1）方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cmを採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え 15 分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの籠で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- 5) 水洗処理の後、冰酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 6) 再び冰酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
- 8) 檢鏡・計数

検鏡は、生物顯微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（—）で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属とする。

（2）結果

出現した分類群は、樹木花粉22、樹木花粉と草本花粉を含むもの5、草本花粉24、シダ植物胞子2形態の計53である。これらの学名と和名および粒数を第3表に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第27図に示す。なお、200個未満であっても100個以上計数できた試料については傾向をみるとために参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても検鏡した結果、1分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

[樹木花粉]

モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複維管束亞属、マツ属單維管束亞属、スギ、イチイ科イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亞属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、カエデ属、トチノキ、ブドウ属

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科-イラクサ科、バラ科、ウコギ科、ゴマノハグサ科、ニワトコ属-ガマズミ属

[草本花粉]

ガマ属—ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ギンギシ属、ソバ属、アザケ科—ヒユ科、ナデシコ科、カラマツソウ属、アブラナ科、ササゲ属、ツリフネソウ属、キカシグサ属、アリノトウグサ属—フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、オミナエシ科、タンボボ亜科、キク亜科、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

单条溝胞子、三条溝胞子

[寄生虫卵]

回虫卵

1) SD01 沼埋土およびSK35 大型土坑埋土

試料⑤を除く各試料は樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、およそ 55%から 83%を占める。なお、試料②では樹木花粉もやや多く約 33%を占める。

試料⑤は花粉密度が極めて低く、ほとんど花粉が検出されない。

試料④では、イネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属が高率に出現し、キク亜科、タンボボ亜科、アブラナ科、カヤツリグサ科が伴われる。樹木花粉ではスギ、コナラ属コナラ亜属を主に、クリなどが低率に検出される。ただし花粉密度はやや低い。

試料⑥（SK35）では、イネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属がやや減少し、カヤツリグサ科が増加する。樹木花粉では、スギ、コナラ属コナラ亜属がやや増加し、ハンノキ属、カバノキ属、イチイ科—イスガヤ科—ヒノキ科などが出現する。

試料③では、ヨモギ属とイネ科が高率で、アブラナ科がやや増加し、カヤツリグサ科が減少する。スギ、コナラ属コナラ亜属の樹木花粉は減少する。

試料②では、イネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属、アブラナ科が減少し、カヤツリグサ科が増加する。スギ、コナラ属コナラ亜属、ブナ属、ハンノキ属、ニレ属—ケヤキなどの樹木花粉がやや増加する。

試料①では、イネ科（イネ属型を含む）、アブラナ科、タンボボ亜科などが増加し、ヨモギ属が減少する。また、ソバ属が検出され、寄生虫卵の回虫卵が検出される。樹木花粉は減少し、スギ、コナラ属コナラ亜属などが減少し、マツ属複雑管束亜属、ハンノキ属などがやや増加する。

2) SI107 壺穴建物埋土

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属が優占し、アブラナ科、カヤツリグサ科、アザケ科—ヒユ科が伴われる。また、ササゲ属が検出される。樹木花粉では、スギ、コナラ属コナラ亜属、ヤナギ属、ハンノキ属、コナラ属アカガシ亜属などが低率に検出される。

(3) 花粉分析から推定される植生と環境

試料⑤の層準では花粉密度が極めて低く、分解の行われる比較的乾燥した環境か堆積速度の速い環境が推定される。

1) SD01 沼埋土およびSK35 大型土坑埋土

下部の試料④の層準では、イネ科、ヨモギ属の草本が周辺に優勢に分布し、キク亜科、タンボボ亜科、アブラナ科、カヤツリグサ科が伴われ、周囲は草本が多かった。イネ属型の検出から水田の分布も推定される。樹木では地域的な森林としてスギを主に、コナラ属コナラ亜属などが分布していた。

試料⑥（SK35 大型土坑）では、下位にあたる試料④の層準と大きく変化のない植生が分布していた。カヤツリグサ科がやや多く、土坑内は低温な環境が示唆される。

試料③では、ヨモギ属が増加してイネ科とともに分布し、周囲はやや乾燥した環境が示唆される。アブラナ科がやや増加し、畑が拡大した可能性がある。

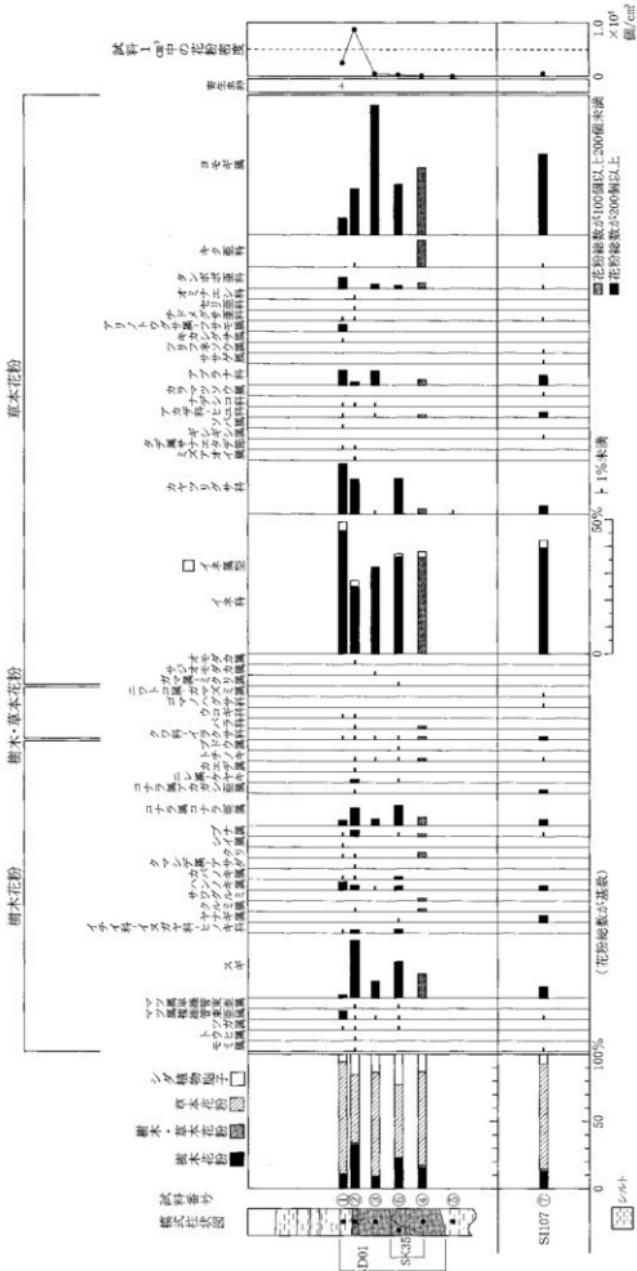
試料②では、ヨモギ属の乾燥した草本域が減少し、スギ林の拡大が推定される。カヤツリグサ科が増加し低温化が示唆され、イネ属型も出現し、水田の分布が推定される。スギ林を中心に、コナラ属コナラ亜属の林がやや拡大する。

試料①では、イネ科（イネ属型を含む）およびカヤツリグサ科が増加し、低温な草本域が拡大し周辺で水田が拡大したと推定される。栽培植物のソバ属ないし栽培植物を含むアブラナ科が検出され、畑の分布も示唆される。寄生虫卵の回虫卵が検出され、近隣の居住域からの汚染ないし人糞施肥の可能性が推定される。樹木ではマツ属複雑管束亜属とハンノキ属の増加し、アカマツ二次林が成立し湿地林が拡大する。SD01 沼の時期に分布していた周辺地域のスギ林は大きく減少する。

2) SI107 壺穴建物埋土（試料⑦）

周辺にはイネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属の草本が主に分布していた。アブラナ科、アザケ科—ヒユ科の畑作雜草と栽培植物のササゲ属が検出されることから、畑の分布が示唆される。周辺には樹木は少なく、やや遠方にスギ、コナラ属コナラ亜属、ヤナギ属、ハンノキ属、コナラ属アカガシ亜属などの樹木が分布していた。

第27図 花粉ダイアグラム



分類群	和名	SD01					SK35	SI107
		第1層	第2層	第3層	第4層	第5層		
Arboreal pollen	樹木花粉							
<i>Abies</i>	モミ属		2					1
<i>Picea</i>	クマヒ属		1					
<i>Tsuga</i>	ツガ属	1	1				1	
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複管束亞属	20	6	1			1	1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyylon</i>	マツ属單管束亞属		4				1	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	8	138	20	9		36	15
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イイノキ科-イヌガタ科-セイヨウカヤ科	1	7				4	
<i>Solix</i>	ヤナギ属						1	9
<i>Juglans</i>	クルミ属		2		1			
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	ザンクルミ				1			
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	20	11	2			4	6
<i>Betula</i>	カバノキ属	1	1				3	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ		2					
<i>Castanea crenata</i>	クリ	4	4		2			
<i>Castanopsis</i>	シ属	1						
<i>Fagus</i>	ブナ属	1	15		1		2	2
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亞属	13	42	8	3		20	8
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コラマツ属アガシ亞属		2					5
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ユリノキ属-ヤクモク		8				1	
<i>Acer</i>	カシダ属		1					
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ		1	1	1		1	2
<i>Vitis</i>	ブドウ属						1	
Arboreal-Nonarboreal pollen	灌木・草本花粉							
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イクサ科	4	5	1	1		2	4
Rosaceae	バラ科		2		1			
Annanaceae	ウツギ科	1	2					
Scrophulariaceae	ゴマハグサ科						1	
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属						1	
Nonarboreal pollen	草本花粉							
<i>Typha-Spergularia</i>	ガマ属-シリ萬						1	
<i>Alisma</i>	サンオモダカ属			1				
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属		1					
Gramineae	イネ科	299	161	104	36		96	139
<i>Oryza</i> type	イネ属	21	15	2	2		3	10
Cyperaceae	カヤツリグサ科	122	83	3	2	1	35	11
Monochoria	ミニアオイ属		1					
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	1	2					
<i>Rumex</i>	ギンジソウ属						1	
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属		1					
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒニ科	1		1	1			7
Caryophyllaceae	ナデシコ科	5	2	1				
<i>Thlaspiatum</i>	カラツツツツ属						1	
Cruciferae	アブラナ科	96	8	17	2			13
<i>Vigna</i>	ササゲ属						1	
<i>Impatiens</i>	ブフネウ属						2	
<i>Rotala</i>	キクハグサ属	2						
<i>Haloragis-Myrtophyllum</i>	アリハグサ属-フサモ属	17						
Hydrocotylaceae	チドメグサ科	3	1				1	
Apioideae	セリ科		1					
Violaceae	オナエ科	2						
Lactucaeidae	タンポポ科	27		5	2		3	2
Asteroidae	キク虫科		1		10			3
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	41	110	155	25		50	106
Fern spore	シダ植物胞子							
Monolete type spore	単条構造	35	108	42	13	1	71	16
Trilete type spore	三朱懸孢子	5	7	9	2		7	11
Arboreal pollen	樹木花粉	70	248	32	18		76	49
Arboreal-Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	5	9	1	2		2	6
Nonarboreal pollen	草本花粉	576	388	289	80	1	188	297
Total pollen	花粉總數	651	645	322	100	1	266	352
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度	2.5	8.7	4.9	8.4	0.6	2.7	5.1
		×10 ⁶	×10 ⁴	×10 ³	×10 ²	×10	×10 ³	×10 ³
Unknown pollen	未定名花粉	11	6	4	5		3	9
Fern spore	シダ植物胞子	40	115	51	15	1	78	27
Helminth eggs	寄生虫卵							
<i>Ascaris/lumbricoides</i>	蛔虫卵	1						
Total	計	1						
Helminth eggs frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の寄生虫卵密度	0.6						
		×10	×10	×10	×10	×10	×10	×10
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(++)	(++)	(++)	(+)	(++)	(++)

第3表 花粉分析結果

4. 珪藻分析

(1) 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から1cm³を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（5~6回）
- 4) 残渣をマイクロビペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレベラート作製
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物頭微鏡によって600~1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレベラート全面について精査を行った。

(2) 結果

試料から出現した珪藻は、真一中塩性種（海一汽水生種）1分類群、中塩性種（汽水生種）1分類群、中一貧塩性種（汽一淡水生種）1分類群、貧塩性種（淡水生種）89分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端2個につき1個と数えた。表2に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを第27図に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe(1974)の記載により、陸生珪藻は小杉（1986）により、環境指標種群は海水生種から汽水生種は小杉（1988）により、淡水生種は安藤（1990）による。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔中一貧塩性種〕

Rhopalodia gibberula

〔貧塩性種〕

Amphora copulata、Aulacoscira ambigua、Caloneis silicula、Cymbella cuspidata、Cymbella gracilis、Cymbella naviculiformis、Cymbella silesiaca、Diploneis elliptica、Eunotia minor、Fragilaria construens v. venter、Frustulia vulgaris、Gomphonema gracile、Gomphonema parvulum、Gomphonema sphaerophorum、Hantzschia amphioxys、Navicula cuspidata、Navicula elginiensis、Navicula mutica、Neidium ampliatum、Nitzschia nana、Nitzschia palea、Pinnularia acrosphaeria、Pinnularia borealis、Pinnularia gibba、Pinnularia interrupta、Pinnularia microstauron、Pinnularia subca. pitata、Pinnularia viridis、Stauroneis phoenicenteron

1) SD01 沼埋土およびSK35 大型土坑埋土（試料①から試料⑥）

下位より、試料④、試料⑤では珪藻密度が極めて低い。わずかに検出される珪藻はすべて貧塩性種（淡水生種）で占められる。

試料⑥では、好塩性種のRhopalodia gibberula、陸生珪藻のNitzschia amphioxys、沼沢湿地付着生種群のPinnularia viridisの出現率がやや高い。

試料③では、好塩性種のRhopalodia gibberula、陸生珪藻のNitzschia nanaなど、流水不定性種のNitzschia palea、沼沢湿地付着生種群のPinnularia viridis、好流水性種で沼沢湿地付着生種群のNavicula elginiensisの出現率がやや高い。

試料②では、好塩性種のRhopalodia gibberula、流水不定性種のCymbella silesiaca、Amphora copulata、沼沢湿地付着生種群のCymbella naviculiformis、Pinnularia viridis、好流水性種のNavicula elginiensisの出現率がやや高い。

試料①では、好塩性種のRhopalodia gibberulaがやや高率に流水不定性種のCymbella silesiaca、沼沢湿地付着生種群のPinnularia viridis、好流水性種のGomphonema parvulumがやや低率に出現する。

2) SI107 穴立物埋土（試料⑨）

試料⑦では貧塩性種（淡水生種）が検出されるが極めて低密度である。

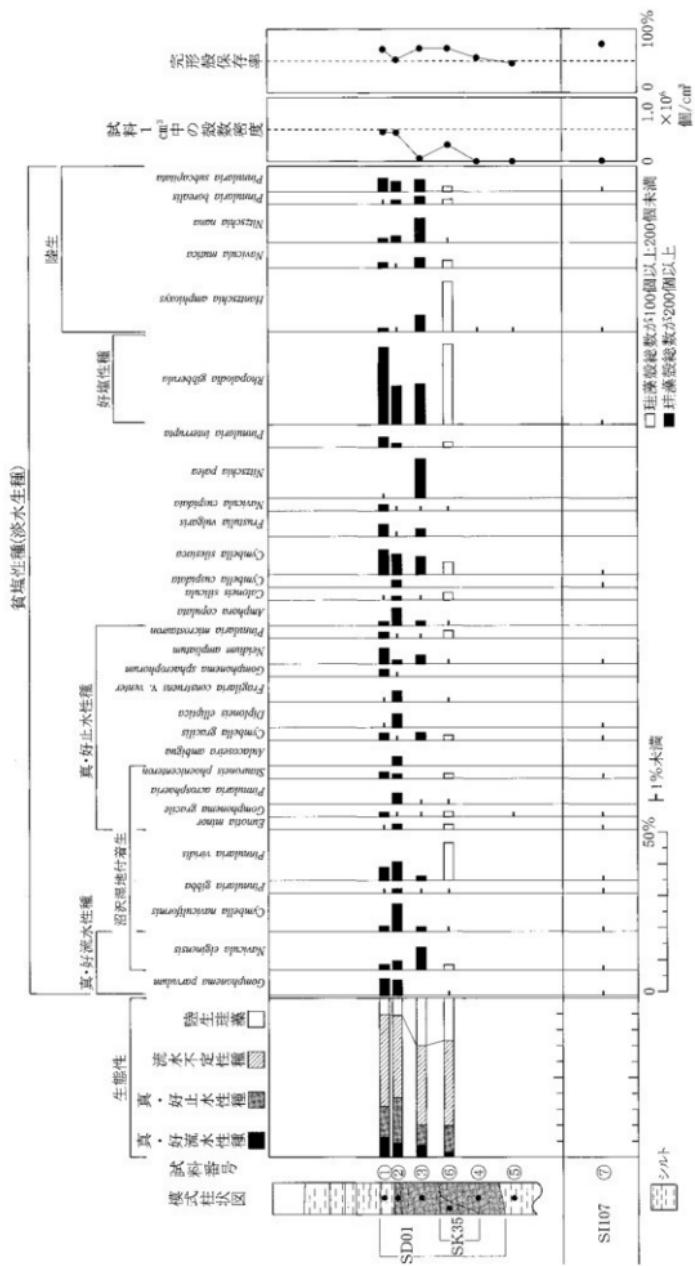
3) 珪藻分析から推定される堆積環境

1) SD01 沼埋土およびSK35 大型土坑埋土（試料①から試料⑥）

下位より、試料④、試料⑤は、堆積速度が速いか珪藻の生育できない乾燥を繰り返す不安定な環境が推定される。試料①から試料⑥のSD01 沼およびSK35 大型土坑の中上部の試料からは、貧塩性種（淡水生種）の水生珪藻が出現し、濁水した状況が示唆される。各層準とも好塩性種または中一貧塩性種（汽～淡水生種）であるRhopalodia gibberulaの出現率がやや高いが、他の中一貧塩性種（汽～淡水生種）が伴って出現しないことから、潮汐の影響は考えられず、また汽水より低い塩分濃度の環境が示唆される。塩分を含む生活排水の流れ込みやよどんだ水域の蒸散によって塩分濃度が低濃度で上昇したと考えられる。試料⑥と試料③は、優占種ではなく珪藻種には差異があるが、陸生珪藻、流水不定性種、真・好流水性種、真・好止水性種が出現し、湿った環境からよどみ流れの不安定な水域が示唆される。試料②と試料①にかけては、陸生珪藻が減少し、流水不定性種、真・好止水性種真・好流水性種がやや増加し、また沼沢湿地付着生種群も多くなることから、付着生珪藻の基質となる水草が生育したよどみながら流れの水域が示唆される。

2) SI107 穴立物埋土（試料⑦）

試料⑦では珪藻密度が極めて低く、珪藻が生育しにくい比較的乾燥した環境や陽当たりの悪い環境が推定される。



第28図 主要珪藻ダイアグラム

分類群	SD01沿岸土					SK35大型 土坑棍土	SI07堅穴 建物理土
	最上層 ①	第2層 ②	第3層 ③	第4層 ④	第5層 ⑤		
質地性種(淡水生種)							
<i>Achnanthus hungaricus</i>			1				
<i>Amphora copulata</i>	4	19	3			1	
<i>Amphora ovalis</i>	1		6			2	
<i>Amphora veneta</i>		2				1	
<i>Aulacoseira ambigua</i>		10					
<i>Aulacoseira canadensis</i>		2					
<i>Caloneis hyalina</i>	1	2	3				
<i>Caloneis silicula</i>		2	4	2			3
<i>Cocconeis placenta</i>	1				1	2	
<i>Cymbella cuspidata</i>			8				2
<i>Cymbella gracilis</i>	8	3	5			2	3
<i>Cymbella lanceolata</i>			1				
<i>Cymbella minuta</i>	5						
<i>Cymbella naviculiformis</i>	6	30	3			1	1
<i>Cymbella silesiaca</i>	27	22	12			5	3
<i>Cymbella subaequalis</i>	2		2			1	1
<i>Cymbella tumida</i>	3	1					2
<i>Cymbella turgidula</i>		1	1				
<i>Cymbella</i> spp.						1	
<i>Diploneis elliptica</i>	1	15					1
<i>Diploneis parma</i>		1				1	
<i>Diploneis yatukacensis</i>				1			
<i>Epithemia adnata</i>				1			
<i>Eunotia bilinearis</i>	2						
<i>Eunotia minor</i>	2		6			2	1
<i>Eunotia patulosa rhomboidea</i>		1					
<i>Eunotia pectinalis</i>	1						1
<i>Eunotia praeputra</i>	1						
<i>Eunotia serena</i>			1				
<i>Fragilaria brevistriata</i>		3					
<i>Fragilaria capucina</i>					1		
<i>Fragilaria construens</i> v. <i>venter</i>	3	12				1	
<i>Fragilaria exigua</i>	1	4					
<i>Frustulia rhomboides</i> v. <i>crassijervia</i>				5			
<i>Frustulia rhomboides</i> v. <i>saxonica</i>	1	1	2				
<i>Frustulia vulgaris</i>	13	1	5				
<i>Gomphonema acuminatum</i>	1	2					
<i>Gomphonema angustum</i>	2						1
<i>Gomphonema agutum</i>		2	1				
<i>Gomphonema gracile</i>	5	3	1		1	2	1
<i>Gomphonema minutum</i>	2	1	2		1		
<i>Gomphonema parvulum</i>	18	17				1	1
<i>Gomphonema sphaerophorum</i>	8	2					
<i>Gomphonema</i> spp.		1			1	1	
<i>Hantzschia amphioxys</i>	4	1	11	4	1	20	4
<i>Meridion circulare</i> v. <i>constrictum</i>						1	
<i>Navicula capitata</i>	7	2					
<i>Navicula cryptcephala</i>			1				
<i>Navicula cuspidata</i>	7	2	1			1	
<i>Navicula elginensis</i>	6	10	15			2	1
<i>Navicula goeppertiae</i>	1		1				
<i>Navicula kotschy</i>	2		1				
<i>Navicula levissima</i>	2	1	1			1	2
<i>Navicula mutica</i>	6	3	7			3	
<i>Navicula placenta</i> v. <i>obtusa</i>		5				3	
<i>Navicula pupula</i>	2	2	2				
<i>Navicula veneta</i>	1		1				
<i>Navicula</i> spp.	3	1	1				
<i>Neidium affine</i>			2				1
<i>Neidium alpinum</i>		1	1	1			
<i>Neidium amplissum</i>		17	4	6		1	2

第4表 珪藻分析結果①

分類群	SD01沼堆土					SK35大型土 机理土	SI107堅穴 建物理土
	最上層 ①	第2層 ②	第3層 ③	第4層 ④	第5層 ⑤		
<i>Nitzschia amphibia</i>		1	1				
<i>Nitzschia nana</i>	5	7	16				1
<i>Nitzschia palea</i>	1		26				
<i>Nitzschia umbonata</i>			2				
<i>Pinnularia acrosphaera</i>		12	1				1
<i>Pinnularia appendiculata</i>			4				
<i>Pinnularia borealis</i>	3	5	5				2
<i>Pinnularia brasili</i>			6				
<i>Pinnularia divergens</i>						1	1
<i>Pinnularia gibba</i>	1	5	2			1	1
<i>Pinnularia hemisphaera</i>		2				2	1
<i>Pinnularia interrupta</i>	11	4				2	
<i>Pinnularia major</i>		5				1	
<i>Pinnularia microstauron</i>	7	3	1			3	
<i>Pinnularia obscura</i>	2	2					
<i>Pinnularia schoenfelderi</i>			1				
<i>Pinnularia schreberi</i>			6			3	
<i>Pinnularia subcapitata</i>	14	11	8			2	
<i>Pinnularia viridis</i>	14	20	3			15	3
<i>Pinnularia</i> spp.			2				
<i>Rhopalodia gibba</i>	2						
<i>Stauroneis ancops</i>	6	1	1				1
<i>Stauroneis phoeniceenteron</i>	7	5				2	1
<i>Stauroneis saithil</i>	1						
<i>Sutirella angusta</i>	3	1					
<i>Sutirella tenera</i>	2						
<i>Synedra ulna</i>		1	1				1
<i>Tabellaria fenestrata-flocculosa</i>		2					
中-貧生性種(汽-淡水生種)							
<i>Rhopalodia gibberula</i>	84	42	27			32	4
中-富生性種(汽水生種)							
<i>Nitzschia levidens</i> v. <i>levidensis</i>		1					
真-中富生性種(海-汽水生種)							
<i>Cocconeis setulatum</i>						1	
合計	163	130	113	0	0	69	15
未同定	8	1	7	0	0	3	1
破片	163	321	93	4	8	56	13
試料1cm ⁻³ 中の殻密度	4.6	4.5	4.5	1.0	1.4	2.6	8.8
$\times 10^{-5}$	$\times 10^{-5}$	$\times 10^{-4}$	$\times 10^{-3}$	$\times 10^{-3}$	$\times 10^{-3}$	$\times 10^{-5}$	$\times 10^{-3}$
完形殻保存率(%)	51.2	29.0	56.3	0.0	0.0	56.3	55.2

第4表 珪藻分析結果②

分類群	部位	SD01 沼 堆土第4層	SI107 堅穴建物理土
学名	和名		
Herb	草本		
<i>Oryza sativa L.</i>	イネ 果実(破片)		3.0
<i>Scirpus</i>	束実 ホタルイ属	3.0	
Total	合計	3.0	3.0

第5表 種実同定結果



写真1 種実

5. 種実同定

(1) 方 法

- 試料（堆積物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行う。
- 1) 試料 500cm³ に水を加え放置し、泥化
 - 2) 搅拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mm の篩で水洗選別
 - 3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数
- 試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。
結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

(2) 結 果

草本2点が同定された。学名、和名および粒数を第5表に示す。以下に形態的特徴を示す。

- 1) イネ *Oryza sativa* L. 炭化果実（破片）イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。全て破片である。

- 2) ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科 長さ × 幅 : 1.72 mm × 1.65 mm, 1.45 mm × 1.42 mm

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に4～8本の針状の付属物を持つ。

(3) 出土種実の傾向と環境

- 1) SD01 沼埋土第3層（第6・9図、試料⑧）

草本種実のホタルイ属果実3点が検出された。ホタルイ属は水田雑草の性格ももつ典型的な水生植物であり、温地から浅い水域に生育する。

- 2) SI107 穴立建物埋土

草本種実のイネ炭化果実（破片）3点が検出された。イネ果実は火を受け炭化しなければ残存せず、火を受けるような利用、あるいは植物体を燃料としたときに穗に残存していたことなどが考えられる。

6. 樹種同定（1）

(1) 方 法

カミソリを用いて試料から新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(2) 結 果

第6表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に解剖学的特徴を記す。

試料	備考	結果(学名/和名)		
①SP53柱(204)		<i>Cryptomeria japonica</i>	D.Don	/ スギ
②SP52柱(203)		<i>Cryptomeria japonica</i>	D.Don	/ スギ
③SD01出土角材(190)	一部分のみ炭化	<i>Cryptomeria japonica</i>	D.Don	/ スギ
④SD01角材(191)		<i>Cryptomeria japonica</i>	D.Don	/ スギ

第6表 樹種同定結果(1)

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 写真4

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晚材への移行はやや急で、晚材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下が多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑

高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強韌で、広く用いられる。

(3) 所 見

柱根2点、角f9r材1点、部材1点は、すべてスギであった。スギは、木理通直で肌目は粗く、加工工

作が容易で、大きな材がとれる良材である。温帯に広く分布し、肥沃で温潤な土壤を好み針葉樹である。

特に積雪地帯や多雨地帯で純林を形成する。当時遺跡周辺が近隣地域に生育しもたらされたと推定される。

7. 樹種同定 (2)

株式会社吉田生物研究所

(1) 試料

試料は柱3点、角材1点、部材2点、板材5点の合計11点である。

(2) 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡Nikon DS-Filで観察して同定した。

(3) 結果

樹種同定結果（針葉樹1種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D.Don)

No.	遺標No.(遺物No.)	品名	樹種	No.	遺標No.(遺物No.)	品名	樹種
1	SP27(202)	柱	スギ科スギ属スギ	7	SD101(197)	板材	スギ科スギ属スギ
2	SD01(193)	脚材	スギ科スギ属スギ	8	SD01(199)	板材	スギ科スギ属スギ
3	SD01(195)	板材	スギ科スギ属スギ	9	SP15(200)	柱	スギ科スギ属スギ
4	SD01(196)	板材	スギ科スギ属スギ	10	SP26(201)	柱	スギ科スギ属スギ
5	SD01(194)	角材	スギ科スギ属スギ	11	SD01(192)	板材	スギ科スギ属スギ
6	SD01(198)	板材	スギ科スギ属スギ				

第7表 樹種同定結果(2)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

8. まとめ

株式会社古環境研究所

下位よりSD01沼の下層の試料⑤の層準は、花粉と珪藻ともに密度が極めて低く、比較的乾燥した環境か堆積速度の速い環境が推定された。SD01沼およびSK35大型土坑では、周囲にイネ科とヨモギ属の草本が分布し比較的乾燥した環境であり、試料①、試料②、試料③からはアブラナ科などの畑の分布が推定され、試料④の層準ではソバ属が加わる。周囲に水田の分布も示唆されるが、特に試料③の時期はヨモギ属が多く周囲は乾燥した環境で水田は衰退した時期であったと推定される。SI107堅穴建物埋立から示唆される植生もイネ科とヨモギ属の草本が多く、類似した比較的乾燥した環境が示唆され、試料①の層準と類似する。また好塩性種の珪藻が比較的多く低い塩分濃度が示唆され、生活排水の流れ込みやよどんだ水域での蒸散などが考えられた。周辺地域にはスギ林を主にコナラ属コナラ亜属の森林が分布するが、試料③や試料①の時期は衰退する。栽培植物としては、SI107堅穴建物からイネ（炭化米片）、ササゲ属（花粉）が検出され、各層準からイネ属型（花粉）、SD01沼上層からアブラナ科（花粉）、試料①からソバ属が検出された。木材は柱根、棒材、部材のいずれもスギであり、スギの利用が多い。

参考文献 (株式会社古環境研究所)

- 全原正夫 (1993) 花粉分析による古環境復原、創成古代の日本第16考古資料研究の方法、角川書店、p.248-262。
- 島倉巳一郎 (1973) 小木被物の柱根、大阪市立自然科学博物館収蔵品目録5集、60p。
- 小村利一 (1987) 花粉分析、古今調査、p.102。
- 小村利一 (1998) イネの花粉について、ドニイネ (*Oryza sativa*)を中心として、第四紀研究、13, p.187-193。
- 小村利一 (1997) 稲作とイネ科、考古と自然科学、第10号、p.21-39。
- 小村利一 (1986) 日本深海花粉の構造、大阪自然史博物館収蔵品目録第13集、91p。
- Hastorf, P. (1977-1988) Systematische und obiotische Untersuchungen über die Diatomenspezies von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Leidnungsgelehrten Sonder-Edition. Arch. Hydrobiol., Suppl. 15, p.131-500.
- Lowe, R.L. (1997) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms, 333p., National Environmental Research Center.
- K. Kramer + H. Lange-Bertalot (1986-1991) Bacillariophytes, 1-4.
- Arai, K. & Watanabe, T. (1996) Strictis Classification of Epithelial Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Sapro-philous and sapro-tolerant taxa. Diatom, 10, p.35-47.
- 小村利一 (1996) 深海花粉による古環境復元技術の意義—わが國への導入とその展望—、遺生史研究、第1号、遺生史研究会、p.29-44。
- 小村利一 (1988) 遺生の環境指標群の記述と古環境復元への応用、第四紀研究、27, p.1-20。
- 佐伯泰、原田義人 (1985) 針葉樹の種子、木材の構造、文永堂出版、p.20-48。
- 岸野安夫 (1985) 日本木被図説、葉賀堂、40p。
- 岸野安夫 (1986) 作物および古跡植物学、農生文化の研究第2巻生業、雄山閣出版、p.131-139。

参考文献 (株式会社古生田生物研究所)

- 林耕三「木被物遺物研究」、京都大学木被物保存研究会 (1991)
- 島地謙「伊東美久「木被物遺物出土木被物品鑑定」雄山閣出版 (1988)
- 北村透記「村田謙「色々な木被物図鑑」木被物1・II」保育社 (1979)
- 奈良県立文化財研究所「奈良県立文化財研究所 史料第27号 木被物集成図鑑 近畿古代篇」(1985)
- 奈良県立文化財研究所「奈良県立文化財研究所 史料第36号 木被物集成図鑑 近畿原生篇」(1993)

第2節 放射性炭素年代測定

株式会社古環境研究所

1. 試料と方法

測定試料は、木製造物5点、炭化材1点、土器付着炭化物2点の計8点である。試料は超音波洗浄、酸-アルカリ-酸洗浄（AAA処理）で調製後、加速器質量分析計を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。試料の詳細、調製データを第9表に示す。

2. 結果

年代測定結果を第10表に示す。

(1) 未補正¹⁴C年代値

試料の¹⁴C/¹²C比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は国際的慣例によりLibbyの5568年を使用した（実際の半減期は5730年）。

(2) δ¹³C測定値

試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比（¹³C/¹²C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

$$\delta \text{ } ^{13}\text{C} (\text{‰}) = \frac{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C}) [\text{試料}] - (^{13}\text{C}/^{12}\text{C}) [\text{標準}]}{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C}) [\text{標準}]} \times 1000$$

(3) 補正¹⁴C年代値

試料の炭素安定同位体比（¹³C/¹²C）を測定して試料の炭素の同位体分別を知り、¹⁴C/¹²Cの測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料のδ¹³C値を-25（‰）に標準化することによって得られる年代である。

なお、δ¹³C値は加速器質量分析計システムによって自動的に測定され、それにともない補正¹⁴C年代値も自動計算される。

(4) 暦年代 Calendar Age

¹⁴C年代値を実際の年代値（暦年代）に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中¹⁴C濃度の変動および¹⁴Cの半減期の違いを較正する必要がある。具体的には、年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値、サンゴのU/Th（ウラン／トリウム）年代と¹⁴C年代の比較、湖の縞状堆積物の年代測定により補正曲線を作成し、暦年代を算出する。¹⁴C年代の暦年較正には、Beta Analytic社オリジナルプログラムであるBETACAL09（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。暦年代の交点とは、補正¹⁴C年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ （68%確率）と 2σ （95%確率）は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

3. 所見

出土した試料について、加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定を行った。その結果、SP27出土柱（202）は、 2030 ± 30 年BP（ 2σ の暦年代でBC 110～AD30年、AD 40～50年）、SP52出土柱（203）は、 1830 ± 30 年BP（同AD 90～100年、AD 120～250年）、SP15出土柱（200）は、 1700 ± 30 年BP（同AD 250～410年）、SD01下層出土部材（193）は、 1960 ± 30 年BP（同BC 40～10年、BC 0～AD 80年）、SD01出土角材（190）は、 1890 ± 30 年BP（同AD 60～180年、AD 190～210年）、SD01上層出土板材（199）は、 980 ± 30 年BP（同AD 1020～1050年、AD 1080～1130年、AD 1130～1150年）、SD01下層出土土器付着炭化物（第6図試料№7）は、 2380 ± 30 年BP（同BC 520～390年）、SI107堅穴建物出土土器付着炭化物（№28）は、 1760 ± 30 年BP（同AD 220～350年、AD 370～380年）の年代値が得られた。

参考文献

- Brennan Ramsey C. (1993) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), 425–430.
Brennan Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355–352.
House TJ, Blackwell PG, Beck CE (2009) A Bayesian approach to the estimation of radiocarbon calibration curves: the IntCal09 methodology, Radiocarbon, 51(4), 1151–1162.
Houck T, Beck CE (2000) 放射性炭素年代測定法の概要, 日本古史研究の¹⁴C年代, 1, 20.
Keller RF, Isabelle MGL, Jard L, Bayliss A, Beck JW, Blackwell PG, Brook Ramsey C, Beck CJL, Burr GS, Edwards RL, Friedrich M, Grootes PM, Gulliksen TT, Hajdas I, Hoeran TJ, Hogg AG, Hughes KA, Kromer RF, Kroonen B, McCormac FG, Manning SW, Reimer RW, Richards DA, Rothstein JR, Talamo S, Turney CSM, van der Plicht J, Weyhenmyer CE. (2009) IntCal09 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years cal BP, Radiocarbon, 51(4), 1111–1160.
Stuiver M, Braziunas TF. (1993) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26–0 ka BP, Radiocarbon, 35(1), 137–189.

試料名	出土地点・層位	種類	前処理・調整	測定法
No.1	SP27出土柱(202)	木材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.2	SP52出土柱(203)	木材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.3	SP15出土柱(200)	木材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.4	SD01下層出土部材(193)	木材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.5	SD01出土角材(190)	炭化物	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.6	SD01上層出土板材(199)	木材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.7	SD01下層出土繩文土器付着炭化物	炭化物	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.8	SI107堅穴建物出土古墳土器付着炭化物	炭化物	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS

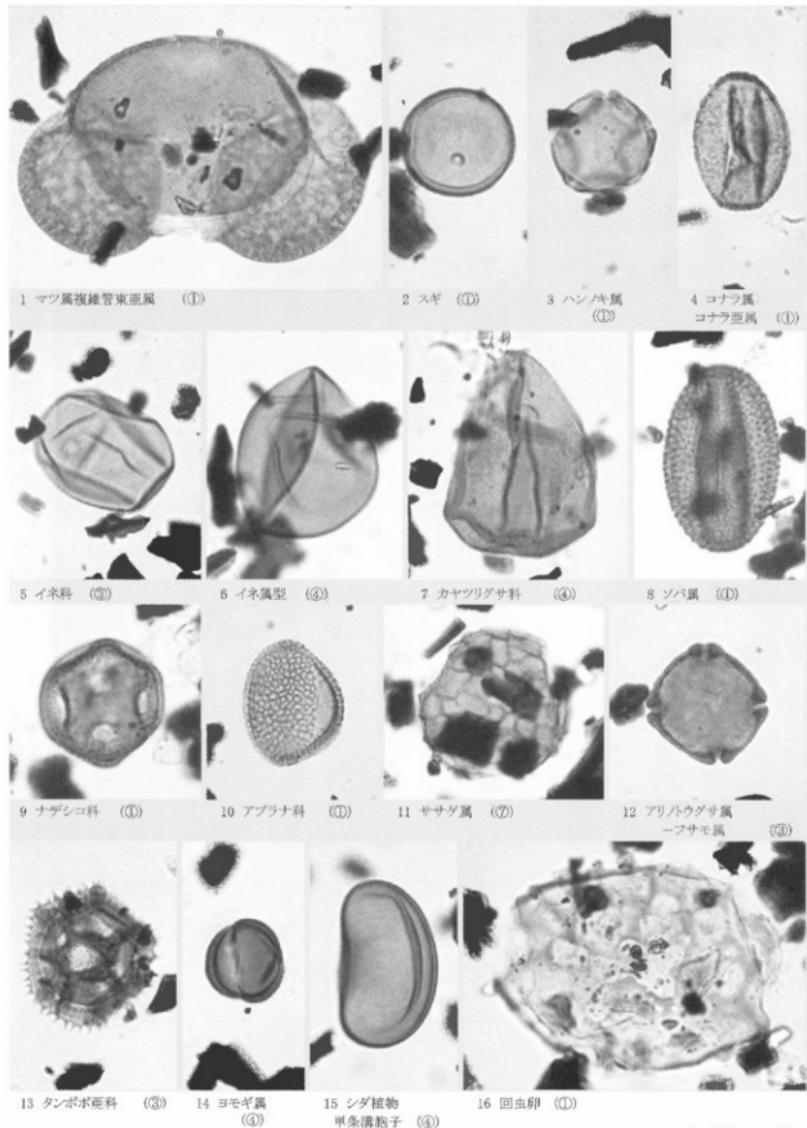
第9表 放射性炭素年代測定試料及び処理

※AMS(Accelerator Mass Spectrometry)は加速器質量分析法

試料名	測定No. (Beta-)	未補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	曆年代(西暦)	
					交点:cal	BC 40
No.1	342307	2000±30	-23.3	2030±30	1σ:cal	BC 50~AD 0
					2σ:cal	BC 110~AD 30,
					:cal	AD 40~50
					交点:cal	AD 180, AD 190, AD 210
No.2	342308	1800±30	-23.2	1830±30	1σ:cal	AD 130~240
					2σ:cal	AD 90~100,
					:cal	AD 120~250
					交点:cal	AD 350, AD 370, AD 380
No.3	342309	1710±30	-25.7	1700±30	1σ:cal	AD 260~280,
					:cal	AD 330~390
					2σ:cal	AD 250~410
					交点:cal	AD 30, AD 40, AD 50
No.4	342310	1940±30	-23.7	1960±30	1σ:cal	AD 10~10,
					:cal	AD 20~70
					2σ:cal	BC 40~10,
					:cal	BC 0~AD 80
No.5	342311	1860±30	-23.2	1890±30	交点:cal	AD 90, AD 100, AD 120
					1σ:cal	AD 80~130
					2σ:cal	AD 60~180,
					:cal	AD 190~210
No.6	342312	960±30	-23.9	980±30	交点:cal	AD 1030
					1σ:cal	AD 1020~1040,
					:cal	AD 1110~1120
					2σ:cal	AD 1020~1050,
					:cal	AD 1080~1130,
No.7	342313	2380±30	-24.7	2380±30	交点:cal	AD 1130~1150
					1σ:cal	BC 400
					2σ:cal	BC 410~400
					:cal	BC 520~390
No.8	343770	1760±30	-24.7	1760±30	交点:cal	AD 250
					1σ:cal	AD 240~260,
					:cal	AD 280~330
					2σ:cal	AD 220~350,
					:cal	AD 370~380

第10表 放射性炭素年代測定結果

BP:Before Physics(Present), AD:紀元, BC:紀元前



1-16 — 10 μm

写真2 花粉・胞子・寄生虫卵

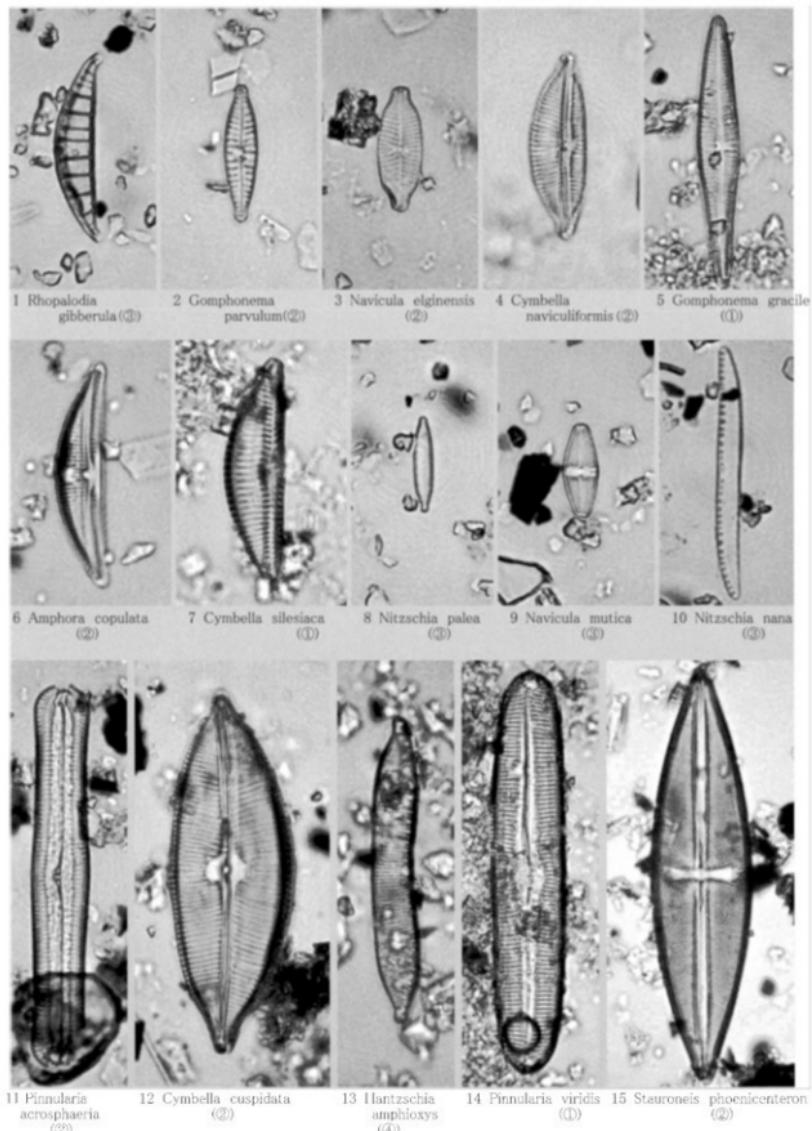


写真3 珪藻

1-13 —— 10 μm 14, 15 —— 10 μm

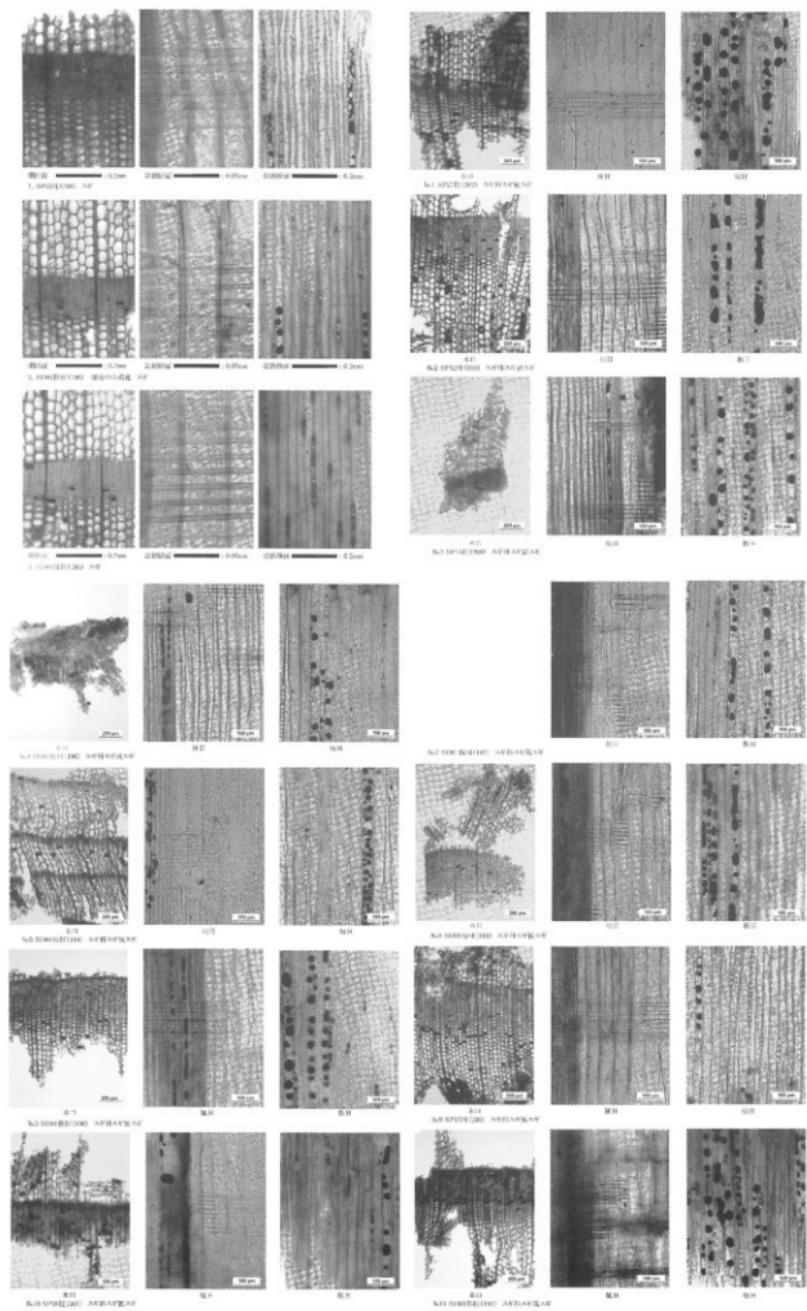


写真4 木材

第V章 総括

豊田大塚・中吉原遺跡では、堅穴建物や掘立柱建物等がある古墳時代前期の集落、その集落形成の主要な要素であると同時に生活の基盤であったと考えられる沼、古代道路の側溝である可能性が高い道路状遺構、中世の掘立柱建物・貯水池状遺構及びそれと連結し用水的な機能を持つ溝、鋪瀬群（畠）や区画溝などを検出した。遺物は古墳時代初頭～前期前半の土師器が大半を占め、次いで縄文時代晚期の上器が多い。沼からは古墳時代前期・古代後半の年代測定結果を示す部材加工木なども出土したが、今回の調査では前回調査区と異なり、さらし場や木道など具体的な構築物の存在を示唆するものは検出しなかった。古代以降の遺物はきわめて少なく、時期の詳細を特定しうるものはほとんどない。以下、“第1節 豊田大塚・中吉原遺跡と周辺の様相”で、各時代における遺構・遺物の変遷と周辺地域との関係を考察する。“第2節 古墳時代前期土師器の組成及び編年的位置付け”では、主要遺構からまとめて出土した古墳時代前期の土師器の組成・出土比率とその特徴について考察する。また“第3節 折衷土器について”では、特殊な古墳時代前期の折衷型土器を紹介する。

第1節 豊田大塚・中吉原遺跡と周辺遺跡の様相

1. 縄文時代晚期

縄文時代晚期の土器の大半は沼から出土しており、当該期の遺物を伴う明確な遺構が存在しないため、その具体的な活動は明らかではない。當時蛇行して流れていた神通川・常願寺川の氾濫原であった下流域に縄文晚期以降に人々の活動が及んだ際に、周辺に比べ相対的に標高が高い当地域は比較的の利用が容易であったと考えられ、土地利用が活発に行われてきたと推察できる。当該期の遺跡として、周辺に約 400m 南西に豊田遺跡、約 400m 西に農丘町遺跡などがあり、これらの遺跡群と関連して活動が及んだ可能性が高い。また 1995 年度調査区の旧沼地からは、意図的に破壊された御物石器などが出土しており、祭祀場の可能性を指摘している（堀沢 1998）。

2. 弥生時代中期～古墳時代前期前半

今年度調査区では、弥生時代を通じて活動を証する遺構・遺物はほとんど確認できず、遺構・遺物の時期は古墳時代初頭から前期前半にかけてである。SP27 出上の柱の放射性炭素年代測定結果で弥生時代中期の年代が出ており、調査区域外に隣接して当該期の遺構が展開している可能性はあるが、ここではむしろ古木効果や材の転用などによって生じる遺構の時期の誤差であると考える。材の転用が行われた場合、その供給元としては、約 150m 南西に位置する弥生中期の遺跡である豊田遺跡の可能性が高い。

古墳時代初頭（白江式期）～前期前半（古府クルビ式期）の時期の遺構・遺物は他の時代に比して特に充実しており、当遺跡で最も活発な活動が行われた時期である。沼および柱穴から出土した部材加工木の放射性炭素年代測定の結果は、年代幅が前後するものの古墳時代初頭を中心とする年代が出ており、出土遺物と放射性炭素年代測定の整合性が高い白江式期～古府クルビ式期を中心に遺構が展開していたと考えられる。当遺跡から約 220m 西には古墳時代前期の方墳「ちょうちょう塚」があり、当遺跡はそれを中心とする地域の拠点的集落であると推定される。1995 年度の調査では集落の存在は確認できなかったが、今回の調査により同時期の集落が検出され、その蓋然性が高くなった。

以下では、周辺地域との関係を地理的条件を中心みてみる。当遺跡は、現在の神通川・常願寺川の間に立地する。河道が時代により大きく移動するという課題はあるものの、丘陵や河川等の地理的要因は、生産活動のみならず交通路や地域圏の境界としても重要な位置を占めていたと考えられる。このことから、推定される旧河道を含めた上で、現在の河道をひとつの境界として考察する。

まず近隣の平野部に展開する同時期の集落を大きく呉羽山丘陵の以西・以東で分け、呉羽山

丘陵以東を現在の①神通川左岸、②神通川以東～常願寺川以西、③常願寺川右岸白岩川流域という範囲で集落の時代と構造をみてみる（第29図）。①には、打出遺跡（法仏式期～高畠式期）、江代割遺跡（古府クルビ式期）、八町II遺跡（高畠式期）があり、掘立柱建物や竪穴建物などが確認されたほか、布留系壺が出土している。また墓地として「百塚古墳群」（月影式期～古府クルビ式期）がある。②には当遺跡のほか飯野新屋遺跡（月影式期・古府クルビ式期）があり、この地域は「ちょうちよう塚」を中心とする半径2kmの同心円内におさまる。布留傾向・布留系壺は出土していない。③には古墳時代前期の前方後方墳「竹内天神堂古墳」があり、それを中心とした半径2kmの同心円内に、新堀西遺跡（月影式期～古府クルビ式期）、仏生寺跡（白江式期）、竹内東芦原遺跡（月影式期～白江式期）、浦田遺跡（古府クルビ式期）などがあり、竪穴建物や平地式建物などが確認されたほか、布留系壺が出土した遺跡も含まれる。また、やや半径2kmの圏外となるが、焼失住居を含む竪穴住居群が検出された利田横枕遺跡（古府クルビ～高畠式期）もある。

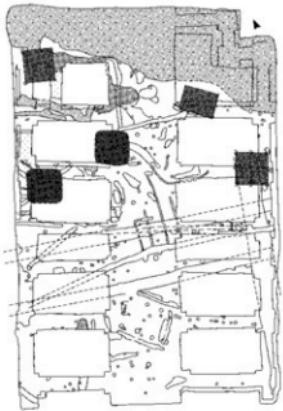
弥生時代終末期から古墳時代前期の富山東部の集落は、月影I式期から月影II式期と、白江式期から古府クルビ式期の2つの段階に断絶する集落が多いとされる。月影式期の集落の断絶は、江上八遺跡のような防禦的集落を中心とする各地域の集落群が解体・消滅し、より広域で階層化された集落として造営・再編された結果と考えられている。一方、白江式期・古府クルビ式期の集落の断絶は、前方後円墳や布留系統壺の波及にみられる畿内の強い影響の下で生じた全国的な規模での地域主権の格付けに伴う地域内における階層化の整備とその完成の結果と考えられている（高橋1995）。このふたつの時期で断絶せず長期間存続する集落は、その後の調査により増加し、これらの集落は地域的な拠点的集落である可能性が高い。①では、神通川河口付近に位置する地理的重要性や鉄器の保有状況から打出遺跡が拠点的集落と位置付けられ（小黒2006）、③では布留建物の存在や装飾器台・布留系壺の出土という非在地的な要素がみられることから、対外的な交流が活発に行われたとして、新堀西遺跡が拠点的集落であると位置づけられている（青山2013）。

本年度調査区単独でみてみると、白江式期新相を中心とした白江式古相から古府クルビ式期にかけてのほぼ單一期の集落と考える。一方、1995年度調査区では月影式～白江式期の遺物が多量に出土しており、当調査区が集落内における中心の移動または集落の拡大の結果であると捉えられ、豊田大塚・中吉原遺跡が月影式期から古府クルビ式期まで継続して存続した集落であると考えられる。このことから、当遺跡が②の地域における拠点的集落であり、当集落を中心とする集団の首長の墓として古墳時代前期の方墳「ちょうちよう塚」を築造した可能性が高い。

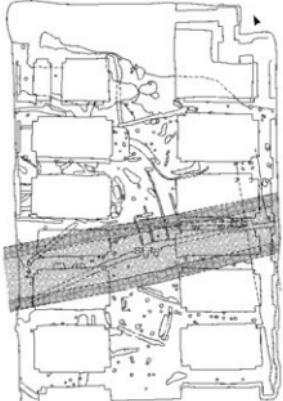
3. 古代（第30・31図）

古代の遺構で特筆すべきは、調査区中央を東西方向に横断する2本の溝SD94 およびSD169である。SD94 を北側側溝、SD169 を南側の側溝とする。調査では、礫敷や路面の整地、硬化面、波板状の痕跡などは認められなかったが、道路状遺構（SF1）とした。いずれも溝の幅は約 1.7m であり、側溝中心間の幅は 7.2m（以下、幅と表記）、遺構検出面での路面は幅約 5.5m を測る。幅方向は N-77° -E である。当該期の主要な古代の遺構は道路状遺構が存在するのみであり、遺構出土遺物がほとんどないことから、包含層出土遺物を含めて遺構の時期を考察すると9世紀となる。1995年度調査区の遺物は概ね9世紀後半したことから、古代律令祭祀具が出土した1995年度調査区の溝とほぼ同じ時期に機能していた道路状遺構と推定できる。

以下、当遺跡周辺地域の古代道路に関する考察と、近年の発掘調査における古代北陸道に関する成果を確認し、当遺跡で確認した道路状遺構を位置づける。

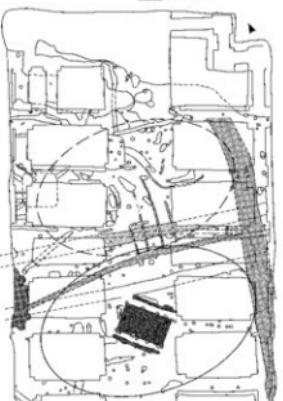


古墳時代初頭～前葉前半



古代(9世紀)

推定道路網
式面部分



中世(14～15世紀) ○ 生産域 ○ 住居域
第28図 主要遺構の変遷と周辺の遺跡



第29図 古墳時代の周辺遺跡の様相



第30図 古代の推定道路と集落遺跡・莊園比(擬)定地

(藤田2004、齊山2013を参考に作成)

- | | | | |
|-----------------------|-------------------|----------------|-----------|
| 1.豊田大塚・古墳遺跡 | 2.米川大塚遺跡〔豊川郡西比定地〕 | 3.瀬戸遺跡〔香駄駅〕比定地 | 4.丁賀遺跡 |
| 5.飯野遺跡遺跡 | 6.宮内遺跡 | 7.三河中町日置遺跡 | 9.宮角南遺跡 |
| 10.糸島河原遺跡 | 11.野中新長根遺跡 | 12.糸島芝地遺跡 | 14.横須遺跡 |
| 15.水橋馬町・上ヶ瀬遺跡〔木幡町〕比定地 | 16.大村遺跡 | 13.出船野山・下坂遺跡 | 17.沼垂人神遺跡 |

瀬(古代兼合祭祀具出土)



第31図 古代推定道路図

当遺跡周辺地域の古代道路に関する考察には、古くは久々忠義氏、藤田富士夫氏によるものがあり、近年では両者の成果をもとにした水橋金広・中馬場遺跡（「丈部莊／郷」比定地）における青山晃氏のものがある（第30図）。当遺跡が関連する考察をみてみると、当地は古代における交通の要衝であり、北は米田大覚遺跡（「磐瀬駅」比定地／久々 2004・新川郡衙比定地）や蓮町遺跡周辺（「磐瀬駅」比定地）と結ばれる南北ルートの中繼点であるとともに、東は水橋金広・中馬場遺跡を結ぶ東西ルートの西端に位置付けられる。また同時に当遺跡は新川郡の西端に位置し、「志麻郷」の比定地であるとともに、縄文時代から断続的に続く「伝統的祭祀場」とも考えられている（藤田 2004）。

富山県内における近年の古代道路に関する発掘調査の成果としては、水橋金広・中馬場遺跡（富山市）、赤井南遺跡（射水市）などがある。

水橋金広・中馬場遺跡は、当遺跡から真東から約7° 南へ振れた東東南約7kmに位置する遺跡で、幅 8.2 ~ 9.0m と幅 5.2 ~ 6.2m を測る古代の新旧道路が検出されており、その軸方向は N-50° -W である。当調査区で検出したSF1は「丈部郷」比定地に向いて伸びていることから、水橋金広・中馬場遺跡で検出された古代道路と連結し、藤田・青山両氏が指摘する「志麻郷」と「丈部郷」を結ぶ東西ルートの可能性がある。

赤井南遺跡では、東西方向（路面幅約 7 ~ 8m、幅約 11m）と、それに直交する形で南北方向に延びる古代道路（路面幅約 3.5m、幅約 4.5m）が検出された。両者の交差点の北西から人面墨書き土器等の古代律令祭祀具が出土しており、『延喜式』にみられる「道饗祭」のような祭祀が行われる場があつた可能性が越前慎子氏により指摘されている（越前 2012）。当遺跡でも同様に、今回の調査区から北西へ 150m 離れた 1995 年度調査区において、新川郡衙に比定される米田大覚遺跡への南北道と、「志麻郷」・「丈部郷」等を結ぶ東西道の推定道路交差点の北西に位置する溝から、人面墨書き土器や斎串など律令祭祀具が出土している（第 31 図）。このことは赤井南遺跡と同様に、交差点付近で祭祀を行っていた可能性を示唆している。

4. 中世

中世の遺構には掘立柱建物SB4、調査区東端を南北方向に縱断する区画溝SD14、貯水池状遺構SX201 及びそれと連結する灌漑用水路SD170 等がある。調査区中央には、SD170 とほぼ直交し北側に延びる鈎溝群（SN1）があることから、SD170 北側に中世の生産域が、SB4を検出した南側に居住域が展開していたと考えられる。また古代道路状遺構の北側側溝であるSD94 からは中世の遺物が出土しているが、生産域となった時期の混入と考えられる。

中世の遺構出土遺物也非常に少なく、遺物包含層を含めた全ての出土遺物の様相から時期を判断した。出土した中世の遺物の年代は、ほとんどの中世土師器の皿が越前編年ND II 類で 13 ~ 14 世紀、株洲は吉岡編年 II ~ III 期のものが中心で 13 世紀後半、中国製青磁が 13 世紀初頭から前半までの標識土器であることから、13 世紀後半を中心と存続した集落であると推察できる。ただ、SD170 からは 15 世紀の瀬戸陶が出土しており、灌漑用水路はその頃まで利用された可能性がある。一方、近世以降については、遺構及び遺構の時期を判断できる遺物が出土しておらず、近代に至るまで土地利用は低調であった可能性が高い。

第2節 古墳時代初頭～前期土師器の組成及び編年的位置付け

今回の調査において、当該期の堅穴建物SI107 や大型土坑SK35、沼SD01 等からまとまった量の古墳時代初頭～前期の土師器が出土した。ここでは上記の遺構から出土した残存率の高い遺物の組成及び編年的位置づけを中心にみていくことで、それぞれの遺構及び遺跡全体の位置付けを確認する。なお土器組成については、図化していない残存率の高い破片資料も含めて検討する。

北陸では弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて、多くの旧集落の断絶と新集落の誕生が進んだとされる。月影式期（ほぼ在地系の土器一色）から、白江式期（「近江・東海系」を中心とする外来系の波及による土器様式の大きな変化）を経て古府クルビ式期（布留系など「畿内系」の波及と月影式の消滅）、高畠式期（「畿内系」への集約）に下るにつれ、在地系から外来系土器へ、外来系のなかでも組成が大きく転換していくとされる。その過程で地域・集落により一定の選択性が働き、受容の差として現れたことが分かっている。たとえば、県内の器種別の組成は、月影式期から白江式期、古府クルビ式期と時期が下るに従い壺の比率が増加し、壺が減少する傾向があり、壺の口縁形態を見てみると、県中央部では白江式期においても擬回線・有段壺が主体である一方、県東部では「く」の字口縁に転換する傾向があるとされる（河合 1997）。

以下では、遺構毎に土師器の出土状況と器種種別の傾向をもとに検討を行う（第10・11表）。土器組成については本文中で使用した古墳時代土師器の器種分類（第5図）をそのまま使用した。

1. SD01

SD01は調査区北端、調査対象全面積の1/5以上を占める沼であり、まとまった量の土器廃棄や水辺での祭祀と考えられる痕跡が確認された。残存率の高い土器は、南側肩部分中央の4カ所（第4図①～④）及び調査区北東（第4図⑤⑥）から集中して出土した。これを出土地点と埋土の層位等の共通項でグループ分けすると、以下のようになる。

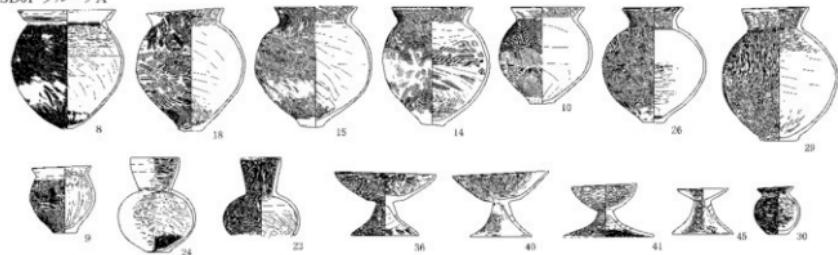
グループA（第7図①～③）：出土地点が海拔約7.0mで埋土第2層最下部で第3層または地山の直上、直径3mの円内の狭い範囲に集中している点、遺物種類が土器のみで構成され木製品が混在しない点、据え置かれたような状態で遺物が出土した点が一致する。出土遺物の比率は、壺・壺・高杯がほぼ同数で96%を占める。①については中央に石を配置し、その周りに壺が意識的に破碎した様相を呈して出土しており、水辺で行われる祭祀を行った可能性が高い。帰属時期は、月影式期に盛行する装飾器台や台付装飾細頸壺など「最も格式の高い」祭式土器は伴わない点、畿内系の高杯（41）や小型器台（45）とともに布留式壺の技法を受容した折衷型壺（29）などが出土した点などから、白江式期の新相と考えられる。

グループB（第7図④～⑥）：出土地点が海拔約6.5mで埋土第3層中ほどであること、直径で5m以上離れた広範囲に分散している点、遺物種類が土器と部材加工木・自然木が混在して出土した点が共通する。出土上器の比率は、壺・壺・高杯の他、鉢や器台、ミニチュア・小型土器など多様な器種が一定量出土しており、偏りがないことが特色である。その一方、畿内系の土器は含まない。このうち⑤付近では調査区外東側を中心とした広範囲に土器が広がることが確認した。④から出土した部材加工木や自然木に関しては、水辺に何らかの施設を構築した痕跡はみられず、南側の岸辺から土器と共に廃棄した可能性が高い。帰属時期は、弥生土器の系譜を持つ底部穿孔鉢（32）や拡張口縁高杯（35）、退化形態の有段口縁壺（22）や器台（48）が伴うこと等からグループAよりやや古く、白江式新相の古い時期と考える。

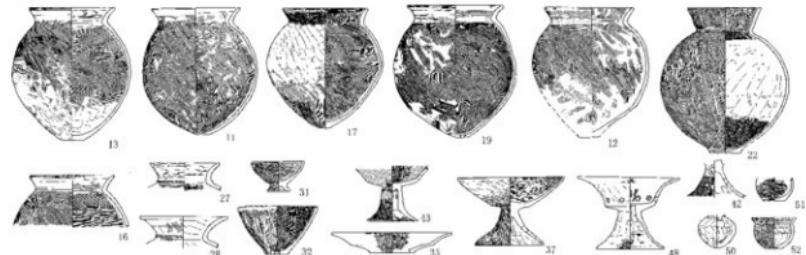
2. SI107

調査区北西に位置する堅穴建物である。調査対象外区域に拡がるため、実際に調査した範囲は遺構全体の一部である。遺物は遺構全面から出土し、調査対象外区域にも拡がると推察できる。残存率の高い土器の比率は、壺・壺・器台で90%以上を占める。出土遺物をみてみると、在地系の壺A、畿内系の土器が含まれない。SD01 グループBとほぼ同時期、白江式期の新相のやや古い時期と考える。出土した遺物の中で、大型壺Eは、赤彩や棒状浮文を施した口縁部のほかにも、体部が2個体分、まとめて廃棄されたと考えられる状態で出土した。また、赤彩を施し受部に円孔を穿つ退化形態の装飾器台（89）も出土したことから、能登および能登を通じた近江・東海の影響がうかがえる。

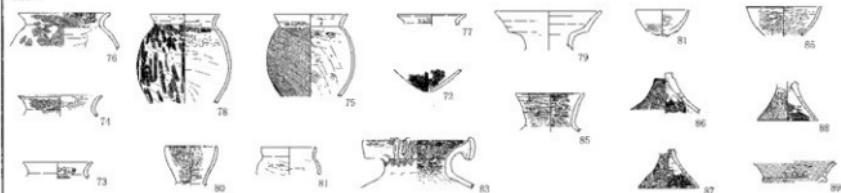
SD01 グループA



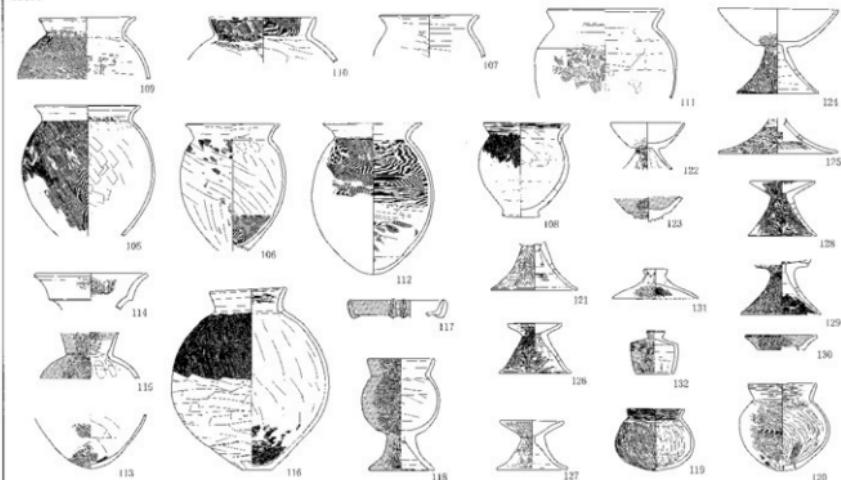
SD01 グループB



SI107



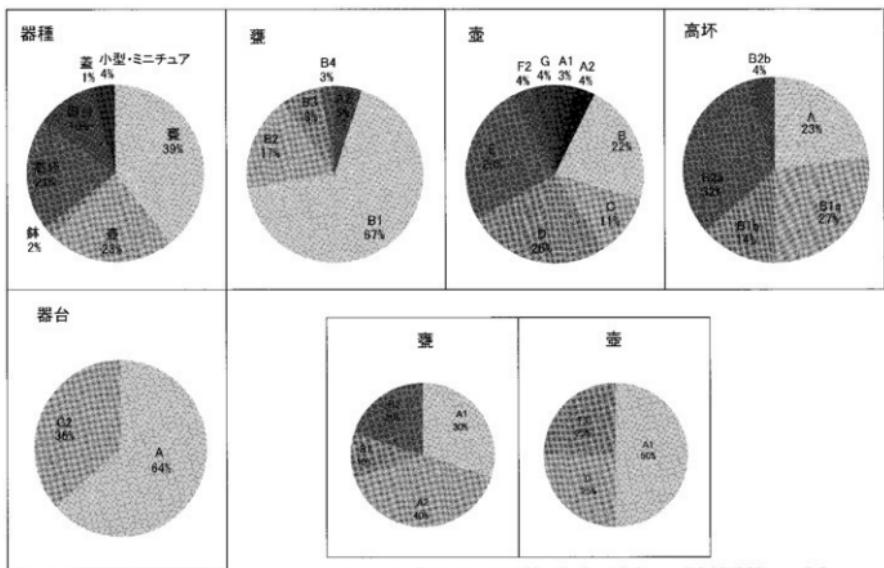
SK35



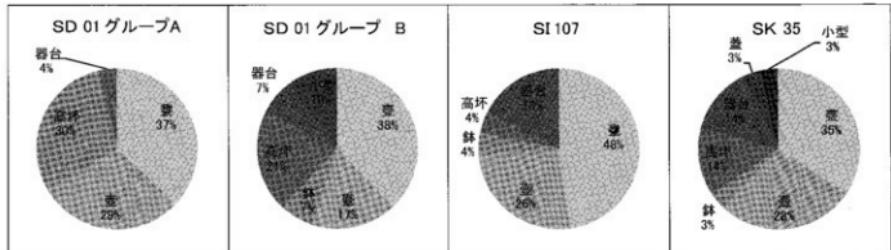
第32図 古墳時代主要遺構出土遺物

		器										蓋		高杯		器台		蓋		小型		計											
		A1	A2	B1	B2	B3	B4	C	D	A1	A2	B	C	D	E	F1	F2	G	A	B	A	B1a	B1b	B2a	B2b	A	B	C2	A	B	A	B	
SD01	①	1										1						!								1					4		
	②	1	4	1								1	1	1						1	1	1	1								13		
	③	1	1	1								1	1	1						1	1	1	1								10		
	④																														8		
	グループB	⑤	9	2								1								1	1	1	1								16		
SK35			7	2	1							1	1	2	1	2	1			2	1	1	1	2	2		1	1			5		
			2	5	1	2	1				1	1	1	3						1	3	3	3	1						29			
分類別 小計		4	27	7	3	1					1	1	6	3	7	7			1	1	1	1	5	6	3	7	1	7	4	1	1	3	109
器種別 合計																		25					32			11		1	4			109	

第10表 主要遺構古墳時代土器出土点数



参考：1995年度調査区出土 当該斯遺物（壺・壺）組成グラフ (*報告書掲載遺物のみで作成)



第11表 主要遺構出土古墳時代土師器 器種・組成グラフ

3. SK35

調査区北側、沼SD01 湖畔的立地に位置し、祭祀場または作業場のち土器廃棄場として転用された可能性のある大型土坑である。残存率の高い土器は南側を中心に出土しており、壺が 35%、壺が 28%、高杯・器台がそれぞれ 14% が出土したほか、ほぼ完形の蓋・小型精製土器も一定量数出土した。遺物の帰属時期は主に白江式期新相の様相を呈し、SD01 グループ A とほぼ同時期の遺構であると考える。そのなかでやや古い時期のものと考える赤彩を施した壺（115）や台付壺（118）等は、二次被燃した痕跡が残ることから、祭祀に使用した可能性がある。また、これら祭祀で使用された土器が、SD01 グループ B にみられるように、最終的に沼SD01 に廃棄したと推察する。台付壺（甕）は江上 A 遺跡（上市町）、二口油免遺跡・HS-04 遺跡（射水市）、蔵野町東遺跡（高岡市）等で有段口縁を持つものが出土しており、その形状は弥生台付甕の系譜のものである。このほか細頸壺とセット関係にあると推察される有鉢筒状蓋（132）が出土した。これは県内での出土事例が少なく、蔵野町東遺跡の自然流路における祭祀場、利田横枕遺跡の焼失住居（旧立山町）のみで出土事例が確認できた。

以上、当調査区の主要遺構で出土した遺物を概観した。次に主要な土師器の種別・器形毎にみられる特徴から、当調査区の傾向を述べる。

甕：口縁端部に面を取る「能登形」甕を含めた「く」の字口縁を持つ甕 B が全体の 95% 以上を占める。出土比率は、B1 が約 45%、B2 が約 30% を占めるほか、口縁端部の仕上げを省略するものも約 15% 確認できる。口縁端部外面にキザミを施すものや指頭圧痕を巡らすもの、口縁部外面のヨコナデを省略するもの、体部外面上半にタタキ痕を残すなど、様々な調整方法がみられる。在地系の有段口縁甕 A はほとんど出土しておらず、大部分が淘汰・消滅している。残存するものは退化形態のみである。富山県東部では甕 A の比率は白江式期までは高く、古府クルビ式期ではほぼ淘汰される傾向がみられ、当集落では白江式期には甕 B への移行が急速に進んだと考えられる。口縁端部を肥厚させないが、端部内面に面を取る布留甕の様式を一部受容した布留傾向・布留系口縁の折衷型の蓋は出土するものの、布留甕や山陰系は皆無で、近江・東海系の S 字甕や台付甕も出土せず、外来系甕の受容がみられない。

壺：月影式期から継続する在地系の壺 A は皆無である。出土量は少ないものの、壺 B・D・E がそれぞれ小型・中型・大型壺の領域で絶対的な割合を占める。壺 B は直口口縁壺で小型の精製品である。口縁部が膨らみ立ち上がり、端部に向かって内湾するものと、直線的に立ち上がるものがある。比率は 22% を占める。壺 C は短頸壺で口縁が端部に向かって内湾気味に立ち上がる。外面に赤彩を施すものもみられる。壺 D は広義の広口口縁壺で、口縁端部に面を取るものや、月影式の大型壺に系譜を持つとされる、頸部に刻入突帯を巡らすものが一定量出土した。中型壺の主体をなすと考えられるが、出土比率は 26% である。なかでも壺 D3 は口縁端部外縁とともに内面にも上方に向かって面をとり、布留甕の口縁形態を受容した折衷型であり、畿内の影響の地域的特色が現れたものととらえられる。壺 E は棒状浮文を口縁端部に施した有段口縁と球胴型体部を持つ東海系の壺で、大型のものが多い。口縁部が確認できるものは 3 個体のみであり、そのほかに体部のみ出土したものが 3 個体ある。

高杯：月影式期に系譜を持つ在地系の高杯が 4 分の 1、残りを外来系が占める。残存率の高いものは全て外来系であり、出土比率以上に外来系の高杯が占める割合は高い。高杯 B1 は、ほぼ水平な杯底部から内湾気味に立ち上がる杯と「ハ」の字状の脚部を持つ。杯部が小型で椀状のものを B1a、大きく拡がるものを B1b とした。出土比率は B1a が 27%、B1b が 14% 出土している。B1b の杯部の最終的なミガキが縱方向のものは白江式期、横方向のものは古府クルビ式期に増加するとされており、出土

した高坏 B1 の約 80%が縦方向である。高坏 B2 : 坏部が丸楕状で開脚高坏のものを B2a、脚底部が下部で強く屈曲し広がるものを B2b とした。出土量は B2a が 5 点前後、B2b が 2 ~ 3 点である。

器台: 外来系の小型器台 A への移行が進み、3 分の 2 を占める。器高 10cm 前後の外来系小型器台で、ミガキ調整を丁寧に施した精製品が多い。口縁端部に面を取り、端面に綾杉文を施したものもみられる。受部底部から脚部への穿孔を施さない小型器台 B が 1 点出土した。県内の出土事例は少ない。器台 B は月影式期以前に導入された器台の系譜を持つもので、有段口縁器台 C1 が 1 点、装飾器台の系譜で受部に円孔を穿つ退化形態の器台 C2 が完形に近い状態で 1 点出土した。

以上、古墳時代初頭前後の土器について概観した。全体をみると、「く」の字口縁壺、外来系の高坏・小型器台が高い割合を占める。壺は容量により盛行する器形は異なるが、いずれも白江式期以降に盛行するものである。有段口縁を持つものは退化形態のものがみられる程度で、ほぼ払拭されている。

古府クルビ式期に現れる布留傾向壺はないが、その口縁部形態の特徴が壺 D3 に折衷様式として受容されたことが確認できた。

のことから当調査区の出土遺物の特徴は第一に、白江式期新相から古府クルビ式期の土器群にもかかわらず、壺 A がほとんど出土していないこと、第二に県内で出土事例が少ない壺 F(台付壺) や蓋 B(有鉢筒状蓋) などが含まれている一方、残存率の高い台付装飾壺や装飾器台などはみられないことである。

第一の点をみると、富山東部地域に位置する新堀西遺跡など月影式期からの長期縦統集落では、古府クルビ式期以降も高い割合で有段口縁の土器が残存する傾向がある。白江式期～古府クルビ式期の集落にもかかわらず壺 A が淘汰されている点からは、外来系の集団の入植の可能性を考えられ、この場合、出土遺物の特徴から、能登方面の可能性が高い。一方、1995 年度調査区から出土した土器は第 11 表のグラフにみられるように壺 A や壺 A の比率が高く、月影式期の色合いが濃いことから、方墳「ちょうちょう塚」を築造した地域の拠点的集落が弥生終末期から白江式期にかけて発展をつづけ中心部が沼に沿って集落が東へ移動または拡張した可能性が推察できる。

第二の点をみると、当調査区で出土した器種の土器と同様のものが出土している遺跡として、藏野町東遺跡がある。藏野町東遺跡は弥生時代後期後半の法仏式期から古墳時代初頭の白江式期までの期間を通じて自然流路における祭祀が行われたとされる遺跡で、細頸台付壺や装飾器台が多量に出土している。水辺の祭祀場という同様の性質を持つ遺跡にもかかわらず、当遺跡では残存率の高い装飾器台、それと併行する時期に富山県北東部で導入される台付装飾壺のいずれも出土していない。また、これら「格式の高い」祭式土器は 1995 年度調査区でも出土していない。あわせて周辺の当該期の遺跡をみてみると、大規模な調査が行われていなかったためという可能性はあるものの、いずれの器種も残存率の高いものは出土していない。その一方で、水系の異なる新堀西遺跡では装飾器台が 3 個体以上、台付装飾壺が 5 個体以上出土している。以上のことから、富山県東西の地域差に加え、より狭い範囲での受容の違いが存在したと推察出来る。

第3節 折衷型土器について

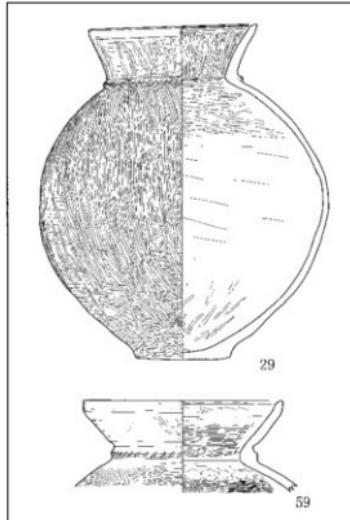
当調査区 SD01 及び SD55 から、古墳時代遺構出土土師器器種分類（第5図）壺 D3 に分類した折衷型土器が出土した。特徴は①口縁部内面に面を取り技法と、②頸部に刻入突帯文を巡らす技法を併用する点である。SD01 から出土した 29 はやや外傾気味に口縁が立ち上がり、端部外側に細く面を取る。中型壺で体部は球胴状を呈し、底部は平底で安定性を志向した器形である。SD55 から出土した 59 は、29 に比べ口縁の傾きが急で、端部外面にしっかりと面を取る。体部は出土しておらず形態

は不明である。①は畿内系の布留甕の特徴であり、口縁部を肥厚させないことから布留O式の影響もしくは意識的に受容していない可能性が指摘できる。前述したように、布留傾向甕、布留系甕は八町II遺跡や利田横枕遺跡、新堀西遺跡等で出土しており、古府クルビ式期には富山県東部で受容されることが確認できる。当調査区では布留系甕は出土しないにもかかわらず、口縁部の技法のみ受容している点が特徴であり、同様の技法を用いた折衷型甕の出土事例は周辺の遺跡では確認できなかった。②の頸部突帯文は東海系の大型甕に系譜を持つもので、同様の器種器形で口縁部内面に面を取らないものは北陸西部地域で確認されており、富山東部には能登からもたらされた可能性が指摘されている（田中・中谷 2001）。また刻入突帯文は甕（27・28）などにもみられるほか、器台（49・55・142・147）や蓋（132）など精製土器に多用されており、当調査区の集落で好んで使用した技法であると考えられる。

こうした折衷型の存在は、在来系から外来系、特に畿内系への移行期である白江式期・古府クルビ式期にみられるものであり、他の集落で確認できない器種（折衷型土器）の存在は、当集落が能登を中心とした他地域との交流が盛んであることとともに、集落や地域の規制やまとまりが緩やかで、外来系の影響の受容を主体的に選択できる状況にあったことを証明するものと考える。（朝田）

参考・引用文献

- 池野正男 2012 「越中の古墳時代土器様相」『大境』第31号 富山考古学会
 越前慎子 1996 「梅原湖底遺跡出土中世土器皿の編年」『梅原湖底遺跡発掘調査報告』財団法人 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
 河合忍 1997 「IV考察 4考察 c 鰐形土器の口縁部形態類別構成比」『翠尾I遺跡』八尾町教育委員会
 高橋浩二 1995 「越中ににおける古墳出現期の様相」『大境』第17号 富山考古学会
 田嶋明人 1986 「IV考察 漆町遺跡出土上器の禍牛年の考察」『漆町遺跡I』石川県埋蔵文化財センター
 田中幸生・中谷正和 2001 「越中ににおける古墳出現前後の地域別土器編年・彫形土器を中心に」『靈気模』
 藤田富士夫 2004 「古代越中新川郡の「道」と「郷」に関する若干の考察」『人文社会学研究所年報』No.2 敬和学園大学
 藤田富士夫・鞠見和夫 1981 「ちょうどう塚の概要と若干の考察」『大境』第7号 富山考古学会
 吉岡康綱 1994 「中世須恵器の研究」吉川弘文館
 財団法人 大阪府文化財センター 2003 「古墳出現期の土師器と室代 シンポジウム資料集」
 小杉町教育委員会 1999 「HS-04遺跡発掘調査報告」
 庄内式土器研究会 2003 「庄内式土器研究X VI- 庄内式併行期の土器生産とその動き-」
 立山町教育委員会 2001 「利田横枕遺跡 -主要地方道富山立山魚津線地方特定道路事業に伴う調査報告書-」
 富山市教育委員会 1998 「富山市豊田大塚遺跡発掘調査概要」
 富山市教育委員会 2006 「富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書」
 富山市教育委員会 2006 『富山市打山遺跡発掘調査報告書 -一般県道四方新中茶屋線住宅基礎整備事業に伴う発掘調査報告-』
 (財) 富山県文化振興財団 2012 『水上遺跡 赤井南遺跡 安吉遺跡 塚田遺跡 本江大坪I遺跡発掘調査報告』
 (公財) 富山県文化振興財団 2013 『上梅沢遺跡 水橋全広・中馬場遺跡 新堀西遺跡発掘調査報告』
 (公財) 富山県文化振興財団 2013 『下黒田遺跡 下佐野遺跡 頭訪遺跡 鹿野町東遺跡 鹿野町遺跡 堀方南遺跡発掘調査報告』
 妇中町教育委員会 2003 『富山県婦中町 鎌治町遺跡発掘調査報告』
 八尾町教育委員会 1997 『翠尾I遺跡発掘調査報告書』



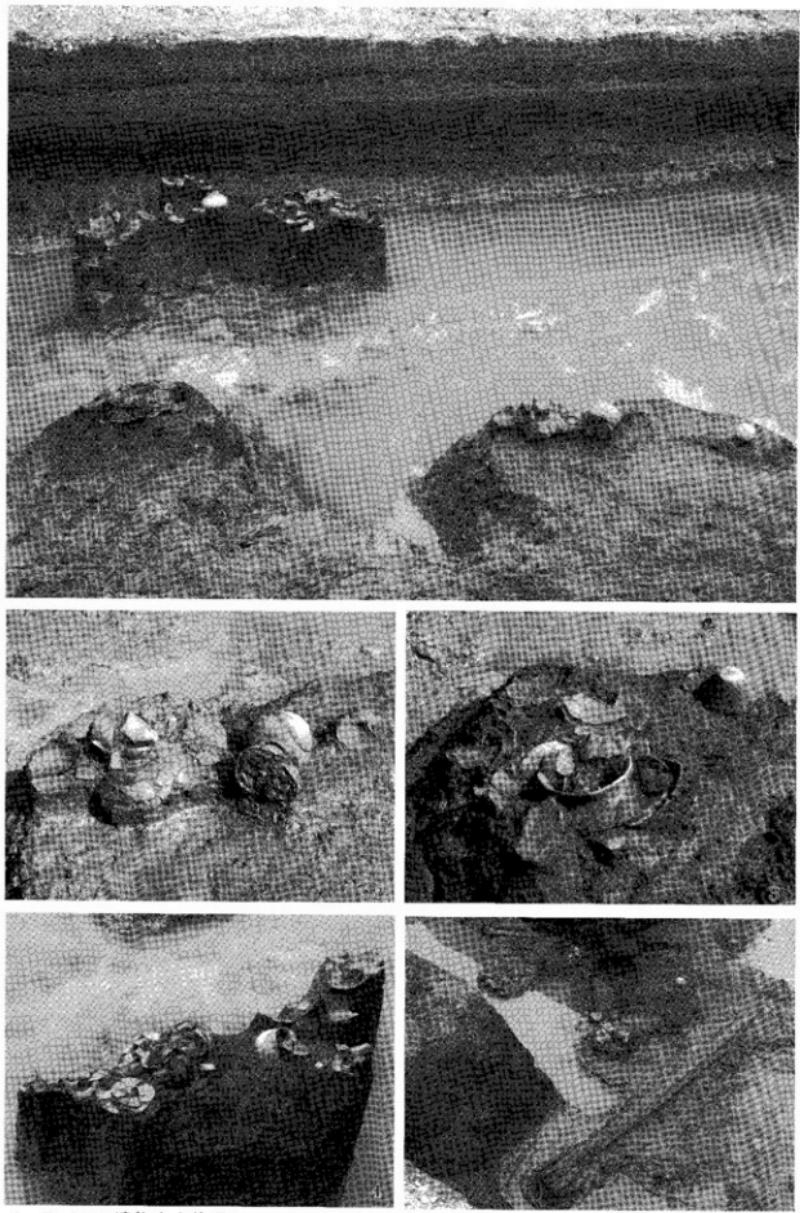
第33図 折衷型土器



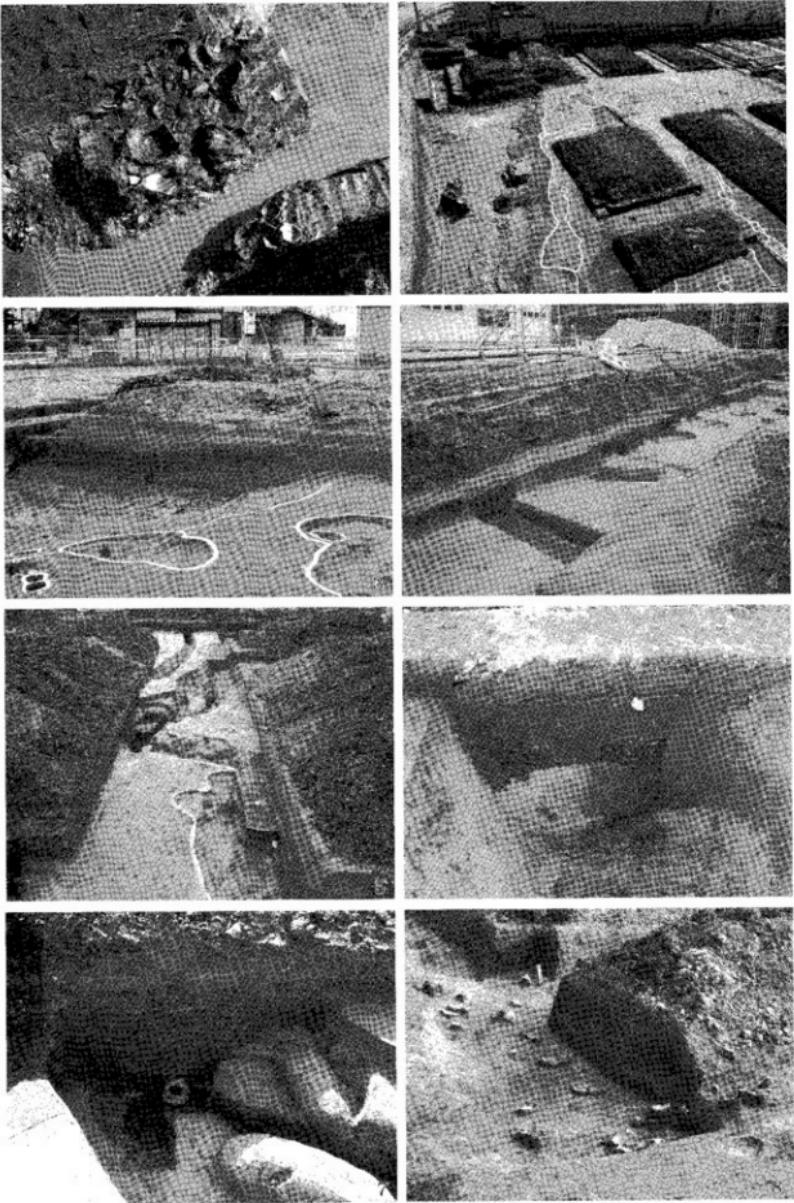
上:遺跡周辺の航空写真(昭和22年7月撮影) 下:第1工区全景(北から)



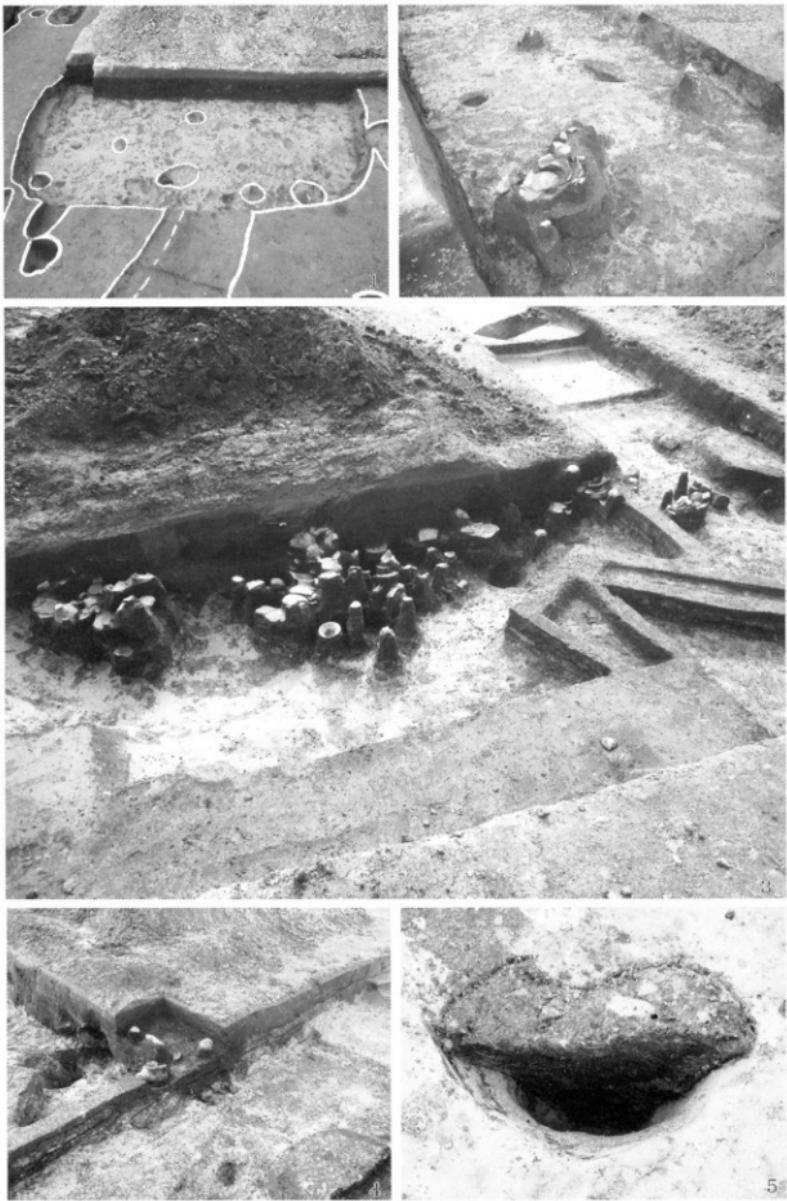
調査区全景(第1・第2工区合成／真上から)



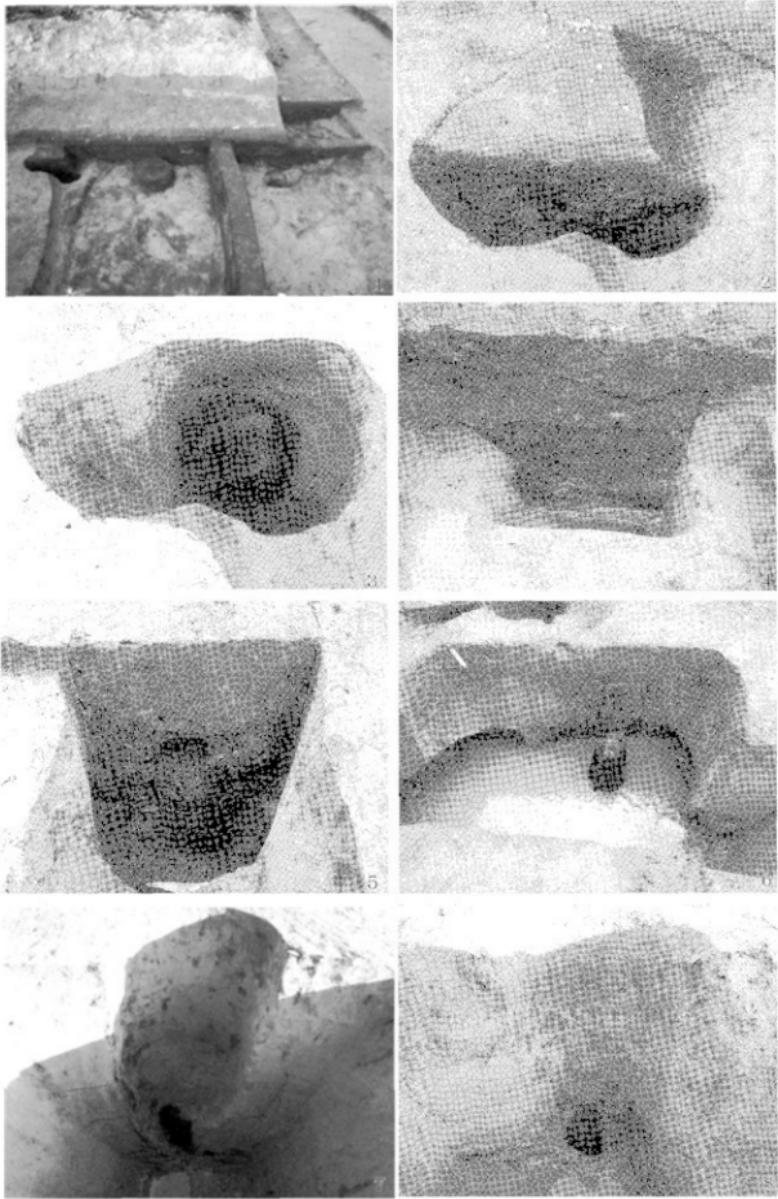
1~5. SD01遺物出土状況(1~3. 南から 4. 北東から 5. 北西から)



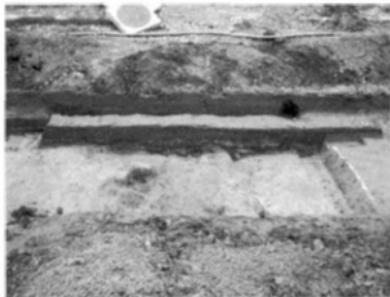
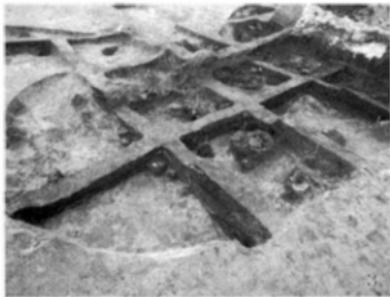
1. SD01遺物出土状況(北西から) 2. 第1工区検出状況(北西から) 3. SD01中央東壁(西から)
4. 第1工区西壁(南東から) 5~7. SD55(2・3. 東から 4. 北から) 8. SK32遺物出土状況(北から)



1. SI61完掘(東から) 2. SI61遺物出土状況(南東から) 3. SI107遺物出土状況(北東から)
4. SI107(北から) 5. SK166(北東から)



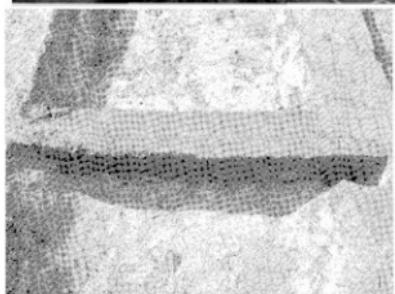
1. SB3 - SP15 · SD14 (南から) 2. SB3 - SP15 (南から) 3. SB3 - SP15 (真上から)
4. SB1 - SP25 (北から) 5. SB1 - SP26 (西から) 6. SB1 - SP27 (南から)
7. SB2 - SP52 (西から) 8. SB2 - SP53 (西から)



1. SK35遺物出土状況(東から) 2. SK35完壇(東から) 3. SK35(北東から)
4. SX95西壁(南東から) 5. SX157西壁(東から)



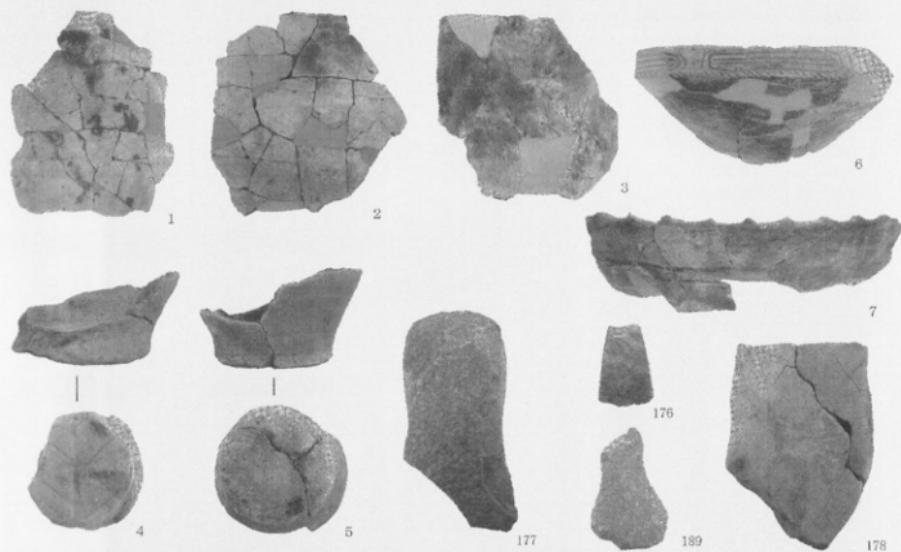
1



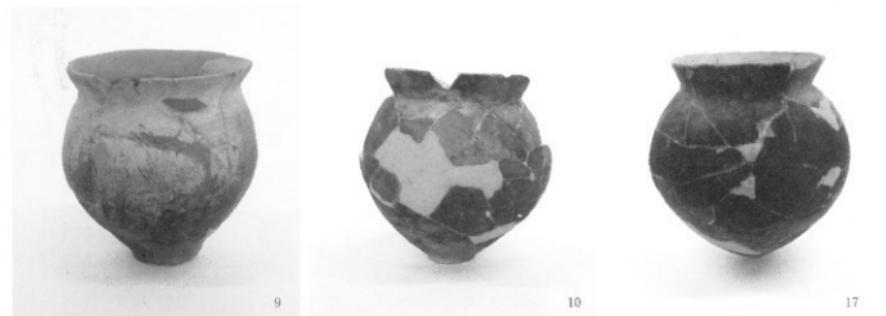
1. 第2工区全景(西から) 2. 第2工区完掘(西から) 3. SD188・SD170(東から)
4. SD169・SK218(東から) 5. SD94(西から)



1. SB4(南西から) 2. SK178遺物出土状況(北西から) 3. SX201(南から)
4. SX201遺物出土状況(南東から) 5. SD170・SD14(東から) 6. SD170・SK265(西から)
7. 調査区中央完掘(南から) 8. 作業風景(西から)



土器・石器 SD01



9

10

17



18

26

29



8



11



12



13



14



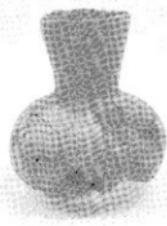
15



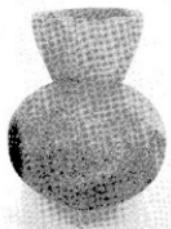
19



22



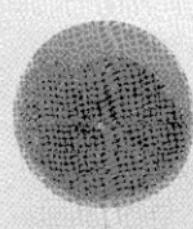
23



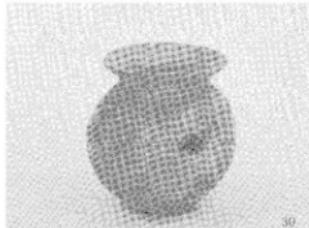
24



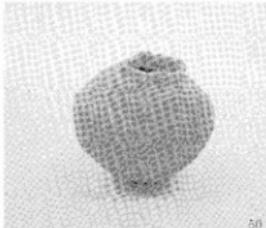
31



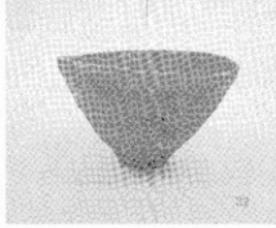
32



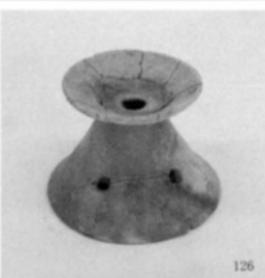
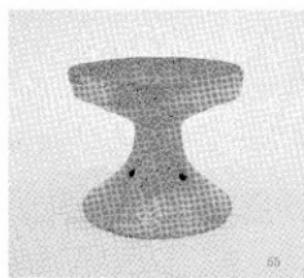
30

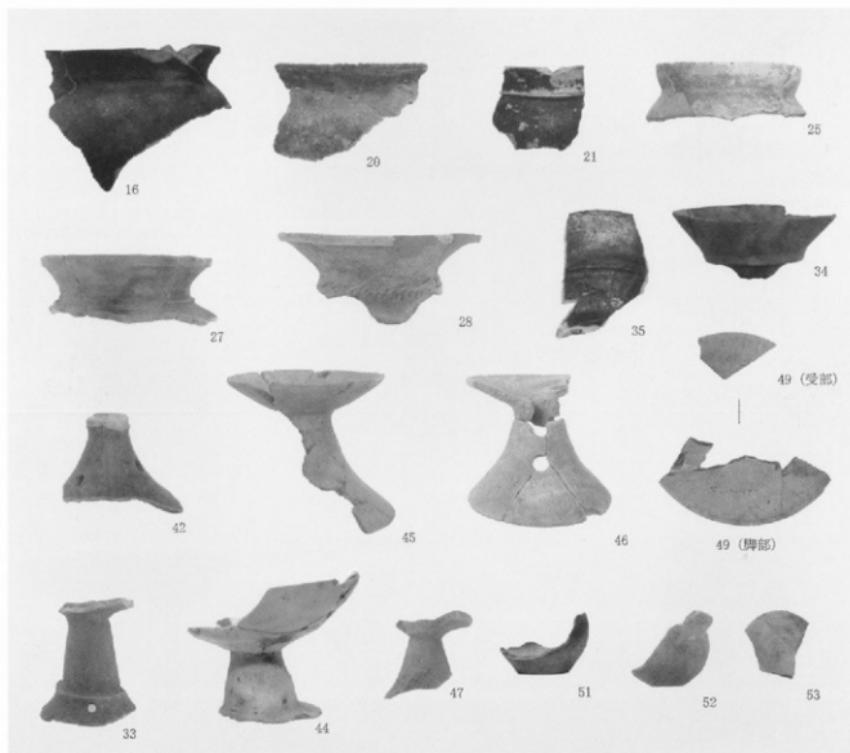
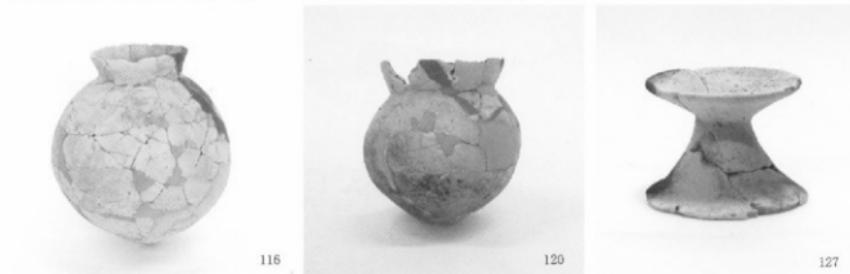


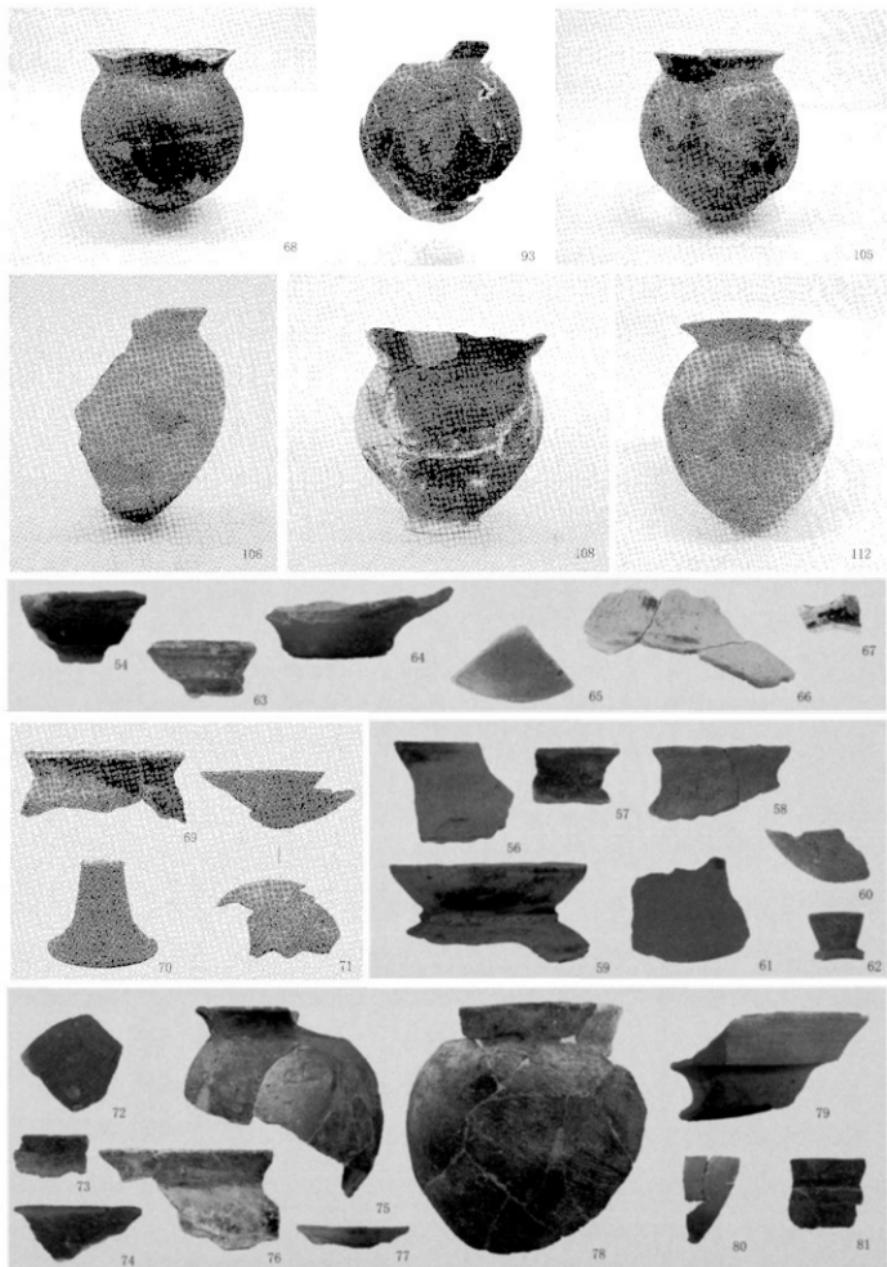
33



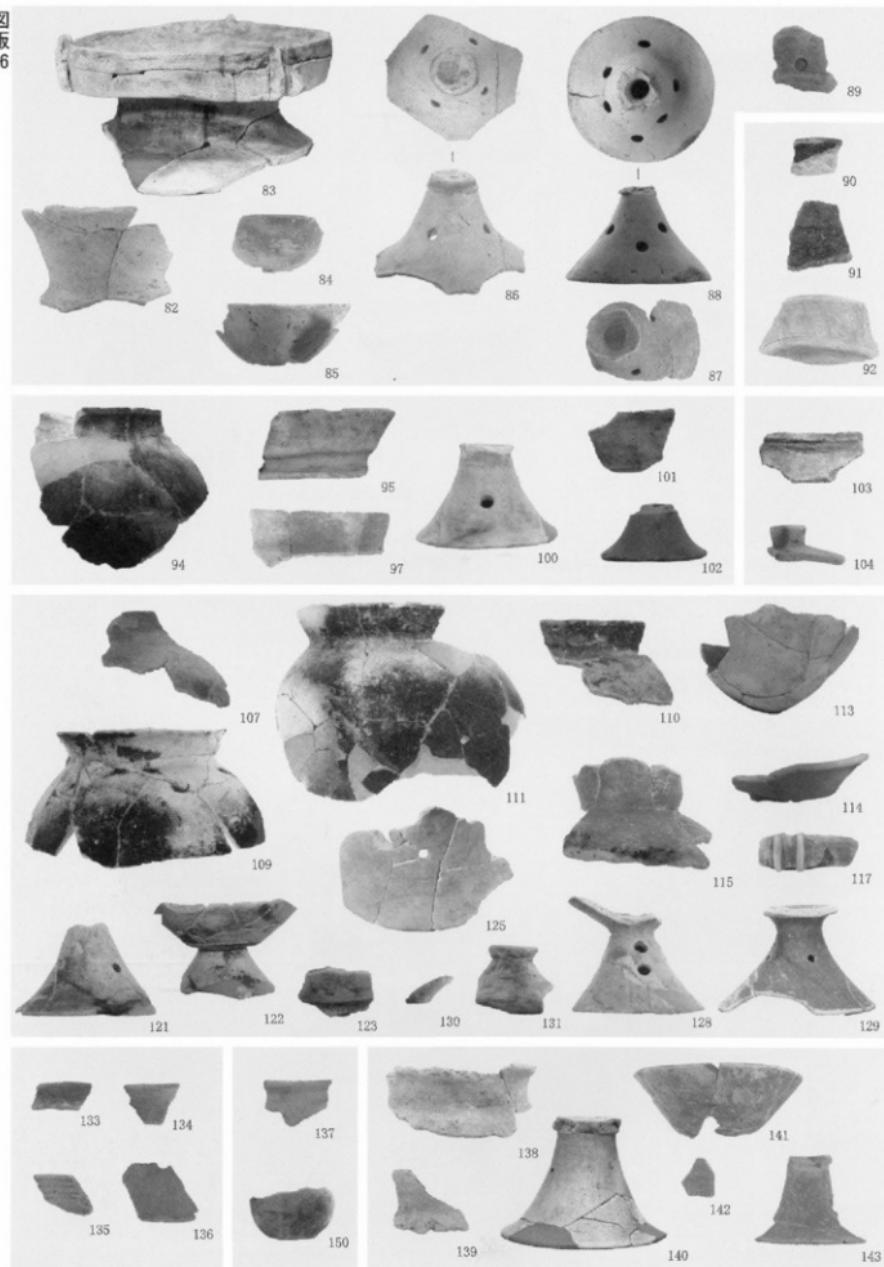
34



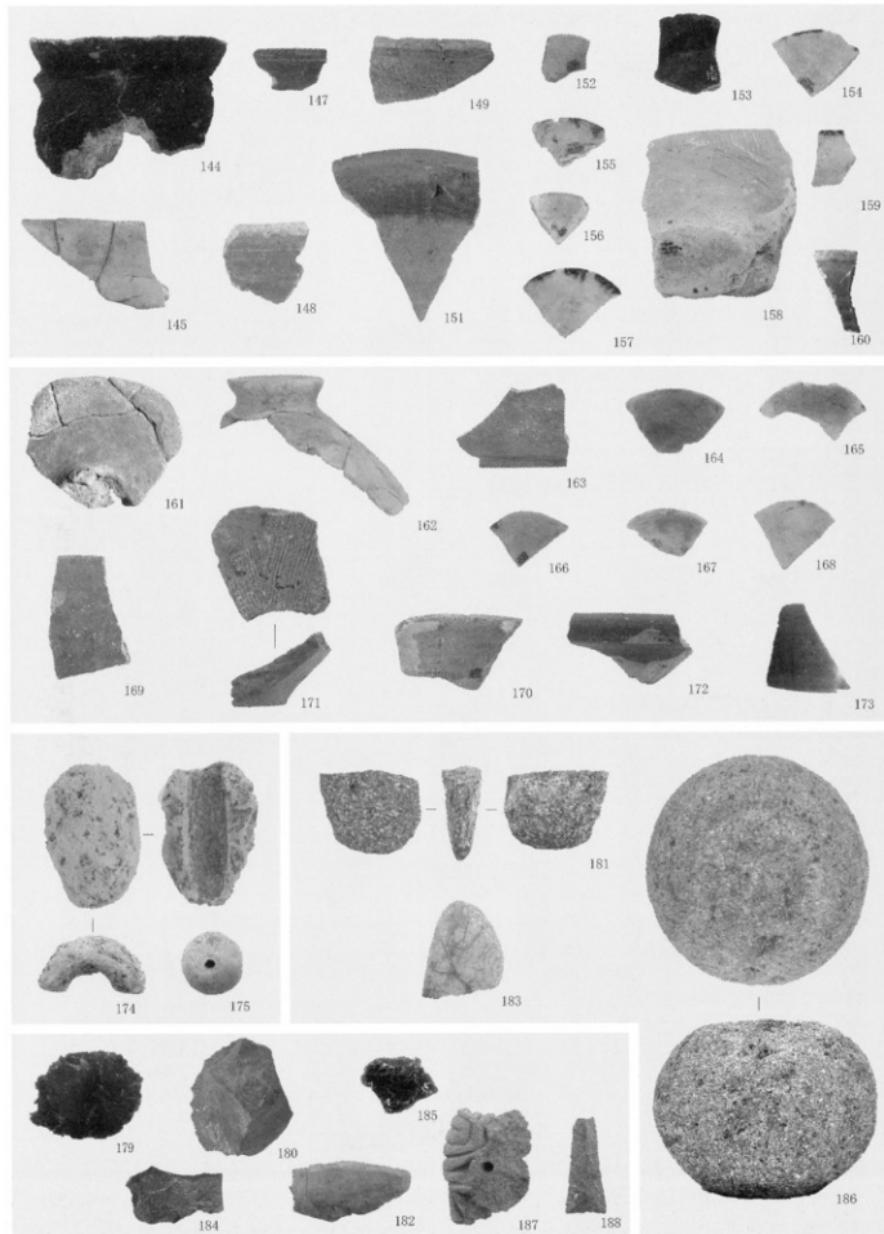




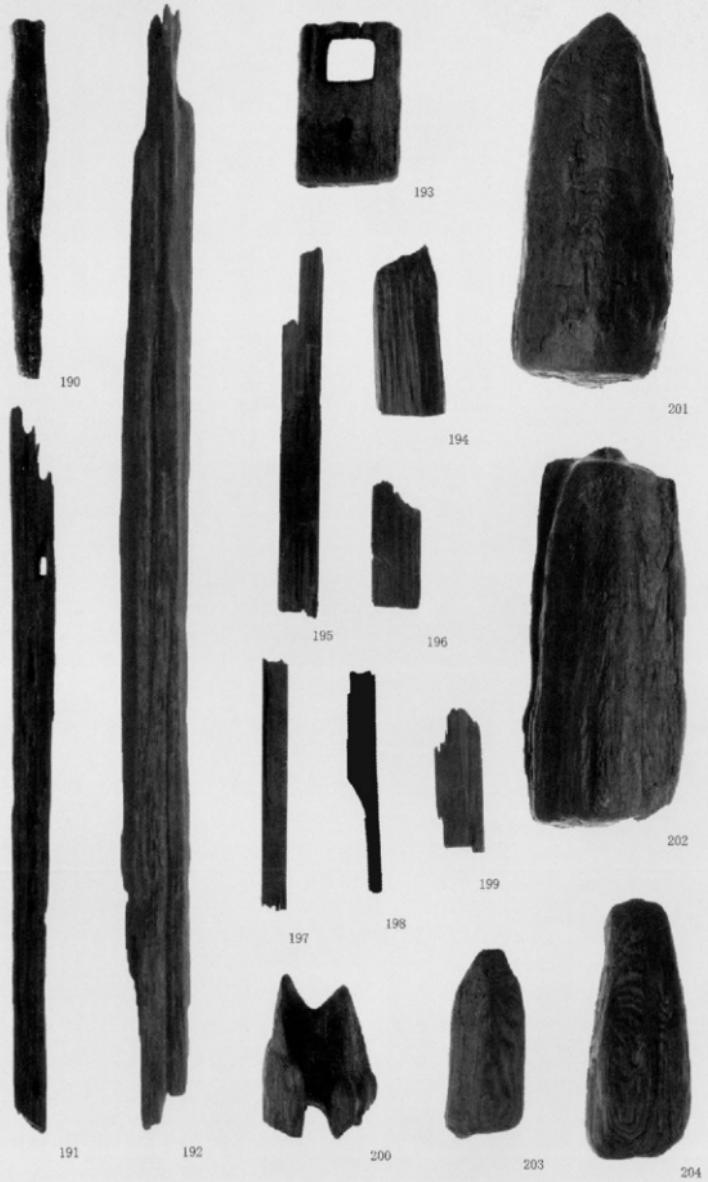
土器 SD01 SD51 SD55 SD66 SD72 SD98 SI61 SH107 SK32 SK35



土器 SI107 SB3 -SP8 SB1 -SP26 • SP27 SK32 SK34 SK35 SK36 SK48 SK178 SX157



土器・陶磁器・土製品・石製品 上：古代以降造構・II層出土土器・陶器 下：土製品・石製品



木製品 SD01 SB3 -SP15 SB1 -SP26 SB1 -SP27 SB2 -SP52 SB2 -SP53

報告書抄録

ふりがな	とやましとよたおおつかいなかよしわらいせきはくつちょうさほうくしょ					
書名	富山市豊田大塚・中吉原遺跡発掘調査報告書					
副書名	DSG WORLD 豊田店駐車場棟新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告					
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告					
シリーズ番号	58					
編著者名	堀内大介・朝田 要・橋 日奈子					
編集機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター					
福集機関住所	〒930-0091 富山市愛宕町1丁目2-24 TEL.076-442-4246					
発行年月日	西暦2013年(平成25年)7月25日					

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	度数	度数	m ²		
豊田大塚・中吉原遺跡	富山市豊田本町 3丁目地内	16201	0246	36° 43° 35°	137° 14° 12°	20120921 ~ 20121031	1,031m ²	駐車場 棟新築

収録遺跡名	種別		主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
	散在地	集落				
豊田大塚・中吉原遺跡	散在地	繩文時代晚期	沼		縄文土器、打製石斧、磨製石斧、石鏃、石皿、砾石	
		古墳時代前期	掘立柱建物、竪穴建物、溝、沼、土坑		土師器、部材等加工木、柱根	
	集落	平安時代	溝、土坑、柱穴、道路状遺構		土師器、須恵器、板材	
		鎌倉時代	掘立柱建物、貯水池状遺構、溝、壘、土坑、柱穴		珠洲、中世土師器、中国製陶磁器、水輪(五輪塔)	

縄文時代晚期の遺構は、調査区北端に位置し、約150m離れた1995年度調査区で検出した沼地の延長の可能性が高い沼SD01のみである。沼からは縄文時代晚期の土器がまとまって出土しており、当該期における近隣地域での活発な活動がうかがえる。

古墳時代前期の遺構として、沼SD01およびその湖畔の立地に成立した集落の遺構である竪穴建物・竪穴状遺構や掘立柱建物、大型土坑等がある。掘立柱建物の柱の放射性炭素年代測定結果が、弥生時代中期のものがあるが、遺物が出土していないことから古木効果や材の転用の可能性が高く、集落の中心となる時期は古墳時代初頭～前期であると推定できる。前回調査区では沼の肩部で木組造構や木道、井戸等を検出するとともに、弥生時代終末期～古墳時代初頭(影形式～白江式期)の土器が多量に出土した。今回調査区の沼の肩部では古墳時代初頭～前期(白江式～古府クルゼ式期)の土器集中廃棄が確認でき、南側に立地する同時期の土器が多量に廃棄された大型土坑とほぼ同時期に水辺の祭祀が行われたと可能性が高い。このようなまとまった量の遺物の出土および遺物の時期差は、集落の拡大または中心の移動の結果であり、当集落が長期間存続したと推定できる。これにより、約450m北東に立地する古墳時代前期の方墳「ちようちよう塚」を当集落の長の墓とする地域の拠点的集落と考える。

平安時代の遺構として、道路状遺構があり、幅5.5mの間隔で東西方向に平行に伸びる。近隣の同時期の遺跡の調査結果から、当遺跡内を横断し、郡衙や駅家、莊園などを結ぶ主要な道路であると推察でき、1995年度調査区で検出した溝から出土した律令祭祀具は、交差点付近で行われた祭祀の関連遺物である可能性がある。

鎌倉時代の遺構として、貯水池状遺構とそれに連結し用水的な役割を果たしたと推察した溝、そこから北側に拉がる鋪溝群(溝)、南側には雨落ち溝を伴う1×3間の側柱建物がある。そのため、溝の北側に生産域、南側に居住域が並がっていた可能性が高い。

要 約

富山市埋蔵文化財調査報告書 58

富山市豊田大塚・中吉原遺跡発掘調査報告書

- DSG WORLD 豊田店駐車場新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務 -

発行日 2013（平成25）年7月31日

発行機関 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター

〒930-0091

富山市愛宕町1丁目2-24

Tel 076-442-4246

Fax 076-442-5810

E-mail : maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印 刷 中央印刷株式会社

